

女性新書

源氏物語の女性

竹村義一

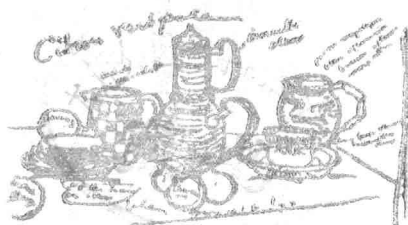
KÔFŪKAN

光風
館

女性新書

源氏物語の女性

竹村義一



光風館版

昭和二十二年八月二十日 印刷
昭和二十二年八月二十五日 發行

著者略歴

東京帝國大學文學部國文學科卒業
專攻源氏物語研究

源氏物語の女性

著 者 竹 村 義 一
所 有 權 石 崎 宋 一

著 者 者

竹 村 義 一

發 行 者

上 原 正 文

印 刷 者

石 崎 宋 一

發 行 所

光 風 館

定 價 三 五 圓

配 給 元

日 本 出 版 配 給 株 式 會 社

東京都千代田區神田區神保町二丁目九番地

東京都千代田區神田區神保町一丁目五番地
電話(長)神田三〇八七番
電話(長)東京三二七番
掛號口東京三二七番
會員掛號A二二一一八一

源氏物語は今からおよそ九百四十年ぐらゐる前、一條天皇の中宮彰子に仕へた一女性、紫式部の作である。この物語は全篇五十四帖からなり、初めの四十一帖は、天皇の御子として生れ臣籍に下つた光る源氏といふ、美の化身であり、理想の男性である主人公の多事多彩な生涯を描き、後の十三帖——そのうち最後の十帖を特に宇治十帖といふ——は、源氏の子、宿命の貴公子薫君を中心とした長篇作品である。

この時代は道長を代表とする藤原氏の勢力が、その頂點に達した時で、貴族文化の爛熟期であつた。「この世をばわが代とぞ思ふ望月の缺けたることのなしと思へば」と道長が得意の境を詠んだといふ、その時代なのである。缺けることのない満月は、しかしもはや缺けはじめるほかはないのであつた。絶頂まで上りつめた王朝貴族の權力は、すでに下り坂に向ふべく運命づけられてゐた。その時代の思潮は現世享樂主義であり、この作品も主として光る源氏とかれをめぐる多くの女性との戀愛繪卷である。私はこの長い物語の數多くの登場人物の中から、主要な女性の人物二十人を取りだして、作者の描いた王朝女性のすがたを明らかに

しようとした。そしてこの「夫多妻の時代の女人の憐みの本質を探索しようとした。

源氏物語は次の三つの點で、ただに日本文學の最高峯であるばかりでなく、世界文學のその一つであるといふことができる。第一は、その成立年代からいつて、ヨーロッパの近世文學の鼻祖ともいふべきダンテの「神曲」、ボツカチオの「デカメロン」に先立つこと實に三世紀以上であること。第二に、それは人間といふものを描いてゐること。それは近世に入つて本居宣長が、文學を中世の宗教思潮や封建的道學思想から解放しようとした「もののはれ論」によつて明らかにしたところであり、その文藝解放論が即ち人間解放論であつたのも、源氏物語が人間性に觸れてゐることによるのである。第三に、それが女性の手になつたといふこと。

この世界に誇るべき大作が、はたして今まで人々によつて曲りなく理解され、社會から正當に取扱はれてきたであらうか。残念ながら、さうはいへないのである。この小菴が、一般の文學を愛する人々に、この偉大なる作品の眞實のすがたを把握するため、直接原典をひもとくよすがともなれば何よりの幸である。

著者しるす

目

次

まへがき

一✓桐壺の更衣

二✓空蟬

三✓夕顔

四✓末摘花

○五✓葵の上

六✓六條の御息所

七✓朧月夜の尙侍

八✓花散里の君

九✓秋好中宮

✓○✓權の君

○一✓玉鬘

一

四

四

三

元

元

四

三

四

五

六

一二✓源の内侍……………六

一三✓近江の君……………六

〇一四✓藤壺……………七

一五✓明石の上……………七

〇一六✓紫の上……………六

一七✓女三の宮……………一〇

一八✓大君……………一三

一九✓中の君……………一三

〇二〇✓浮舟……………一三

源氏物語年譜抄……………一五

源氏物語系圖抄……………一九

一 桐壺の更衣

一

源氏物語五十四帖の巻をひらいて、先づ讀者を哀傷の調へに引き入れるのは、桐壺の更衣（キリツボノコイ）が宮廷から退出する際の帝との別離の場面であらう。

限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

と更衣はその感懷を詠じた。現世には限りがある。しかも生きたいと願望する人間の情意は切實である。宿命の壓力に堪へかねて、曉の星よりもはかなく消え去つた桐壺の更衣——光る源氏の母は、そもいかなる女性であつたであらうか。

彼女はいとやんごとなき際——さう高い身分ではなかつた。このことが丁度のちに明石の上（アカシノウエ）が古受領（もとの國守）の娘である宿命に惱まねばならなかつたと同じ苦惱をなめねばならなかつたのである。父は大納言であつたが、早く世を去り、母北の方と二人のわびしい暮しであつて、取り立ててはかばかしき御後見——しつかりした後楯もなかつた。宮仕へをして主上の愛を受けて勢を張るには、めくまれ境遇ではなかつた。帝の周圍には多くの女方がゐた。その中でも今を時めく右大臣を父にもつ弘徽殿の女御（コキデンノニョーゴ）はすでに男の御子も生まれ、押しも押されもせぬ地位を占めてゐた。しかし帝の

御寵愛はこの權門を背負ふ一の御子の母女御でさへ遙かに及ぶところでなかつた。ここに源氏物語の冒頭の悲劇が胚胎する。

愛情といふ人間的なものと身分的な制約との磨擦はますます強くなり、弘徽殿の女御を首班とする女方の嫉妬と敵視は激しくなつて行き、更衣は日夜いばらをふむ思ひに身も細るばかりであつた。さうした更衣の頼り所のない可憐さを見るにつけて、帝の愛情と庇護は深められてゆくのであつた。かうしてこの二つの對立は相互に因となり果となつて渦巻き流れていつた。この奔流に終止符を打つたのは更衣の死であつた。彼女を死に到らしめたのは、もとよりその肉體的な弱さであつたが、これは人間的なものの敗北であり、權勢の勝利であつた。

朝夕の宮仕へにつけても、人の心を動かさず、恨を負ふ積りにやありけむ、(更衣ハ)いとあつしく(病氣ガチニ)なりゆき、物心細げに里がち(實家ニ下リガチ)なるを、(帝ハ)いよいよ飽かず哀れなるものに思はして、人のそしりをもえ憚らせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

帝の更衣に對する愛着の度合と、更衣の社會的地位とが、一致しないその間隙に、この愛情を否定する對立物が現れ、この愛情を壓迫し、彼女を抑壓するのである。その重さに堪へかねて彼女ははかなく死んでゆくのである。

更衣の性格はつまじさとはかなざとによつて表象される。

いと匂ひやかに、美しげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれと、物を思ひしみながら、言に出でても聞えやらず、あるか無きかに消え入りつつものし給ふを……。

息も絶えつつ、聞えまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば……。

これは最初に述べた更衣の死の間際、宮中を退出する折の、帝との別離の場面の彼女の姿である。ここに現れた更衣の屬性は、つつましさ、内氣、弱さ、はかなさである。あるかなきかに消え入るやうな姿は、晩秋の夜霧にうるむ火影よりもほかない。つねに心細げであり、肉體はかよわく、聲音はかほそかつた。つやかに美しい容貌と目易い心ばせは、つつましさの根ざし、はかなさにふちどられてゐる。このなだらかな目易さ——物柔かな見るものに好感を抱かせる人間的な雰圍氣を、作者は物語を通じて女性として具備すべき第一條件にあげてゐる。この物やはらかなつつましさを彩るのは、そのぼつと匂ふやうな美しさである。

太液たゐの芙蓉、未央みづかの柳も、けに通ひたりし、容貌かたち（楊貴妃ノ美貌）を、唐めいたる粧ひは、うるはしうこそありけめ、（更衣ノ）懐かしう、らうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。

これは更衣の死後の帝の追憶であるが、それは唐風の端麗な美しさではなく、ものやはらかな親近性をもち、愛せざるにゐられないやうな可憐な美であつた。その受動的な愛らしさは、更衣の死後弘徽殿の女御が、久しく主上の御座所に近い上の御局にも上らず、月の面白いのに夜の更けるまで、管絃の遊びをする、その強い性格と對照的に描かれてゐる。

終始、彼女ははかなさの象徴であつた。黄昏に花を開き、夜明けとともにしほむ月見草にもたとふべき薄命の女性であつた。花の朝、紅葉の夕、月の夜を詩歌管絃に暮し明かした大宮人の絢爛たる長袖のかげに、ひそかに忍びよる暗影は掻き消さうとしてもできないところであつた。明暗は表裏の如く、五十四帖を通してなひまぜられてゆくのである。

二 空 蟬

一

母の桐壺の更衣がはかなくこの世を去つたのは源氏が三歳の時であつた。帝は悲しみに沈まれるが、更衣によく似た藤壺（フジツボ）といふ女性を得て心が慰められる。美しくして氣品のあるこの藤壺へ、源氏はひそかな思慕の情を捧げる。やがて元服して左大臣の娘葵の上（アオイノウエ）を妻とするが、その氣位の高いとりすぎました姫君に、どうしても親しみが持てず、源氏の心はみだされないのである。

それは源氏が十七歳の夏のことであつた。若葉の香のむせるやうな雨上りの一夜、源氏は宮中から下つて、久しぶりで左大臣の邸の葵の上のもとに行くが、方角が悪いといふので方違あたがへに、家來筋の紀の守（キノカミ）の中川の家ウツセミに泊りに行く。そこに紀の守の父、伊豫の介の若き後妻空蟬（ウツセミ）に逢ふ。女は源氏のあながちな振舞を恨み、その後源氏の執拗な求愛を拒みつづけるのである。果して彼女は源氏に對して如何なる心情を抱いたであらうか。若き光る源氏が理想の女性を求めて上る愛情遍歴の旅に、最初に出遇

つた女人空蟬は、そも如何なる女性であつたか。

山手の閑靜な邸町に、小官吏の娘として生まれ、女學校を出てからは、琴、生花の稽古に日を過し月を送るうち、父は勤めを引いてからますます募る交際嫌ひ、盆栽を相手に浮世とは没交渉、母は病身で引籠りがち、かうした家庭にあつて、いつしか年を過して氣のつく時はすでに婚期を逸してゐた。さういふ女性に大正年間から昭和初年にかけて私たちはよく出遇つた。容貌は目立つ方ではないが十人並、目鼻立ち
は花やかではないが整ひをもち、口もとは引き締つて眸の色は深く、體つきはどちらかといへば小柄で、
面長の顔を縁取る髪はさして多くはないが黒く、紫紺の矢絛がよく似合ふ。臙脂のパラソルを手に花の師
匠への行き歸りに、顔見知る大學生もあつたであらう。青年は學成つて、角帽脱ぎすて地方官として遠國
に赴任していつたであらう。梅、桃、櫻、芍薬に秋の七草といける花のめぐりも重ねて年毎に春は來る
が、わが身の春はいたづらに過ぎゆくのであつた。そして、いつしか、たまさかにある縁談は後妻として
のそれであつた。親子と人には思はれる夫のもとに、己が年とさして隔たらぬ娘たちを子として今は世を
思ひ諦めるのであつた。かくして彼女の青春は花開くことなくして埋もれた。初老に近い夫との間に靜か
な場合はあつても、かの若き日の胸のときめきも、熱い血潮のたぎりも、思つてはかない夢であつた。そ
こに夢ではないかと打ち驚かれたのは、若き日の行きずりに、淡い憧れを感じたそのかみの大學生、今は
少壯官吏として都に立ち歸り奇しくも隣り合はせて住むこととなつた。しかも妻や一人を置いての獨身暮

し。若しその人から若き日の面影が忘れかねるとの純情を打ち明けられたら、この若き人妻は果して心を揺り動かされないであらうか。燻りて結ばれし情炎はよく燃え上らずして終るであらうか。私の拙い筆は物語をいたく常套に墮せしめたけれども、これが空蟬の苦悶である。

二

『いとかく憂き身の程の定まらぬ、ありしながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我頼みにて見直し給ふ後瀬もやとも、思ひ給へ慰めましを、……(ホントニコノヤウニ不仕合せナ私ノ運命ガ、人妻ト定マラナイ昔ナガラノ乙女ノ身ノ上デ、コノヤウナ御愛情ヲオ受ケスルノデアツタラ、身ノ程モカヘリミナイウヌボレ心デ、コンナツマラナイ自分デハアリマスガ、後ニハ見直シテイタダケル時モアラウカト、自分ノ心ニ思ウテ慰メモシマセウモノヲ……)』

これは、その夜の源氏の愛の言葉に對する返事である。

いとかく品定まりぬる身の覺えならで、過ぎにし親の御氣はひ留まれる故郷ながら、たまさかにも待ちつけ奉らば、をかしうもやあらまし。(ホントニコノヤウニ受領——國守——ノ妻ナドニ身ノ程ガキマツテシマハナイデ、ナクナツタ親ノ面影ノ残ツテタル實家ニソノママキテ、ホンノタマニデモ、アノ方ノオ出デヲオ待チ申シ上ゲルノデアツタラ、タノシイコトデアラウ。)

これは源氏が再び空蟬に逢はうと、紀の守郎を訪問した時、源氏の御小姓役である、彼女の弟の小君(コギミ)が君からの秘密の文を持つて來た折、これを拒否して、小君をたしなめながらの述懐である。

美の化身、理想的男性として、今を時めく光る源氏の君の愛情を、未だ人妻としての境遇の定まらない乙女の頃、なつかしい親の家で、お受けできたなら、どんなにかうれいであらう。そして、ほんのたまにかお出でがなくても、一所懸命に君をお待ちするのは、どんなにかたのしいことであらう。だが、自分は人の妻である。しかも地位も低い受領の妻である。そして夫と呼ぶその人の家に起き伏しする身である。どうして君を待ち、君の愛情を受けることができよう。彼女の願望は源氏の愛情を受ける今の現実と、乙女であつた返らぬ過去とを一つに合はせたいと望むのである。そしてそれは不可能なほかない望みであることを彼女はよく知つてゐる。愛情といふ人間のなものと宿世といふ現実的な制約との對立、矛盾の中に空蟬の苦悶が胚胎する。この時代の女性として、このやうな時、源氏のやうな高貴な男性から、これほどまでの求愛を受けたならば、これを拒否するといふことは、時代の一般的な物の考へ方からいつて、また情趣を重んじたこの時代の人の心情からいつても、なかなか困難なことであつた。果して彼女は何れの道を選んだであらうか。

空蟬が源氏に逢うたのはたつた一度であるが、その夜の源氏のうちつけな振舞に空蟬は打ち解けた心を見せない。その心を和らげようとかずかずの言葉を連ねる源氏に、

『よし今は見きとなかけそ。(今宵ノコトハママヨ、アナタノ無理ナ御振舞ヲ、モウオ咎メシテモ仕方ノナイコトデス。シカシ私ニ逢ウタトハ、ヒトニハ言ツテ下サルナ。』

と、きつぱり訣別の言葉を投げつけるのである。ここに高度の知性と萬斛の情念の潮騒が潜むのである。

とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心むしんに心づきなくて止みなむと思ひ果てたり。(ト
ンナニ思ヒ返シテミテモ、今ハモウ人妻トイフ身ノ上デ、言ウテカヒノナイ運命デアルノデ、アクマデ
自分ヲ求メルアノ君ニ情知ラズノイヤナヤツダト思ハレテシマハウト思ヒキメテシマツタ。)

これは前にも述べた、源氏が二度目の紀の守邸訪問の際、源氏の文を持つてきた弟の小君を叱つた後の心
の中の思ひである。かうしてきつぱりと思ひ諦めながらも、彼女は自分の心の中から、源氏といふ存在を全
く抹殺したのではなかつた。世の女性の讚美的である光る源氏、しかも心ならずも逢うてしまつたその人
を、二度とあふまいと決心してゐても、どうして忘れきつてしまふことまでできようか。その後源氏からは
ばつたりと便りもない。とやはり彼女は物足りなくさびしいのである。

女も並々ならず傍痛しと思ふに、御消息も絶えてなし。思し懨りにけりと思ふにも、やがてつれなくて
止み給ひなましかば憂からまし。強ひていとほしき御振舞の絶えざらむもうたであるべし。よき程にて
かくて閉ぢめてむと思ふものから、ただならずながめがちなり。(女ノ方デモ源氏ガ近ヅカウトスルノ
ヲアクマデスゲナク拒絶シタノヲ一通リナラズ氣ノ毒ニ思ツテキル。君カラハソノ後全ク消息モナイ。
アソナニツレナクシタカラ、才懨リナサツタラウト思フ。ソレニシテモコノママ君ガモウアレツキリデ
諦メラレテ、何ノ事モナクスンデシマツタラ、ソレモ自分トシテハヤルセナイデアラウ。ソレカトイツ
テ、イツマデモ、アノ御無體ナオン振舞ガ絶エナイノモ困ルデアラウ。マア、イイ加減ノ所デ、コレク
ラキデ結末ヲツケヨウト思フモノノ、タダナラヌ物思ヒニフケリガチデアアル。)

ここに空蟬の燃えることになかつた情炎のひそやかな強さがある。女性の心情に於けるものあはれがある。二律背反に悩む情念の甘酸つばい揺曳がある。源氏の小君を通じての求愛を空蟬は拒否しつづける。遂に一夜小君を連れて源氏は紀の守郎に潜行する。この宵の空蟬の心情を作者は次のやうに述べてゐる。

女はさこそ忘れ給ふを嬉しきに思ひなせど、あやしく夢のやうなる事の心に離るる折なき頃にて、心解けたる寐だに寝られずなむ、晝はながめ、夜は寢覺めがちなれば……………。

これは思へどでなくて思ひなせどである。これは知的な努力である。つめた過ぎるとさへ思はれる知性的な努力と、血をふくやうな妖しくも夢幻的な情感とは、絶えざる葛藤を演じながら、空蟬の悩みと悶えとは深まつてゆく。

この夜源氏は人が寢静まつてから不意に空蟬の寢所に忍び入つたが、手に觸れたのは、伊豫の介の先妻の娘で、先刻源氏が豫見した時、空蟬と碁を打つてゐた軒端の萩（ノキバノオギ）であつた。空蟬は衣摺れの音で、それと悟つて藻抜の殻の薄衣を残して、身をひるがへして逃れ去つたのである。『ともかくも思ひわかれず、やをら起き出でて、生絹なる單衣ひとすけ一つを著て滑り出でにけり。』といふこの空蟬の行動ほど彼女の全人間性を一點に凝結させるものはない。ここに空蟬といふ女性の性格が結晶する。それは人間空蟬の重大な瞬間に於ける生命的な動きである。宇治十帖に於ける薫君（カオルギミ）に對する大君（オイギミ）の行動（總角もつがくの巻、薫が寢所に入り來るを感じて、妹の中の君を残して逃れ去る場面）と同質のものである。ここに知的洗煉を受けた高度の人間の感覺ともいふべきものを見出だす。この間髪を入れない無意識に近い

行動こそ、その意識下に潜在する本心の現れである。

夕顔の巻の終りの方で、源氏の病氣の由を聞いたので見舞の消息をおくると、君からも返事がある。

かやうに憎からず聞え交せど（文通ハスルガ）氣き近ぢかくとは思ひも寄らず（デカニ逢ハウトハ思ヒモヨラヌ）、さすがに言ふかひなからずは見え奉りて止みなむと（ヤハリ全クノ情知ラズデモナイコトヲ知ツテイタダイテ、ソレデ止メテオカウト）思ふなりけり。

『氣近くとは思ひもよらず』これが空蟬の本心である。そして忘れられたくはない。文通ぐらゐはしてゐたい。これが空蟬の本願である。不即不離の關係を持續したい。これが空蟬の生き方である。せめて君のついでに御志に對し全くの情知らずではないことを知つていただきたい。君の御愛情を理解してをればこそ、ついでにに惱んでゐるのである。それは分つていただきたい。これがせめてもの空蟬の願である。

空蟬の身代りに軒端の萩を得るといふ意外な出來事をひきおこしたその朝、源氏から來た文を小君から受け取りながら、心の惱みを抑へながら君の深い志をまた見るにつけ、乙女であつた昔を今になす由もない切なさに、君の御文の疊紙たたまかみの片わきに、

うつせみの羽に置く露の木隠れて忍び忍びに濡るる袖かな

と書きしるすのであるが、その歌を君におくるといふのではない。ただ女の胸一つに包みかれた、やるせない惱みを、せめてやらうとして、返すではない返し歌を、君の文の片隅にかきつける彼女であつた。忍び忍びに泣く女性、人知れぬ涙の女性で彼女はあつた。

かく交通はするが、ぢかに逢はうとは思はない。一定の間隔をおいて即かず離れず住んでゐたい。薄衣のヴェールを透して眺めてゐたい。さういふ境地に彼女は安住の地を見出だしていつた。いつしか夏も過ぎて秋風の身にしむ頃となつた。空蟬はいよいよ夫と共に任國の伊豫に下ることとなつた。源氏ほかの夜、空蟬が部屋に残してあつた小袿こむすびを持ち返つて形見としてゐるが、空蟬の旅立を知つて送りどける。自分と源氏との間にはもう何一つ二人をつなぐすぢもなくなつてしまつたのを歎いて、彼女は源氏への返歌をしたためる。

蟬の羽はも裁たちかへてける夏衣返すを見ても音は泣かれけり

かくして秋深む頃、彼女は老いた夫に従つて遙かに遠き伊豫路への旅に上るのであつた。都を遠く離れる哀愁と共に、さすがにこれがほんとの別れになるのではないかと、源氏とのほかないえにしをわびしくも亦いぢらしく思ひいとほしむのであつた。

三

このつねに情念を心の奥に秘めた知性の女性、空蟬の容貌態度はどのやうに描寫されてゐるのであらうか。

人柄のたをやぎたるに、強き心を強ひて加へたれば、弱竹なやたけの心地して、さすがに折るべくもあらず。(思ヒモカケズ源氏ニ逢ウタガ、ツレナクモテナス態度)

濃き綾あやの單ひとへ襲かぶなめり。何にかあらむうへに著て、頭かぶつき細やかに、小さき人の物げなきへアツサリシ

タ）姿ぞしたる。顔なども差しむかひたる人などにもわざと見ゆまじうもてなしたり。手つき瘦せ瘦せて、いたう引隠しためり。（軒端ノ荻ト碁ヲ打ツテキルノヲ源氏ガ隙見スル場面）

たとしへなく口掩ひて、さやかにも見せねど、（源氏ガ）目をしゝとつけ給へれば、おのづから側目たがひめに見ゆ。目少し腫れたる心地して、鼻なども鮮かなる所なうねびれ。匂はしき所も見えず。言ひ立つれば悪きに寄れる容貌を、いたう持つつけて、このまされる人（軒端ノ荻）よりは心あらむと、目とどめつべき様したり。（同右ノ場面）

形の上からは細やかさ、人柄はやさしく、態度物腰はつましく、容貌は鮮明な花やかさはなく、身だしなみの洗煉さによる知的な優雅さである。この碁を打つ場面では軒端の荻に鋭く對置させられてゐる。軒端の荻は花やかな美しさ、若さを持ちながら、洗煉されてゐない故に『少し品後れたり』と評し、空蟬は一々検討すれば悪い方に入る容貌であるのに、その身もてなしの故に品位高くおく。碁がすんで石の數をかぞへて勝負を判定する際の、軒端の荻のすばしっこく、はしやいだのに對し、空蟬の落着いて靜かなさまを作者は生き生きと具象的に描いてゐる。

四

この薄倅の女性には、なほ後日物語がある。かの夏より十二年の歲月は流れた。さきの伊豫の介、今は常陸の介となつた表に従つて東國に行き、後都に上る道すから、源氏の君の行列と逢坂の關で出逢ふのである。

須磨の御旅居も遙かに聞きて、人知れず思ひやり聞えぬにしもあらざりしかど、傳へ聞ゆべきよすがだに

なくて、筑波根の山を吹き越す風も、浮きたる心地して、聊かの傳へだになくて年月重なりにけり。：

女も人知れず昔の事忘れねば、取返して物哀れなり。
關屋卷

まことに空蟬の思ひは、人知れず思ふ思ひであり、その思ひを傳ふるによしなき思ひである。やがて夫がこの世を去ると、義理の子であるかつての紀の守今は河内の守の、自分への淺ましい好色心を見ては、「人知れず思ひ沈みて、人にさなむとも（出家スルトモ）知らせ」で尼になつてしまふのである。この出家の仕方にも、空蟬といふ人間の切斷面がまさまざとかがはれる。燻りかゝる薰物の香に、源氏の近づいたのを知り、とつさに身をひるがへして逃れた彼女は、ここに遂に誰にも知らせず尼となり果てたのである。

後年、源氏の邸六條院に引取られて、御佛に仕へながら、尼としてのつつましい明暮を心靜かに送ることとなる。めづらしい源氏の訪問にも、尼なれば色は青鈍色の意匠もゆかしく仕立てた几帳のかけ深く隠れる。端だけ見える着物の色も鈍色であるが、袖口だけ梶子色なのをのぞかせてゐる。さすがに源氏もなつかしさとあはれさに涙ぐむ。

『かかる有様を御覽じ果てらるるより外の報はいづこにか待らむ』とてまことに打ち泣きぬ。初音卷淺ましい織子のよこしまな戀に、この世に住み憂く、遂に尼となつて、身のたつきなきまに君が邸の片隅に、その庇護を受ける自分を、死ぬほど恥かしく、つらく、くやしいものと思つたであらう。先に軒端の萩に對蹠させた作者は、この場面では末摘花との對比に於いて、空蟬の洗煉された高雅さをいみじくも描出

してゐる。

花やかな美しさはないが、つつましい身のもてなし、洗煉された趣味と教養とを備へ、心裏には人間らしい情熱を秘めた知性の女性空蟬は、明石の上と並んで作者自身の映像が最も濃くその影を映してゐる女性である。

三夕顔

一

宵闇に仄かに匂ふ白い花、夕に開き朝にしぼむ、短い夏の夜一夜を命と咲く花、夕顔の花。はかないといふ言葉はお前のためにつくられたものであらう。浴衣着て團扇片手の夕涼の縁先、古びた黒板塀に匍ひまつはるお前は、必ずや庶民的な系譜をもつて生れて来たのであらう。十七歳の若き源氏がひたぶるに愛したこの女性を夕顔と呼ぶのもふさはしい。まことに源氏と夕顔との間ほど、あやしく風變りなものはない。六條の御息所（ロクジヨノミヤスドコロ）のもとへ通ふ途中で夕顔の花の咲いた伏屋に發見したのがこの夕顔であつた。互に身分も明かさず、むさくるしい巷の陋屋での逢瀬、君はひどく身をやつし顔をも少しもお見せにならず、昔物語の妖怪變化かと怪しまれ、この世のものとも思はれぬ間であつた。源氏の愛着は、あやしくも亦物狂ほしいまでにはげしかった。

『今朝の程晝間も覺束なき』愛着であつた。源氏自ら怪しい魔術にかかつたやうな自分に、幾度か、『いつ

くにいとかうしも留まる心ぞ』と反省自問さへするのである。物につかれたやうな源氏の愛着は募り募つて、さらに打ち解けた逢瀬を求めて、女をなながしの院に連れてゆき、ここで女の死を招き、この世のものとも思はれなかつた愛情にふさはしい奇怪な結末を告げるのである。

所詮、源氏と夕顔との間は物語の初めから否定的な運命にあつたのである。この女性（女）が雨夜（雨）の品定め（品定め）で頭の中將（トノチュージョー）の語る愛人常夏（トコナツ）であらうことは源氏にも十分推知されてゐた。この夕顔を世間の目も忘れて、二條院に引き取らうかと思ひきれながらも、遂に源氏をしてさうさせなかつたのは、一つにはこの頭の中將との關係からであらう。夕顔の死後、その侍女右近（ウゴン）に源氏は生前その身分をかくした辯解の辭として、次のやうに語つてゐる。『父帝の御諫めもあり、世間を遠慮せねばならん身分なので、人に一寸戯れ言をいふのも窮屈であるのに、夕顔とはふとして近づきになつた夕から、自分でも不思議なくらゐる心にかかつて、無理してあふやうになつたのも、かうしてあつけなく別れねばならない運命だつたからであらう。』

源氏の側からは、この二人の結合は否定さるべき條件にあつた。その結合が圖らずも結ばれたのは、かくはかなくその結合が消滅するといふ運命を前提條件としてであつた。このやうな否定的條件にとりかこまれながら、あやしくも物狂ほしく身を投げこんだ愛戀のつぼの中で女の死を致し、自らは愛人の喪失の上に瀕死の重病といふ報いを受けねばならなかつた。愛の睦言も隣家の騒音に妨げられる陋屋から逃れて、靜かな別荘で心ゆくまで打ち解けた物語をしようとした夜、夕顔を急死させ、作者は遂に源氏に愛情の飽滿を與

へなかつた。では何がかくまで源氏の心を捉へたであらうか。

二

AがBの心を捉へる。BがAに心をひかれる。その根據はAといふ人間の存在の全體構造の中に求めらるべきであらう。そしてAといふ人間を構成する種々の要素の中のあるものに重點がおかれるであらう。更に又Aに働きかけるBの性格とBのおかれた種々の環境による、Bの心理的變化の状態がこれに絡みあつてくるのである。

では源氏は夕顔といふ人間の何處に心を惹かれたか、或は奪はれたか、源氏自身は幾度も反省しながら、自分には不可解であると歎じてゐる。ここにこそ問題の解決の鍵がある。つまり、これといふ特性のないこと、即ち無性格といふことが源氏を魅するのである。そして、更にこれを掘り下げるならば二つの要因を發見するであらう。一つには、一般的な問題としての女性の無邪氣さ、成心のないおほらかさ、柔和性であつて、つまり素朴な愛らしさである。受身的な魅力である。作者は『若びたり』『見めかし』といふ語を以て表現してゐる。また二つには、特殊的にはこの時の源氏の心理に求めらるべきであらう。

なき母の面影藤壺を追ひ求めるもよしなく、ただ麗しうて心の殻を開かうともしない葵の上には反撥し、六條の御息所のあまり思ひつめた愛情は煩はしく、捕へ得た空蟬はもぬけの殻を残して飛び去り、はからずも得た軒端の萩の心ばせなさには心をひかれるべくもない。理想の夢を追うて憧れる若き源氏の心は空虚であつた。しかも丁度葵の上、六條の御息所に缺如してゐる、もの柔かな愛らしさを夕顔は具備してゐたので

ある。

その上また、雨夜の品定め源氏への心理的影響も一つの契機となつてゐる。作者はいささかの手拔かりもなく、『かの下しもが下と人の思ひおとし住居なれど、その中にも、思ひの外に口惜しからぬを見つけたらむはと、めづらしう思ほすなりけり』と、その心理的なつながりを示すことを忘れない。ここに、この夕顔との交渉を醸成する一つのモメントとして、源氏のこのエキゾチシズムともいふべき好奇的心理を見出だす。更に頭の中將との關聯に於いて、源氏自身の心の中に複雑にして異常なスリルさへ發生する。すべてが光る源氏の君には、あやしくさま變りたるアバシチユル冒険であつた。

三

ふたたび問題を夕顔の性格の問題にかへさう。彼女の第一の特性は、ものやはらかな子供っぽい可憐さである。かのいぶせき巷の家で、『さあ、もつと落着いて靜かな所へ行つてゆつくり話しませう』と源氏がいへば、『そんなにおつしやつても、お顔もお見せにならず、お郎もおかくしになり、ご身分もお明かしにならず、普通とかはつたおん振舞ゆゑ何だかこはうございます』といふあどけなさ。源氏もほほえんで、『ほんとにとつちが狐かしら。まあだまされてゐなさい』としたしさうにいへば、『女もいみじうしづか靡なきて、さもありぬべう』思ふといふ、すなほな愛らしさである。八月十五日の夜の場面、隣の家々のしづか聲男たちの聲高に語る世間話が筒抜けに聞えるのを女は恥かしいと思ふ條。

艶えんだち氣色きしきばまむ人ひと（イカニモ美シクヨソホヒ氣取ツテキル人）は、消えも入りぬべき住居の様なめり

かし。されど長閑に、辛きも憂きも、傍痛きことも思ひ入れたる様ならで、(辛イコトモ悲シイコトモ調子ノワルイコトモ、深ク氣ニシテキル様子デハナク)、我がもてなし有様は、いとあてはかに見めかしくて又無くらうがはしき隣の用意なきを、如何なることも聞き知りたる様ならねば、なかなか恥ぢか、やかむよりは罪ゆるされてぞ見えける。(ナマジ恥カシガツテ照レルヨリ、カヘツテ罪ガナイ)。

ここには天衣無縫ともいふべき無邪氣さがあるではないか。ここに源氏はこよなき魅惑を感じるのである。この夕顔が生れる時から何處かへ置き忘れて來た『艶たち氣色ばむ』『思ひ入れたる様』こそ、丁度、葵の上、六條御息所の特性なのである。特に、ここでは夕顔は、終始六條の御息所と對置させられてゐる。

河原院の場面、

(夕顔ノ)何心もなき(無邪氣ナ)差し向ひをあはれと思すままに、(御息所ノ)餘りに心深く見る人も、苦しき御有様を(アマリ深情デシツコク、相手ガ息苦シクナルヤウナ御様子ヲ)少し取り捨てばや。と源氏はこの二者をはつきりと對比させる。

白き給うす色のなよやかなるを重ねて、花やかならぬ姿、いとらうたげにあえかなる心地して(大變愛ラシクキヤシヤナ感じガシテ)、其處と取り立てて勝れたることもなければ、細やかにたをたをととして、物打ち言ひたるけはひ、あな心苦しと、ただいとらうたく見ゆ(マア痛々シイトダダモウ可愛ク見エル)。これはあえかなるらうたさである。その弱々しい可憐さは見る目にも痛々しく聞々とひとの愛情を掻き立てるやうな、そのやうな素朴な魅惑である。

さらに私たちは夕顔の性格表現として作中人物（右近・頭の中將）の言葉の中から『物づつみ』と『物おぢ』といふ要素をとりだすことが出来る。前者は積極的な、後者は消極的な意味をもつけれども、共に『見めかしさ』といふ一つの基本的性格の異つた面にすぎない。とたえがちな頭の中將の愛情にただひたすらに
よりすがつて生きてゐた女性。愛人の正妻の嫉妬から、右大臣家からの脅迫を受けるや、誰を恨みようと
せず、かき消えてしまつた彼女、そこに私たちは、この愛すべき一輪の夕顔の仄白い美しい輪郭のうちに宿
命的な弱さ、はかなさを見る。

優婆塞が行ふ道をしるべにて來む世も深き契違ふな

と來世をかけて愛の誓ひを求めゝ源氏に

さきの世の契知らるる身の憂さに行く末かねて頼み難さよ

と、うつし世のはかない宿命をかこつ彼女は、あくまで何ものに對しても隨順する女性であつた。

この從順な柔和さ、無邪氣さにこそ源氏が自己を感溺させていつたことは、私たちのすでに考察した如くであるが、夕顔の死後、源氏自らの述懐として作者は次の如く述べる。

はかなびたるこそ（性格ノ強イシツカリモノヨリモ、弱々シイノガ）女はらうたけれ。賢く人に離かぬ。いと心つきなき業なり。自ら抄々しく直よかならぬ心習ひに、女はただやはらかにて、取りはづしては、人に欺かれぬべきが、さすがに物づつみし、見む人の心に従はむなむあはれにて……（女ハタダヒタストラ柔和デ、ウツカリスルト男ニダマサレカネナイノガ、内氣デ遠慮ガチデツツマシイ女トシテノ

節度ハモツテヲリ、夫ノ心ニ從フノガ、カハイイモノデ……)

源氏は思ふがままに愛らしくなびく最初の女性として夕顔を得た。しかも客觀的には夕顔と源氏とを取り巻く困難な事情、主觀的には夕顔自身の弱さの中に、この愛情の存續發展には幾多の障礙が續たはつてゐた。若き源氏はこの抵抗を突き破らうとして脆くも敗北したのである。したがつて彼は愛人の死によつて、愛の對象の喪失といふ無限の悲傷とともに、その死をいたしたのは自分であるといふ一つの負目せきめをせおふのである。夕顔の急死した朝、自邸に歸つても、生き返つた時、自分が側にみないのを見たならば、どんなにか寂しく、かつ自分を恨みに思ふであらうかと胸迫る苦悶も、この心の負目に根ざすものである。そしてそれにつづく源氏の重病もまたその一つの償ひである。

七日七日に佛書かせても誰がためとか心の中に思はむ

といふ、右近に夕顔の身上をたづねる切々の言葉の中に、私たちはこれまでには見得なかつた源氏の深い人間愛を感得する。四十九日の供養も手厚く、亡き人を弔ふ願文には、『その人となくて、(誰トハ明瞭ニ書カズ、あはれに思ひし人の、はかなき様になりたるを、阿彌陀佛あまたはつとに譲り奉る由』があはれげに書かれてあつた。このやうな源氏の亡き人への思ひやりからも、私たちは夕顔が源氏を受容した姿態の可憐な愛らしさを推知することが出来る。

四

最後に私たちは角度を變へて、夕顔の性格を批判的にながめてみよう。源氏の夕顔に對する場合、彼は全

く自己忘却に陥つてしまふのである。この因由は、やはり一般的には、夕顔の性格に求めらるべきであらう。これまで私たちのみてきた夕顔の基本的性格『見めかしさ』を更に掘り下げるならば、この『見めかしさ』がプリミチーフな性質を背負つてゐるものであり、更にそれが『無性格』の同義語であるといふ判断に達するであらう。勿論、成人に於ける天真さは優に一つ的美感となすに足りる素質ではあるけれども、天真さといふ點では、その具備者の第一人者である紫の上（ムラサキノウエ）とはまた異つてゐる。この二者の相違は畢竟何に根ざすのであらうか。私はその基本的な要因として知性を擧げざるを得ない。そして夕顔の弱さも同じく知性の缺如に根ざすものといはねばなるまい。夕顔の愛らしさは人を原初的な感性に引きもどす美であつて、人間性を高度に引き上げることのできる美ではない。

この夕顔に否定的宿命を與へた作者の構想に、物語的必然の發展をみることができるといふこともまた一つの人間さうであつたやうに、夕顔に心ひかれる人は少くないであらう。弱さを愛するといふこともまた一つの人間の宿命なのであるから。

四 末 摘 花

一

夕顔を失つた若い源氏の心は空虚であつた。葵の上といひ六條の御息所といひ、打解けた懐かしさはなな様子ぶつた氣位の高さは強い嫉妬心と共に、源氏を遠ざからせるのみであつた。この空隙にあらはれた

のが高貴の家に生れながら、両親に先立たれた落魄の姫君、常陸の宮の御娘未摘花（ヌエツムハナ）であつた。打ち解けた心の安息所を求める望郷にも似た想ひに、『兒めかしき持ほどかならむ』人を求めて、姫のものと通ひはじめるのである。

この頃はすでに父權制的な家族關係の時代であつたが、古代の母權制的な生活様式はまだ残存してゐたのである。夫婦同居でなく、男が女の家に通ふ——夜訪れてあくる朝早く歸る、この別れを、きぬぎぬ（衣衣・後朝）といふ——いはば夫婦分居制が残つてゐたのである。源氏は二條院を住宅として正妻葵の上のゐる左大臣邸へ通うてゐたのである。空蟬が自分の生れた家にゐて君を待つことができるならば、と歎くのも、男の通うて來るのを待つといふ意味なのである。

かうした夫婦の分居制と共に、一夫多妻の時代であつた。男は多くの妻、即ち通ひ所を持つてゐた。源氏が夕顔といふ通ひ所を發見したのも、六條の御息所のところへ通ふ道すがらであつた。多くの妻を持つた夫が、今宵はくるかと待ち明かす女心のたよりなどは、かげろふ日記の著者が痛切にのべてゐるところである。

結婚の申込は和歌ではじまり、結婚後の消息も和歌をもつてした。男が女の家を訪ねて歸つた朝は、和歌をしるした消息文を女のもとへおくることになつてゐた。そして男の歌に對しては女から返歌をすることになつてゐた。女が歌を作れないときは代作——たいがい侍女がした——をもつてした。従つて、和歌とこれ

を書く筆蹟とが非常に重んぜられた時代であつた。

源氏が求婚に訪れたので、侍女の命婦（ミヨーブ）がお逢ひするやうに姫にすすめるが、『人に物聞えむやうも知らぬを』とためらふ。命婦のたつての勧めに、『御返事申さないで、ただ先方のおつしやることを聞けと言ふなら格子に鍵をしてお聞きませう』と、源氏のプロポーズする言葉を聞くこととなる。しかしひたすら命婦を頼みにしてゐるのみで、姫に仕へる若い人々は世に名高い光る源氏の御有様を見ようと、心げさう（そはそはと心繕ひすること）しあつてゐるのに、御本人の姫は何の心げさうもなくてゐられるのである。いよいよ源氏の求愛の言葉を聞いても、何のおんいらへもない。御返歌も侍女の侍従（ジジュー）が代つて申し上げる。かうしてこの夜逢ひ初めるのであるが、『心得ず生いとほしと覺ゆる御様』であり、『何事につけてかは御心のとまらむ。打ちうめかれて夜深う出で給』ふのであつた。

そこに見出たされたものは完全無能であつた。ただ身を固くして口をつくむ生ける人形にすぎない。源氏には、末摘花の様子に、どうしても合點の行かぬ腑に落ちぬ節がある。そのもてなしは理解できぬ奇異な感じを拭ひとることができぬ。源氏がここで姫から、感受したものは正體の分らぬ一つの異常性であつた。

源氏は邸へ歸つても、あまりの幻滅に、直ぐ後朝（まごあした）の文をしたためようともしない。たうとう夕方になつて文をおくる。姫君は文を受けとつても、その時刻のおくられて夕刻となつたのは、源氏が自分に愛想づかしをしたためであるといふことが分らなくて、ただ恥かしさのみが心を占めてゐる。御返歌もようよまず、侍従

の代作したのを書くのであるが、紫の色褪せた時代後れの紙に、文字はしつかりと上下を揃へて四角張つた書き振りで、何の風韻もなく、源氏を見るかひもなく打置き、かかることをくやしなど言ふにやあらむと歎息する。

あるひは見まさりすることもあらうかと、雪の夜の訪れも、ただ引込んでばかりゐて一向愛敬もなく、何の逢ひ榮えもなく、からうじて明けた朝の明るい光の中で姫の姿を見て、見まさりする點が少しでもあらば嬉しからうと、一縷の希望をつないだのに、さて見出だした姫の姿はどんなであつたであらうか。いたづらに長い上半身、おどろおどろしく長い顔、普賢菩薩ふけんぼさつの乗物の象のやうな鼻、その鼻の先の赤さ、瘦せた肩古めかしい黒貂くろびようの皮衣かわぎぬの似合ふべくもないが、この皮がなければ寒からうと思はれる御顔様。見るほどに知るほどに、あさましいまでにはしい御様である。なにかと源氏の語るにも、甚くはにかんで、

口覆ひし給へるさへ、ひなび古めかしう事々しく儀式官の練り出でたる警持ひやもち覺えて、流石に打ち笑み給へる氣色、はしたなうすずろびたり。

女らしさも、愛らしさも、あつたものではない。戀人の朝の姿が、笏をとつて練り出した儀式の官人そつくりとあつては、何の魅力があらう。情趣があらう。源氏の歌に對しても、『ただ、むむと打笑ひて、いと口重げ』である。年の朝けた七日の夜、『せめて今年は少しはお聲をきかして下さい』と源氏に促うなががされると、『さへづる春は、とからうじてわななかし』出るのである。彼女は源氏のポーズに對して、全く無反應である。これは木偶である。何の心ばせもなく、なす所を知らぬのである。

さて、しいだすことはいふと、かの雪の夜の後、歳の暮になつて、元日のお召料にと、命婦をお使として、源氏に差上げたのは、古めかしい衣ばこの重さうで古風なのにくれた、今様色の我慢のならないやうに光澤の褪せた古風な直衣の、裏も表も同じやうな濃い色をした、ひどくありふれた品である。そして

からころも君が心のつらければ袂はかくぞそぼちつのみ（アナタノオ心ガツレナイノデ、コノカラ衣ノ袂ハコンナニ滞レテバカリヲリマス）

といふ、何の風韻もゆかしさもない歌である。つごもりの日、こちらから差上げた衣ばこに、君のお召料として人から献上した葡萄酒の御衣や山吹色などの品々を命婦がお使で持つて来る。この間、姫君から贈つた色合が悪いとかやうなことをなさるのだと思ひ知られるのだが、老女たちは、あの御衣は紅色で重々しい所がある。決してこの品に劣りはしないと論定する。そして源氏からの歌、

逢はぬ夜を隔つる中の衣手に重ねていとど見もし見よとや（アナタトワタシトハ逢ハヌ夜ガ多イノニ、中ヲ隔テル衣ナドヲヨコサレテ、更ニ逢ハヌ夜ヲ重ネテ見モシ又ワタシニモサウシテ見ヨトイハレルノデスカ）

と、姫の歌をくらべて、姫のは『ことわり聞えてしたたか』——道理が通つてしつかりしてゐる、君の御返歌は、一寸趣向が面白いといふだけだと評定する。姫君も、これは代作などではなく、一所懸命になつて詠まれたものであるから、何かに書きつけておかれてあつた。

後年、彼女が源氏の邸に引き取られて後のことであるが（玉登卷^{たまのぼりまき}）、ある歳の暮源氏が院に住んでゐる女方に衣を配られた時の末摘花はどうしたかといふと、女方からの御使への祝儀の品——祿がとりどりである中に、末摘花は東の院に離れてゐられるので、このやうな折には、つましく引込んでゐてこそ、ゆかしいのであるが、『うるはしく物し給ふ人にて、あるべきことはたがへ給はず』山吹の袿^{かき}の袖口のひどくすすけたのを下着も重ねず、使の肩に打ちかけてやるのである。かく差し出では、ものほど知らぬ無慮の恥をさらすのである。しかも歌は例によつて十年一日の如く、『から衣』一點張りである。源氏はこの御使への祿を見て『かやうに、わりなう古めかしう、かたはら痛き所つき給へるさかしら』——法外に古風で、はたから見ると笑止千萬であるが、本人はいたつて賢いやり方だと思ひこんでゐる利巧振りを持てあましものに思はれる。

この『かたはら痛きさかしら』はこれだけに止まらないのである。行幸^{ぎやうこう}の卷に於ける玉登の裳着^{もぎ}の祝の當日、又もかつての古代の姫君は憐れな喜劇^{コメディ}を演ずるのである。秋好中宮（アキヨシチュウグー）はじめ六條院の女方から心々のお祝の品を贈られるのであるが、東院の人たち（空蟬・末摘花など）も御様子は聞き知りながら、差し出て御挨拶など申上げるべき身でもないの、ただ聞き過したのに、末摘花は『怪しう物うるはしう、さるべき事の折過ぎぬ古代の御心』——ひどく几帳面で儀式張つて、何かの折には必ず儀禮をつくして贈物などせずにをれぬ古風な心、自分の身の程も、時や折も考へない淺はかな禮儀派さんで、この時も御祝の贈物をされるのであるが、それは昔風の古めかしい色合の、仕立も見にくいもので源氏もいと淺ま

しう例の出過ぎた仕打と眉をひそめられる。そしてこの折の歌は例によつて又も、『から衣』であり、筆蹟は昔でもよくなかつたのに、今はまして筆先がむやみに縮かみ彫り込んだやうに強く固苦しく書いてある。源氏は、

からころもまた唐衣からころもかへすがへすもから衣なる

と、皮肉たつぶりの返歌をされる。

三

さてこの『かたはら痛き所つき給へるさかしら』と『古代の御心』とは何であらうか。それは彼女の『から衣』張りの歌及び『晴れぬ夜』の歌の『ことわり聞えたしたたかさ』の歌體、『もじ強う中さだの筋にて上下ひとしく』書き、『あり深く強く固く』書く御手跡と互に通ずるものである。生前兩親に受けた古い教養を唯一の規範として守り、それが折に合ふかどうかを反省する才もない。ただ後生大事に古めかしい傳統を守るだけである。現在の自分のおかれた境遇シゴトノエトシヨトといふものを考へることができない。そこに前にあげたやうなファースを演出するのである。當人は至極眞面目で一所懸命で、おぼろげならでし出で給へる業であるから厄介である。一言にして言へば『つきつきし』の缺如である。折と所とをわきまへず、ものあはれを解しないのである。ここに身分も低く、容貌もさしてよくない空蟬に遙かに劣る所以がある。後年に於いてもこの二者は全く對蹠的存在として描出され、源氏をして『かばかり（空蟬位）の言ふ甲斐だにあれかし』と末摘花の方を見やつて歎息させる。

そのことは末摘花の源氏よりの經濟的補助に對する羞恥感の缺如も現はれてゐる。末摘花の卷の正月の訪問の折、女の御裝束今日は世づきたりと、美しく趣ありと見えたのは、ほかならぬ源氏より贈られた御衣であつた。又後年源氏の邸に引取られてから、或日末摘花の寒さのを見て、どうしたのかときくと、皮衣は兄にとられたと言ふ。『白い衣裳などは幾重も重ねて着なさい。また然るべき時には、私の方で忘れてゐることもありませうから、あなたの方から注意して下さい。私は、ともとぼんやりしてゐる上に、諸方に氣を配らねばならぬ氣忙しさの紛れに、自然に忘れることもありきので』と源氏は向ふの院の倉から絹綾などを差上げる。まことにあはれも情趣も雰圍氣もニュアンスもあつたものではない。これを空蟬の『かかる有様を御覽じ果てらるるよりほかの報いはいづくにか侍らむ』と、かたしさに死ななばかりである心ばせに對比させて描かれてゐる。

この空蟬は源氏の訪問に、凝つた意匠の青にびの几帳に、ひたすかくれてゐるのである。ところが末摘花は一向平氣で、ただ一つの取柄であつた長髪すらも、白髪まじりとなつて寒げな姿を見せるので、源氏の方で『まほにも（正面カラ）向ひ給はず』見れば見るほど苦歎かれて『こと更に御几帳ひき繕ひ隔て給ふ』といふ有様であるが、『なかなか女はさしも思したらず』といふのであるから、もはや救ひやうがない。しかも表面的には儀禮は飾らないではゐられない。皮衣を見にとられては、『光もなく黒き搔練のさるさるしく張りたる一かさね』をまとうて寒さうに慄へてゐる。

まさに舊套墨守である。この態度のあらはれが蓬生の卷に於ける、あらゆる困苦と窮乏と四面楚歌の中に

あつて、父君の遺産をひたぶるに守り、源氏の無情に堪へてよく自らの生活を守りつづけた十年の生活となる。

彼女の本質は、ものあはれ、つきつきしさを解する能力の缺如にある。それは、淺ましき物づつみとなり、又いと埋れすくよかな明述思案となり、源氏と逢ふ折の無爲無能となる。或は羞恥感の喪失となり、固苦しき儀禮屋となり、することなすこと源氏の眉をひそめさせざるはない。情趣の喪失と美的要素の絶無とがある。末摘花こそ源氏の君の、そして作者の抱懐する女性觀の否定的要素のすべてを背負はされた不幸な人物であつた。

五 葵の上

一

今を時めく左大臣を父に、高貴の出の母をもち、宏壯な寢殿造の奥深く、ただ一人のおんむすめとかしづかれ、成人しては世の人の憧憬の的である光る源氏の君の正妻として、人の世の花やかな幸を一身に集めた、かの葵の上（アオイノウエ）の生涯は果してしかく幸福であつたであらうか。源氏との十年の結婚生活は外面的華麗さに反して暗い寂寥の連続であつた。

結婚當時、源氏は十二歳、葵の上は十六歳。この年齢の相違を女君は『似げなく恥かし』と思はれる。ここに早くも兩者の間には、目に見えぬ間隙が生じつゝあつた。源氏には、すでにほかに臉の母の面影である

藤壺を求めてやまぬひたぶる心があつた。葵の上はまことに優美に育つた方とは見えるが、どうしたものか『心にもつかず』思はれる。心につかず——とは、心に合はぬ、氣に入らぬ、びたつとしない、しつくりしないのである。この疎隔は全人間性に於てあり、殆ど宿命的なものであつた。それは一つの人間の零圍氣の問題であつた。彼女といふ人間の放射する色調、體臭、音色の交響樂ともいふべき、けはひ、心ばへの問題であつた。この不一致、不調和は如何ともしがたい悲劇であつた。源氏の遠心的傾向が葵の上に反映しないはずはない。しかも女君は源氏の若さ美しさを愛しながら、愛してみればこそ似げなく恥かしく思はれる。この意識と感情が源氏に反映すると共に、自分自身の源氏に對する動き方をも束縛する。それがまた源氏に反映する。かかる相互作用の進展・深化が兩者の離間を擴大していつたことは悲しき必然であつた。しかも葵の上から遠ざかる源氏の心の近づく對象——藤壺といふ——が存在した事に於て、兩者の距離はますます大きくなつていつた。五六日は内裏に、大殿（オーイドノ）の葵の上のもとには二三日の絶えだえの訪れである。この二人の結婚生活の不幸は、すでに物語の當初において決定されてゐたのである。

帚木ヒコギの卷の雨夜の品定め、翌日の源氏の大殿訪問は空蟬との戀愛の契機として、若紫わかむらさきの卷の對面は夕顔の死と紫の上を迎へとる事件との間の副次的場面として、いや心理的には、むしろ紫の上迎へとりの推進的役割として場面構成されてゐる。

帚木ヒコギの卷の場面で源氏の見出した葵の上は、容子はけだかく、服装といひ、姿態といひ、少しも亂れたところがなくて、一點の非の打ち所もないが、丁度その點に、すなはちあまりに端麗にすぎで、取りすまし

てゐる點に、どうも氣がおけて打ち解けにくい。『あまりうるはしき御有様の解け難く恥かしげにのみ、思ひしづまり給へる』と作者は表現してゐる。もてなしの端麗な冷たさ、固さ。それは、若く美しい源氏に對して、似げなく恥かしと自分を卑下し、さういふ自己疎外意識をもちながら、一層募る源氏への愛怨の憂悶が、このただ一人かしづかれた麗はしき貴族の姫君に與へた面貌である。

若紫わかしまの卷の場面は、夕顔の死後源氏はおこりを煩つて、加持を受けに北山の聖みよをたづね、長い間葵の上のもとにも行かなかつたあとで久々におとづれた折のことである。女君はいつものやうに這ひかくれて直ぐにも出てこられない。父の大臣が無理にすすめて、やつと源氏の前に出るが、

ただ繪にかきたる物の姫君のやうに、しすゑられて、打ち身じろぎ給ふことも難く、麗はしうてものし給へば……（繪ニカイタ物語ノ中ノオ姫様ノヤウニ坐ラサレテ身動キモデキナイデ端然トシテキラレルノデ……）

自分の心中の思ひも仄めかし、北山詣での物語もしようとするが、葵の上が話しがひのあるやうに應答されるならばうれいのであるが、全く取りつきやうもない。少しも打ち解けず、よそよそしく氣づまりにしてゐられて、年月のたつにつれて葵の上の隔て心が深くなるのを源氏は心外に思ふのである。

この場面に現れる葵の上は、生ける人形である。つんとすました端正な表情は、打ち解けようとする源氏の氣持を撥ねかへす。そして姫君の言ひ出だすたつた一言は男君の御夜離れみよへの物怨ものうらみである。それは、かにも氣位の高い嫉妬の反撃であつて、兩者を引き離すのに役立つだけではない。男君がなだめながら御寢

所に入られても、女君は直ぐにもはいられず打ち解けない。ここに葵の上の悲劇がある。ここで源氏は女君に背をむけるのである。葵の上の折れて出るのが、この折をはずさないか、源氏があくまで女君の結ばれた心の解けるまで待つか、何れかの場合にも救ひはあるのである。これが人情の妙機である。狭くは、この男女の情合の機微、一般的にはものあはれを知らなかつた點で葵の上とその責は歸せられてゐる。少くともそれは葵の上にとつて不幸であつた。

兩者の離間は、その結婚當初より亡き母の面影、藤壺への愛慕妄執、空蟬、夕顔、末摘花と幻影を追ふやうに憧れさまよふ若き日の源氏の魂は、正妻たる葵の上から遠ざかるのみであつた。そしてこの源氏の冷淡さが葵の上をますます硬化させる。女君の門地の高さからくる御心おごりは源氏の少しの疎略をも、めざましと口惜しがられるのである。しかも女君はいまや年のころも二十二・三と身も心も女盛りとなりまさりゆく頃はひである。丁度そのとき源氏が紫の上を自邸に引取つたといふ噂が葵の上の耳にも入る。この時女君は『いと心づきなし』と臆患の炎を燃やさんばかりである。このときの源氏の心情を作者は次のやうに述べる。

さも思さむはことわりなれど（葵ノ上ガソノコトヲ不快ニ思ハレルノハモツトモデアルケレド）、心美し
う、例の人のやうに怨み宣はば（スナホニ愛ラシク普通ノ人ノヤウニ怨ミ言ヲイハレタナラバ）、我もう
らなく打ち語りて慰め聞えてむものを（自分モ腹臆ナク打チ明ケテ慰メヨウモノヲ）、思はずにのみ取り
ない給ふ御心づき無さに（葵ノ上ガ自分ノ氣持ハカケハナレテ考ヘテキルノガ氣ニ食ハナイノデ）、さ

もあるまじきすさびごとも出で来るぞかし（シテハイケナイ浮氣事モシデカサヤウニナルノデアル）。

紅葉賀卷

もつと素直に普通の人のやうに恨みでも言はれるやうなら、それを機會に自分も打ち明けて、御心をなだめもしようものを、いつも變に邪推ばかりしては嫉妬のいかりで武裝して受けいれない。

女君の方から胸の扉を開けば、源氏はすぐにも飛び込んでゆくのである。鐵のやうに固い扉にぶつつかつて一度はねかへされると、もうそのままよそへ飛んでゆく源氏なのである。或は、女から胸の中に燦る愛怨の情を怒み言にあらはして源氏の心の扉をたたけば、すぐ胸を開いて抱擁する源氏なのである。愛のポーズでも、嫉妬のゼスチニアでも、何か人間的な血の通つた働かけが動けば、それをモメントとして淀んだ鬱積した空氣は一瞬にして雲散霧消したであらう。

紫の上の成長はこの兩者の疎隔をますます深めていつた。長い年月の間には、きつと女君の心も打ち解けるであらうと源氏は思ひつつも、とかく反撥しがちな二つの心は、かくて次第に離れゆき遂に葵上の死まで改まらなかつた。

二

源氏二十二歳の八月、葵の上は夕霧を生んで急死する。時に二十六歳。この世をば我が世とぞ思ふほどの權門、左大臣家の愛娘として、それはあまりにはかない最期であつた。生前愛することの淺かつた妻の死に對する源氏の悲みは大きく、かつ深かつた。この葵の上に對する生前死後の愛情の變化について考察を加へて

みよう。

炯眼の讀者ならば、葵の上の描寫に於いて、作者の筆觸が徐々に變化して、葵の上の懷妊のあたりから急角度を描いてゆくことに氣づかれるであらう。そもそも、この姫君は桐壺の卷に登場したときから、あまり同情的には描かれてゐない。讀者も源氏の君と共に、この麗はしく、とりすました我がままな姫君に、何れかといふと非難の眼差しを向けて、源氏の浮氣の罪を、この良妻たりえぬ姫に被せがちである。ところが作者は讀者を、ひたすら反葵の上派にしておきながら、早くも若紫の卷、紅葉賀の卷に於いて葵の上の美點を描出して着々と伏線を敷きつつあつたのである。

若紫の卷の場面は、前に述べた女君は直ぐにも夜の御ましにはいられない所であるが、『問はぬは辛きものにやあらむ』(アナタハ私ガ音ヅレシナイノヲ怨ミニ思フトオツシャルガ、ソレハ私ノ方カラ申シ上ゲルコトデス)とただ一言源氏に怨みごとをいふその姿態は、『後目に見おこせ給へるまみ、いと恥かしげに氣高ううつくしげなる御容貌なり』とめづらしく魅力的な女性として描いてゐる。

また紅葉賀の卷の源氏十九歳の正月(葵の上二十三歳)の大殿訪問には、紫の上のことを含むところはありながら、源氏の君のうちとけた取り亂した御様子に對しては、氣強くできず、然るべき御返事など遊ばずのは『なほ人よりはいと異なり(サスガニヤハリ並ノ女トハチガフ)』と作者の筆は極めて肯定的である。

ここで私たちの想ひ起すのは末摘花の君である。この二女性が高貴の方の御子であることに於いて、その心情の柔軟性を缺く點に於いて、そして源氏の心を満たすことのできなかつた點に於いて、性格的に極めて

相似性を有してゐるのであるが、ここに於いても作者はいみじも二者を差異つけるのである。『さへづる春は』とわななかし出づる末摘花と『問はぬはつらきものにやあらむ』と怨みの眼眸を投げる葵の上とはその美的意味に於いて質的な相違がある。ここにはかすかながら和解の曙光がさしてきつつあつた。

さて私たちは葵の上懐妊中の情態について作者の敘述をみよう。數多くの女方、ことには六條の御息所、種（アサガオ）の君などと源氏の定まりなき心を、葵の上の方では心外とは思ひながら源氏のあまりに包みかくしのない様子に張合がないのであらう、深く怨むこともないやうになつてきた。『あまりつつまぬ御氣色の言ふ甲斐なければにやあらむ、深うしも怨じ給はず』と、ここに、葵の上の嫉妬の情の變貌がある。しかも、身體の變化は、あの身動き一つしなかつたやうな端麗さが、見る人の心を動かすやうな、『物心細げ』な雰圍氣に包まれてくるのである。かくして源氏も種々の御物忌まがひなど葵の上への心遣ひをして、御息所などへはとだえがちである。

この葵の上の變化の原因は、一は源氏の開けつばなしな態度と、一は結婚生活十年、葵の上の心境もやや成長したのであらう。その上に、懐胎といふことが自己の地位を確定化するであらうといふ安心と、妊娠といふ生理的變化からくる氣弱さ、それらの複合からきたものである。また源氏の側に於いても、内面的にはさすがに父となることの心のときめきを覺えたはずであり、外面的には左大臣家に對する、かれ特有の配慮から様々の御祈りなどにひたすら奔走したのであらう。そして前述の葵の上の態度の緩和が源氏に反映しな

いはずはない。かくてこの兩者の心理的交互作用によつて十年の疎隔は漸次緩和されつつあつた。

更にこれに次いで現れる六條の御息所の生靈の葵の上を苦しめる段階に到つて、葵の上への源氏の心の親近さは、まさに結婚以來始めてのことである。この場合、六條の御息所への嫌惡の情は少くも一部分葵の上への好感に變化したことは明らかである。男子生誕後、源氏が院（桐壺帝）に參らうとして産後最初の對面の箇所^に於いて、源氏は「御湯參れ（才藥湯ヲ召上リナサイ）」と、まだ大變弱々しい葵の上をいたはるなど、愛情に満ちた態度である。その折の葵の上の容子は、

いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるか無きかの氣色にて臥し給へる様、いとらうたげに苦しげなり。

と、まことに、ここには昔日の驕慢な姫君を何處に見出だすことができよう。美しい御容貌も痛みやつれてほつそりと、そつと抱いて慰めてあげたいやうな可憐さではないか。美しく長い髪が枕のあたりに、はらはらとかかつてゐる風情など、世にも美しいと見えるので、「年頃何事を飽かぬ事ありと思ひつらむは今マデ何ヲ不足ニ思ツタコトデアラウ」と、十年の疎隔を我ながら悔いられて、つくづくとその顔を凝視するのである。けだしこの悔恨の情は源氏の本心であらう。否この心情こそ源氏の偽りなき心である。「院などにお伺ひしても、すぐ歸つて來ますからね。かういふ風にちぎちぎにお逢ひできたらしいのですか……。氣を強く持つて、いつもお目にかかるお部屋で、何の氣がねもなくお逢ひするやうに早くになりたいものです」など慰めはげまして出かける。葵の上はいつもよりは目を留めて、やすんだまま見送るのである。私たちがか

かる融合した夫婦として源氏と葵の上を見出だすことを豫期したであらうか。今や十年間氷結して解けることのなかつた二人の間に春が立ち返らうとしてゐた。しかも作者の筆は縦横無礙、端倪すべからざる展開を見せ、葵の上は、このあとで急死する。この別れが最後の別離となつた。源氏の悲しみが如何に深かつたかは私たちのひとしく想像できるところである。葬送の後、

殿におはし着きても、露まどろまれ給はず。年頃の御有様を思ひ出でつつ、などて、終にはおのづから見直し給ひてむと、(ソノウチ自然ト自分ヲ見ル目モカハツテ打解ケル時モアラウト)、のどかに思ひて、なほざりのすさびにつけても、(葵ノ上ニ)辛しと覺えられ奉りけむ。

一生涯、自分のことをよそよそしい隔である夫と思はれじまひになつてしまつた、と悔恨の涙にくれるのである。なくてぞ今は人のこひしき——まことに心からなる、をこの涙も今は所詮かひなき涙であつた。

三

私はここまで葵の上と源氏との間の心情の曲折について、作者の筆の跡を辿つてきた。そして二者の背反から親近への發展過程を見てきた。これから最後に、葵の上死後の源氏の心情を見ようとするのであるが、實は源氏の葵の上に對する愛情は、その人の死後に於いてその完全な發現を見るのを私たちは發見する。ここに葵の上の源氏物語中の女性としての一特異性がある。私たちは、この妻の死後の源氏の精進生活の中に今はなき妻への惻々たる愛情を見る。自邸の二條院にさへも、かりそめにも歸らず、ひたすら勤行に明かし暮して、女方へは御消息ばかり差上げ、葵の上を苦しめた六條の御息所には、その御文さへも上げない。こ

れこそ生前愛することの淺かつた妻へのせめてもの心立てである。

夜は御帳のうちにひとりと臥し給ふに、宿直の人々は近うめぐりて侍へど、傍さびしくて、時しもあれと寢覺めがちなるに、聲勝れたる限り握り侍はせ給ふ念佛の曉方など忍び難し。深き秋のあはれまさりゆく風の音、身に沁みけるかな、と憤らはぬ御獨寢に明かしかね給へる……

今はなき妻へのまごころ、妻を失つた寂寥、秋風もだに寒き夜の寢覺めがちな枕に聞くは念佛の聲、この場面の文體の簡潔な美はまことに掬すべきものがある。かくて御法事などはすんでも、正日(四十九日)までは引籠つてをられる。そのとある日の夜のことである。

暮れ果てぬれば、大殿油近く參らせ給ひて然るべき限りの人々、御前にて物語などせさせ給ふ。中納言の君といふは、源氏方(源氏)年頃忍びて思し、かど(ヒソカニ寵愛シテキタガ)、此の御思ひの程は、なかなかさやうなる筋にもかけ給はず……(コノ喪中ハ一向ソノヤウナ浮イタ方ニハ心ヲ動カサレナイ)

この源氏のなき妻への心立てを、女は『あはれなる御心かな』と感じ入る。そして男女の間柄をはなれた一般のことにつけては、源氏は懐かしげに物語をされるのである。この場面は源氏の精進生活中の對女性關係を端的に表現してゐる。この中納言の君への態度にあらはれた源氏をつつましき亡き人への心づくし、更に中納言の君及び侍女たちの、その源氏の心情に對する感動は、よくこの時代人の倫理といふものを物語つてゐる。またこの葵の上の死をはさんで對する二者の心情の交流のこともし出す雰囲気こそ『ものあはれ』的情調である。

私たちはかくて源氏の憂愁、悔恨、寂寥と、死せる妻へのまごころとを、薄墨色の一色に浸透された悲愁の明暮の中に見る。

あるときはありのすさみににくかりきなくてぞひとはこひじかりける

葵の上の薄倅な生涯は、まさにこの歌に象徴されてゐる。はだへに寒き風は荒らかに吹き渡り、時雨のさつと降りかかる秋の夜、美しき聲々の唱へる念佛の合唱に、大殿油の灯は仄かに揺らめき、寢覚めがちな光る源氏の双頬にきらりと燦めく露こそは、葵の上の終焉を描く葵の巻の基調である。

六 六條の御息所

一

六條の御息所（ロクジヨノミヤスドコロ）、中年の空閑の寂寥の中に得た若き貴公子のつれなさをかこつ位高き未亡人、思ひしめた心の鬱積は愛人の正妻に取りつく生靈となつて彷徨する。衣にも髪にも御修法の芥子の香は沁みて、すすげどもすすげども消え去らぬ。ふるはしの貴婦人の仄暗き殿中に、丈なす御髪を洗ふ姿態の何と麗しきと妹しくも憐ましいことか。

この憂悶の夫人の存在が、始めてこの物語に見えるのは夕顔の巻の冒頭に、『六條わたりの御忍びありきの頃』と唐突な現れ方をし、しかもそれは夕顔といふ新しい女性の出現の契機としてしか描かれてゐない。更に、次いで御息所自身が始めてその姿をあらはす秋の朝（源氏が六條に泊つた翌朝）の場面に於いても、む

しろ御息所の侍女、中將のおもとの艶麗さとそれに心を動かされる源氏とが描かれ、かんじんの御息所は後方に引つこんでしまつてゐる。

六條わたり（御息所ヲサス）にも、解け難かりし御氣色をおもひけ聞え給ひて後、引き返しなめならむはいとほしかし（ナカナカナビカナカツタノヲ、意ニ從ハセテ後、ウツテカハツテ冷ヤカデアノハ氣ノ毒デアル）。されど、よそなりし御心惑ひのやうに、あながちなる事はなきも（未ダ手ニ入レナカツタ時ノヤウナ熱心サノナイノモ）、如何なる事にかと見えたり。女はいと物を餘りなるまで思ししめたる御心様にて（執着心ノ深い御性質デ）、歸の程も似げなく（源氏十七歳、御息所二十四歳）、人の漏り聞かむに、いとどかく辛き御夜がれ（源氏ノ通ツテコナイ夜）の寢ざめ寢ざめ思ししをる事いと様々なり。

この物語に彼女が登場した時は、もはや愛人から否定的な待遇を受けねばならなかつた。はじめから彼女の愛情生活は薄待に運命づけられてゐた。年齢の不均衡、はげしく執拗な愛情は源氏の心をますます離れさせるのみであつた。そこにはもはや心をひかれる一片の魅力も残されてゐない。『いとほし』すなはち、『氣の毒さ』これが源氏の女君に對する感情のすべてであつた。

夕顔を別荘に連れて行つて、源氏がはかない逢瀬をたのしむ場面に、『六條わたり（御息所ヲサス）にも、如何に思ひ亂れ給ふらむ（御息所ニ）怨みられむも、苦しうことわりなりと（源氏ハ）いとほしき筋は、まづ思ひ出で聞え給ふ。』とある。この場合、思ひ出だしたのが、葵の上でも、空蟬でも、軒端の萩でもなく、

それが六條の御息所であつたことは、決して偶然ではなかつた。これは、源氏對夕顔の關係が、源氏對御息所の關係と對蹠的であることを示してゐる。

この御息所に對する『いとほしさ』の基礎となるものは、前坊（前の皇太子）の妃であつた身分と、こちらの求愛に對しなかなが應じなかつた氣持を、無理になびかせた、その交渉の始められ方と、若く美しい源氏によつて、點火された寡婦の情熱のはげしさ——それは自己卑下と焦慮と不安定な愛情生活の中に、明るさと柔らかさを失つた執拗な情炎となつていつたが——それらの複合からくる源氏の側の精神的負擔である。この『いとほし』と思ひながら離れようとする源氏の心理は、御息所との交渉の最後まで變ることにはなかつた。この中途半端な未解決な心情の上に、幾多の痛ましい怪異と葛藤をひきおこさねばならなかつた。

二

かの夕顔の怪死の原因となる怪しげな女の正體が、六條の御息所の怨念であるか、この荒院に住む妖怪變化であるか、については古來論議の對象となつてゐるところであるが、表面は單に變化の形をとりながら、やはり御息所の怨念を、その背後にせおうてゐると解するのが、最も妥當であらう。源氏の意識下に潜在してゐた御息所の映像が、荒涼たる環境に觸發されて出現したものである。が、この場面では、この變化と御息所との關係は全く不分明である。それが明らかにするのは、葵の上に憑いた生靈の出現に到つてである。この怪しい女は、さきにあげた源氏の御息所への精神的負擔の蓄積の中から、生れたものである。この場面のあいまいな變化は、後に葵の上に憑く物の怪の萌芽であつた。

葵の上の生靈事件は、前の場合よりも容易に理解することが出来る。物の怪・生靈に關する俗信は極めて普遍的であり、その俗信が當事者に與へる心理作用は強い。葵の上に物の怪のついてゐるといふ噂が立つ。すでに、御息所は紫の上と共に葵の上の對抗者である。またこの兩者は御禮の日の車争ひといふ具體的な衝突があり、御息所には葵の上へのはげしい怨がある。そして夢に、葵の上と覺しき人をさいなむことと折々である。かうした心理状態の御息所に、葵の上の御息所の生靈が憑いたといふ噂が達するのであるから、思ひ續くれば、身一つの憂き歎きよりほかに、人を悪しかれなど思ふ心も無けれど、物思ふにあくがるなる魂は、さもやあらむ（葵ノ上ノトロコロマデサマヨヒアルイテユクノカモ知レン）と思し知らるる事もあり。

と、自己生靈説を自ら信ずるに到るのも、まことに無理からぬ自然な心理的經過であらう。

この生靈譚のあやしさは、御息所の魂が憧れ出て葵の上方にさまようて行つて、そこに焚いてある御修法の芥子の香が沁みついて、御衣をとりかへ、髪を洗つても、とれない場面にいたつてクライマックスに達する。ここに於いて御息所も、自己生靈説を信じないわけにいかなくなり『我が身ながらだに疎ましく』歎かれる。この場合、問題になるのは、この芥子の香といふ物的證據の記述である。これは源氏物語のもつ眞實性を傷けないであらうか。否、私はここにこそ物語の眞實を見出だす。これは御息所にとつては、正しく動かし難い事實であつた。この物語の生れた時代人の心理の上に於いては、極めて可能的な精神現象であつた。これは、物的證據といつても、そこにその香が必ずしも存在したわけではない。御息所（また一般の人々）

がさう感覺しただけである。そこには、何の香も存在しなかつたか、或は何か全く他の原因から芥子の香が附着したか、または芥子ではなく全く他の香が附着したのを芥子の如く感じたか、の三つの中の一つでなければならぬ。そしてこの嗅覺は視覺より以上に、強く心理的影響をかうむりやすい感覺である。これは御息所自身の心理的産物である。ここには荒唐無稽な超現實的なものは存在しない。時代人の情念と心理への精確な觀察と把握とがある。しかもそればかりではない。作者紫式部の卓抜は、その時代人の信じた心靈現象を素材として、六條の御息所なる人物を描いた點にある。そして、それは緩みなき緊密な物語的眞實性に於いてである。他の如何なる手法をもつても、この燃えんとして燃え得ないで燻ゆる愛戀の情炎と、抑壓すればするほど激しく沸ぎる怨恨の想念とを、一つ胸にひそめた妖艶の貴夫人の生ける像を、かくも具體的に浮び上らせることはできなかつたであらう。

三

前にも述べたやうに、御息所に對する源氏の心情の本質的なものは、愛情の負擔からくる『いとほしさ』であつた。今、源氏の御息所に對する心情を敘述した形容詞を集めると、(夕顔・葵・賢木・須磨ノ卷ノ中デ十一ヶ所 十三語)

いとほし

心苦し

情なし(情なくやと)

8

3

2

である。心苦し、情なし、は共に『いとほし』に概括することが出来る。それは愛情の消極性の表れである。積極的なをのこをみなとの愛戀の情ではない。幼きものか、老いたるものかへの愛である。憐情であり、憫みであり、氣の毒さである。このいとほしさの基礎たる愛の負擔——精神的負擔おんがらは源氏の心情の何處に根ざして發生するのであつただらうか。それは、末摘花に對しては、自分は少しももう心を惹かれぬが、心長く見果てようと思ひなしての物質的庇護から、更に後年自邸に引取るにいたる道心である。その消極的な愛の態度が果して、女性——特に六條の御息所に對して誠實な所以であつたか否かはさて置き、この負擔を感じる心情こそは、源氏の生きた時代に於いては一箇の美德であつた。さりながら、所詮源氏の御息所への愛情は、いとほしさ以上に出ることはできなかつた。

つめたい源氏をいよいよ諦めきつて、姫きみの齋宮さいみやうとともに伊勢に下らうと決意した御息所に對して、源氏は『下り給はむ』ことを、もて離れてあるまじき事ことなども妨げ聞え給はず』(葵卷)と、その下向を止めようともしない。かと思ふと、『私はつまらぬ男だが、まあ末長くお逢ひ下さるのがお心深いといふものでせう』などと、さも別れたくないやうなことをいふ有様で、御息所も諦めた氣持がまた動搖する。その定まらぬ憂悶のせめてもの慰めにもと御説ごせつの日の物見に、葵の上方から言ひやうもない辱かしめを受ける羽目におちいるのである。

このときの源氏の本心は、實は御息所の下向を望んでゐるのである。だから、強ひて止めもしないのである。ところが『では伊勢へおいでなさい』——『もうお別れませう』の同義語どうぎご——と面と向つて言へない

男で源氏はあつた。そして、さういふ心情と態度は、むしろこの時代人一般に、必要な教養の一つでさへあつたのであるが。

四

葵の上の憐姫、病氣、急死、それは生靈騒ぎが終まつて、源氏の御息所への厭離の氣持は加速度的に深まつていつた。御息所もいよいよ伊勢下向の決心をする。しかもなほ物語は屈曲するのである。それは源氏の野宮訪問である。御息所は姫君が齋宮となられ潔齋のためお籠りになつてゐる嵯峨野の野宮に共にゐられる。いよいよ下向と決定すると、源氏は御息所に對する『いとほしさ』を強く感ずる。蕭條として遣けき跡邊の晩秋のあはれは、ひとしほこの貴公子の感じやすき心を動かし、火燒屋のかすかに光るもの寂しげな立たずまひを背景として、感傷的な別離の場面がくりひろげられるのである。さすがに、これを別れと思へば源氏も涙くみ女君も胸が迫る。かくて、女君の辛さも和らげられ、恨みも解けたことは、源氏の最大の満足であり、安慰であつた。源氏の奉る常よりも、こまやかな文は兩者の和解を美化する。その文を見て御息所は、

思しなびくばかりなれど、打返し定めかね給ふべき事ならねば、(今更思案シナホスベキコトデモナイノデ)、いと甲斐なし。

と、今となつては源氏が如何に愛情を告げようとも、伊勢下向のことは止まることは出来ない事情にある。ここに兩者の和解の美しさ、愛の終局の艶々として盡きないあはれの發生の基礎がある。もはや下向を中

止することのできないのを知りながら、いや意識の下では知つてゐればこそ、下向を思ひ止まりなざるやう申し上げるのである。それは現實を動かす意力をもつてゐるのではなく、單に言葉の上のポーズでしかない。この別離に於いて、源氏の言動には、自ら悲しみの雰圍氣に入りこみ、悲しみを強き立てようとする一種の心構へが見られる。それは源氏自身には意識されなかつた心理的ポーズであつた。

ここにあらはれる女への源氏の愛情は、現實的欲求でなくて、過去への愛情であつて、それは消極的・下向的なものであつた。源氏の欲するところのものは、女君との愛情の復活ではなくして和解であつた。御息所自身は源氏のこの本心を、愛するものの敏感さで知覺してゐた。旅の空にある御息所を思ふ物想ひも、所詮一つのいとほしさの哀愁であつて、愛するものを失つた深刻な悲哀ではない。御息所への愛情の限界性がここににある。

この心理は須磨の巻の源氏と女方との消息の條にも、藤壺・朧月夜・紫の上の返事の文を記した後、『まことや、騒がしかりし程の紛れに漏してけり。かの伊勢の宮へも御使ありけり。』といふ作者の辯解は、そのまゝ源氏の心である。『ああ、さうさう、ついつかりして申し忘れてをりました。あの六條の御息所には……』と、氣の毒さうな紫式部の顔が行間にのぞいてゐるではないか。

また澤標カサツクシの巻の、明石の上方の記述の後に、『まことや、かの齋宮も代り給ひにしかば、御息所上り給ひて後……』とあり、さらに遡つて葵の巻の初にも、『まことや、かの六條の御息所の御腹の前坊の姫君、齋宮に居給ひにしかば……』とある。まことに六條の御息所こそは『まことや』と思ひ出される人物であつた。作

者にも、源氏にも、また讀者にも。

五

六條の御息所は身分・教養・容姿共に世に卓越した女性であつた。また知性も具へた女性であつた。が、そこには源氏の求めてやまぬ柔軟な彈力性のある愛らしさがなかつたのは、致命的な不幸であつた。源氏との年齢上の不調和、そのことの女君自身に於ける心理的影響、物に思ひ入る内攻的傾向、明るさの缺如、ものに固執しがちなこだはりの強さ、それらの複合は源氏の疎遠を招來し、逆にまたそれは彼女の偏向を強めて兩者は遠ざかるのみであつた。源氏にいとほしさの感情が——その基礎たる道心が——なかつたならば、兩者の間柄は單なる直線的過程をたどつて消滅したのであらうし、野宮の美しい情景も、恐らく須磨の卷の消息の贈答にあらはれる美しい追憶も、後年御息所の死の床にその姫君、秋好中宮を源氏に託する人間と人間との美しい交渉も出現しなかつたであらう。どちらにも決定しないが如き源氏の心情の揺蕩は、女の離れなどとする決意を幾度か動搖させて、ともに時代人としての教養・儀禮を高度に所有してゐただけに、つねに美しい情趣の霧をへだてて兩者の複雑微妙な交渉が展開される。つひに、源氏との間の否定的運命をさつた女は自らの意志により、表面的には源氏の意志——言葉にあらはれた意味——に反して、實質的には源氏が無意識的に願望してゐる結果を選んで、伊勢下向といふ結末をとつて、兩者は互に別離を惜しむ美しい感傷的な終曲によつて、この戀愛は本質的には幕を閉ぢたのである。

鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず伊勢まで誰か思ひおこせむ

伊勢路へのみちすがら逢坂の關のあなたから、かつての愛人におくつた歌の、何と孤獨の寂寥とわびしい諦観に浸透してゐることか。

七 朧月夜の尙侍

一

紫宸殿の觀櫻の御宴の夜、照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜の弘徽殿（こききだん）を舞臺として、くりひろげられゆく若き日の源氏の戀の冒險の對象たる右大臣の六の君——朧月夜の尙侍（オボロズキヨノナイシノカミ）の何處に、源氏は心をひかれたであらうか。この戀の冒險はつひに源氏の須磨謫居の直接的契機となるのである。

弘徽殿（こききだん）の細殿で源氏と初めて逢ふ場面において、女は源氏の打ちつけの振舞をとがめながらも、これが光る源氏の君であると知つて少しは心が慰むのである。迷惑ではあると思ふものの、無愛想で強情な女とは思はれたくないのである。

……この君なりけり（コノ方ハ源氏ノ君デアツタ）と聞き定めて、いささか慰めけり。わびしと思へるものから、情なくこはこはしうは見えじと思へり。

若々しくものやはらかで、男を手強くはねつけることも、よろしくない。その女の姿態を、源氏は『らうたし』と思ひ、さまざまに思ひ亂れる女の様子は、『艶になまめかし』く光る源氏の若き心をかきたてる。情趣

的感性的魅惑をここに見出だす。

春宮（冬宮）に参ると定まつた身の上であつて、女はこのはかなかつた夢を思ひ出しては、ただ歎かほしく物思ひに沈みながら明暮を過すうち、藤の宴の夜源氏と再會するにいたる。われひと共に憧れる光る源氏によつて觸發された若く花やかな情熱は抑へようとしても抑へ得ない。この花（花）の宴（宴）の巻の終末の場、右大臣邸で、かの花の宴の夜の女性が右大臣の六の君（朧月夜の君）か否かを確かめようとして、女君を探し求めて呼びかける場面。

（女ノ）いらへはせて唯時々打ち歎く氣はひする方によりかかりて、几帳越に手を捉へて、

（源氏）『梓弓（源氏）いるこの山（源氏）に惑ふかな仄見し月の影や見ゆると（アノ夜チラト見タ入ノ姿が見エルカト

タヅネアダンデ迷ツテキル）

何故か』と推しあてに宣ふを、え忍ばぬなるべし、

（女）心いる方ならませば弓張の月無き空に迷はましやは（深ク思ツテキルナラ月ガナクテモ、タヅネ迷フコトハナイデセウ）

と言ふ辭ただそれなり（マサニカノ夜ノ人デアル）。いとうれしきものから（源氏ハ大變ウレシイモノノサテドウシタモノヤラ）。

この結束數行の簡潔な表現の中に激しい熱情の息づかひと、この兩者の間の愛情が所詮否定的條件に取圍まれてゐることが感得される。

私たちは、かの人妻空蟬の源氏の求愛に對する惱みを想ひ起す。空蟬の知性的傾向に對して、隴月夜の君のはでやかな情趣的傾向は、美しの貴公子への愛慕をつのらせてゆく。

二

御櫛箭殿みくしやきどのから尙侍となり、上（朱雀帝）に仕へる身となつて、今めかしう花やかな日常にはあるが、心の中には、源氏と逢うた夜の夢を忘れる折もなく、ひそかに文通をつづける。源氏の父君桐壺院の崩御と共に、右大臣・弘徽殿の太后の權勢はいよいよ盛んとなり、源氏の地位は不吉な豫感に動揺する。かく事情は次第に困難となるが、彼女の心に秘めた男君への戀慕は深まつていつた。

かくて又弘徽殿の細殿で相逢ふのであるが、つひに事のあらはれる前兆が明白な形をとつてくる。この夜の振舞は右大臣方の承香殿じやうかうてんの御兄の頭の中將の感知するところとなり、源氏の運命に一抹の暗雲がおほひかかってくる。つひに賢木さとしの巻で右大臣邸に源氏が忍び入つたところを右大臣に見あらはされ、弘徽殿の太后の知るところとなり、源氏の身に危機が切迫してくる。

かくして源氏は一身の危険を察知して須磨に逃れ、隴月夜とは離間されるのである。

花の宴にそのふくよかな花ひらを開き、やがて源氏から去つていつた彼女は、花ならば牡丹にたとふべく、豊かにあでやかにうるはしく、しかも春の夜の隴月の如く、物柔かに惱ましい蠱惑の中に、明朗奔放な情熱と情趣的な繊細な心情を包んでゐる。賢木さとしの巻の、右大臣邸に退出中（そのある曠、遂に破局的な事件を招くに到つたか）彼女は、

いと盛りに、賑はしき氣はひし給へる人の（女盛リデ豊艶ナ人ガ）少し打ち惱みて、瘦せ瘦せになり給へる程、いとをかしげなり。

又、細殿に於ける再度の逢瀬の場面には、

女の御様も、げにぞめでたき御盛りなる。重りかなる方は如何あらむ。をかしうなまめき若びたる心地して、見まほしき御氣はひなり。

まことに源氏の求める女性の型である。強ひていふならば、奥ゆかしい、つつましい深みに缺けてゐる。またその故にこそ源氏との間の破滅を來したのであるが。しかし丁度その所に源氏をひきつける魅力が存在するのである。彼女の美しさは、觸れなば散らむ牡丹花の如く脆く、その性格は波紋を漑へた水面の如く不安定である。

このうち彼女は朱雀院（スサクイン）に仕へて、ながく御寵愛をうけるのであるが、源氏はやはりこの女性も忘れがたい。それは源氏が四十にもなつた晩年、朱雀院は出家され今はひとり住みの彼女を訪れて、舊情をあたためるのであるが、それは春さく櫻が秋のあらしのあとなどに、不時の花を開くそれにも似たはかない開花にすぎなかつた。まもなく彼女は出家して青鈍の色の中に沈潜していつた。

八 花散里の君

花散里（ハナチルサト）とは、また何とさびしくはかない、そして物靜かな呼び名であらう。ひそかな尼寺の庭にさく白い山茶花にでもなぞらへようか。

その人と内裏^{うち}あたりで、かりそめにお逢ひした名残で、格別御寵愛なさるといふこともないが、お見すてにもならない。いろいろの物思ひにふと思ひ出されて、五月雨の晴間に女の寓居を訪ふのである。彼女に對する源氏の愛情は、全く羨慕的な愛情である。ふと思ひ出すといふことは、つまりは忘却された人間に對する氣持なのである。そしてこの源氏の態度は、その薄情さを非難されるよりは、むしろその一夜の訪問の道心を稱揚されるのである。花散里自身にも、その姉君にも、そして世の人々にも。

姉君の女御^{にようご}の君の方で先づ物語して、そのついでといふ風に彼女の居室を訪ねる。女はその訪問の意外さとたぐひ稀なお美しさに、長い間のさびしい恨みも忘れるほどである。

假にも見給ふ限りは（カリソメニモ逢ウタコトノアル女方ハスベテ）、おしなべての際にはあらねばにや、襟々につけて、言ふ甲斐なしと思さるるは無ければにや、（並々ノ分際ノ人デハナク、ソレゾレ何カノ點デ、取柄ノナイトイフノハナイカラカ）、憎げなく我も人も情を交しつつ、すぐし給ふなりけり。

源氏ばかりそめにも交渉をもつたほどの女は、憎からず思つて、源氏の方でも、女の方でも、互に情を交

しつづ、その間柄を持續してゆくといふ風であつた。そのやうな種類の愛情の對象として、最も典型的な女性として花散里は描かれてゐる。その性格は淡々として水の如く、その平凡のなかに言ひ知れぬゆかしさをもつてゐる。

須磨に落ちゆくその別れに訪ねた源氏にむかつてよんだ歌

月影の宿れる袖はせばくとも留めても見ばや飽かぬ光を（ツマラヌ身デアルガ、イツマデ見テモ飽キヌ
オ美シイ姿ヲココニドドメテオキタイ。源氏ヲ月ニタトヘテ。）

源氏を愛し頼る物心細さと、わが身を謙讓するつつましさ、いづれもすなほな彼女の八柄をよく表してゐる。そのつつましさの中には、物にこだはらぬおほやうさと、臆たけた品位とが潜んでゐる。

二

後年、源氏の六條院に引取られてからの、彼女の生活はますます落着きすまして心のどかな明暮であつた。梅が枝の巻の香合せにも、ただ荷葉、蓮花の香に擬した薫物（一種合はせるなど閑雅な心ぶりであつた。

初音の巻の正月に、源氏が女方を歴訪する條をみるに、未摘花はそのみにくい姿態を源氏に見られるのを一向平氣で、源氏の君が殊更に御几帳を引きつくらうて間を隔てられるのに、「なかなか女はさしも思したらず」といふ有様で、その露出的傾向を發揮するのに對して、空蟬は、青鈍の几帳にかくれつつ、つつましく己が身をひたすらかくさうとし、このやうな姿を見られるのは死ぬよりも辛いと、身も世もなく歎くのである。この兩者の中間に位するのが花散里である。彼女の場合は、「御几帳を隔てたれば、少し押し遣り給へ

ば、又さておはず』(御几帳ヲヘダテテキルノデ、源氏が少シソノ几帳ヲオシノケテ、花散里ノ姿が見エルヤウニスルト彼女ハソノママデキル)と、自分のつましさに生きるが、相手に對してはそれ以上はなすにまかせてゐる。源氏はここでも彼女の心の落着いた靜かさを愛する。ここに源氏が一子夕霧の養育を彼女に託した所以がある。

九 秋好 中宮

春宮を父とし、六條の御息所を母として、高貴の系譜に生れながら、早く父君を失ひ、母君はわひしい生活の中に逝き、年若くして殘された姫君——のちの秋好中宮(アキヨシチユウグー)は、うき世の波をただひとり越えてゆかねばならなかつた。若い女性がただひとり生きてゆくことの難さは、今も昔も變りはない。寡婦としての母君の愛情生活の苦惱を彼女は幼い頃から感じてきたはずである。母御息所も、その臨終に愛する娘の將來を案じて源氏にこれを委託する言葉の中にも、

愛き身を抓み侍るにも、女は思ひの外にて物思ひを添ふるものになれ侍りければ……(不幸ナ私自身ニツイテ考ヘテミマスニツケテモ、女トイフモノハ男トノコトニカケテ意外ニ苦勞ヲ重ネタリシマスノデ……)

と、女性の生きる苦惱を語るのである。この生きにくい世を若い姫君はいかに渡つていつたであらうか。

母御息所のうれひは杞憂に終らなくなつた。親代りとしてたのんだ源氏は彼女を異性の愛の對象として扱

はうとする。源氏の求愛的態度に對して、徹頭徹尾彼女は拒否しつづけ遂に源氏を斷念させ、これを娘分として世話するやう懸念させるにいたる。源氏の彼女に對する愛着は、形をかへて執拗につきまとうが、このやうな場合の源氏には、嫌惡の情以外の何ものも示さなかつた。

そもそも源氏の彼女に對する關心は、賢木さかきの卷に彼女が伊勢に下る頃から始まり、母御息所の死後急に高まつてくる。源氏の消息に對しても彼女は返事をかくのも氣が進まない。また源氏は度々訪問しては、何かと親代りらしい言葉をかけるけれども、彼女は、『わりなく物羞ぢし、奥まり給へる』さまであつた。この場合の源氏の言葉は、きまりきつて親代りたる自分に打ち解けてくれといふのである。

聞えさせ宜ひ置きし事も侍りしを、今は隔てなき様に思されば嬉しくなむ。(亡き母君カラ承ツテマルコトモアリマスノデ、コレカラハ親シイモノニ思ツテ下サルナラ、ウレシイコトデス。)

かたじけなくとも、昔の御名残に思しなずらへて、氣遠からずもてなさせ給はばなむ、本意なる心地すべき。(カウ申シテハモツタイナイコトナガラ、私ヲナキ母君ノ代リト思シメシテ親シクシテ、ササルナラ本望デス。) 霽標卷 秋好二十歳、源氏二十九歳の頃

畢竟、源氏のものぞみもとめるところは、『へだてなく』『氣遠からず』せよといふことにある。そしてその根據を、亡き母御息所よりその將來を託されたといふことに、かこつけてゐる。つまり親代りとしての權利を要求する。だが母御息所が、つとに憂へたやうに、源氏が娘を娘としてでなく、一個の女性として見ることを、彼女自身敏感にこれを覺知する。ここに彼女の知性がある。申すまでもなく、彼女は源氏の消息に對

しても極めて消極的・拒否的であつた。

二

まもなく姫君は、新帝冷泉院（レイセイイン）の中宮として参りその生涯が定まるのであるが、それから一年ぐらゐつた彼女が二十二歳の秋、二條院に退出した時の二者の間をみてみよう。源氏は彼女の住居を美しくしつらへて、『今はむげに親縁にもてなしあつかひ聞』える。秋雨のしづかに降る日のこと、几帳をへだててしみじみと昔物語にふけりながら、さまざまの感傷的な自分勝手な述懐を、相手の同情を得ようとして聞かせる。彼女は絶えずつつましげに聞くのみで、何の答もせず、源氏の言葉と態度が何となく腑に落ちない氣持である。ただ秋と春といづれに心を寄せるかといふのに對してのみ僅かに、

『ましていかと思ひわき侍らむ。げにいつとなき中に、あやしと聞きし夕べこそ、はかなう消え給ひにし露のよすがにも思ひ給へられぬべけれ。（ナカナカキメラナイ春秋ノ優劣ガドウシテ私ナドニ判別ガデキマセウ。秋ノ夕ベガ、同ジ秋ノ夕ベナクナラレタ母——御息所——ヲ思フヨスガトモナルヤウニ思

ハレマス。』源氏物語 薄雲卷

と言つたきりである。何となく源氏の親しげなのが煩はしいのである。この源氏に對して煩はしくうるさく感ずる人間の感覺の鋭敏さに彼女の知性がうかがはれる。源氏が去つてから、人々は源氏の御匂ひを讚美するのに、彼女はそれをもうとましく不快なものに思ふ。この潔癖さも倫理的な感覺の鋭敏さにもとづくものである。彼女は、秋のあはれを知り顔に答へたことさへも、くやくしく恥かしくて自己嫌悪におちいるのであ

る。つつまじさが女性の屬性として最も高度のものであることは、私たちが空蟬の場合以來見てきたところである。そしてこのつつまじさは必ず自尊心と裏合せになつてゐる。

このやうに源氏に固く心をとざした彼女が、紫の上を失つた晩年の源氏にはこよなき慰め手であつた。かうした面に彼女の人間としての高さがあらはれてゐる。

枯れ果つる野邊を憂しとや亡き人の秋に心をとどめざりけむ

今なむことわり知られ侍りぬる。御法みほり卷

と、秋を愛した自分が、春を愛した紫の上への愛惜と尊敬を披瀝する。この消息を見て、源氏は、「言ふ甲斐あり、をかしからむ方の慰めには、この宮ばかりこそおはしけれ。」と秋好の美點を見いだす。かつては、あんなにつれなかつた彼女が今は誰よりもよい慰め手である。ここに彼女の性格の美しい清らかなあたたかさがある。のちの世の讀者が彼女を秋好とよぶのもまことにふさはしい。

一〇 槿の君

桃園式部卿の宮（モモゾノシキブキョーノミヤ）の御女みよめ槿（アサガオ）の君は、位高き家に何不自由なく育つた姫君である。門地といひ人柄といひ源氏に似合はしい姫君で、源氏が心をひかれたのも當然であらう。そして、そのことが噂となつて女童の口によつたことも至極ありうべきことであつたであらう。帚木はらばの

卷に中川の宿に方違へに源氏の行つた夜、女房どもの噂話の中にこの種の君と源氏のことが出てくる。その出現の仕方が、さうであるやうに、この君は物語の傍系的人物の一人である。最後まで源氏の言に耳を傾けない點で、この物語に於けるユニークな存在である。

結局彼女は、女性の地位が不安の中にさらされてゐたこの時代に於いて、最後まで自己防衛を固守して男に従はなかつた理知的な女性であつた。彼女は夫にすてられるくらゐなら結婚しないといふタイプなのである。

六條の御息所が源氏に薄遇されるのを聞いては、そのやうになりたくないと望む。

種の姫君は如何で人に似じへ(ヒトノヤウニ源氏ノ意ニ從ツテカラ冷遇サレタリハスマイ)と深く思せば、はかなき様なりし御返りなどもをさをさなし。さりとして人憎くはしたなくはもてなし給はぬ御氣色を、君もなほことなりと思し渡る。葵卷

同じ葵の卷の、賀茂の祭の御禮の日源氏の美しい姿を見ては、

姫君は年頃聞え渡り給ふ御心ばへの世の人に似ぬを(源氏が長イ間求愛ノ便リヲヨコス御志ガ人トハク
ラベモノニナラナイノヲ)、なのめならむにてだにあり(人並ノ容姿デモ心ヲ動かサレルデアラウニ)、
ましてかうしも如何でと御心留まりけり(マシテコレホドニドウシテ美シイノダラウト心ヲヒカレタ)。
いと近くて見えむまでは思し寄らず(シカシ近ヅイテ愛セラレヨウトマデハ思ヒモヨラナイ)。

源氏の心を信頼出来ないで、これに従はうとはしないが、さりとして全く冷淡に悪意をもつて報いようと

いふのではない。そして、源氏の美しい姿、長い間の志などには心をひかれる。かたく自己を守る強い意志と物のあはれも美しさも理解する情操とを合はせもつてゐる。ここに源氏がいつまでも心惹かれてゆくのである。彼女の心情は『いと近くて見えむまでは思し寄らず』といふ中間的限定の中に止つてしまふのである。

二

賢木の巻で彼女は齋院さいいんとなり、八年ほどして種たねの巻で父君がなくなれば、その御服おんぎやくのため退任し、桃園の御所に移り叔母の五の宮とともに住むこととなる。その邸へ源氏が訪ねてゆく。『ただ一言憎いなどでも、入つてでなく直接おつしやつて下さるならば、それをきつかけとして断念することとも致しませう』と、切に責めるけれども、彼女は若い時ですら恥かしく思ひ切つてゐたのに、今ではもう、年の盛りも過ぎ、さういふことは似合はしくなく、一聲の御返事も恥かしくて、更に心を動かさない。

つれなさを昔に懲りぬ心こそ人のつらさに添へてつられ
と怨む源氏に、

『あらためて何かは見えむ人の上にかかりと聞きし心變りを

昔に變る事は習はず。(今更ドウシテオ目ニカカリマセウ、他ノ女ノ方ニ君ハ心ガハリ、ヲセラレタトキイテヲリマスノニ。昔ト變ルトイフコトハ私ハ自分ノ主義トシテキラヒデス。)

と答へて終始一貫、自己の信條に生き通した點に於いて、その心構への明白直截なる點に於いて、彼女は特

異なる存在である。この際に於いても源氏の人柄のすぐれて深いことを知らないのではないけれども、そんな様子を見れば、自分が世間一般の女と同列に見なされるだらうと懐かしげな返事をする氣にもならない。ここには自分自身を世間一通りの女性にまで引き下げることのできない矜持がある。物事の中途半端な状態に満足できない、自己主張がある。

忌明け（忌明け）の御服直（おんふくただ）しに源氏から侍女の宣言（せんじ）のもとまで色々の贈物があつたが、彼女は不快に思ふ。しかし格別意味ありげな手紙が添へてある譯でもなく今更ことわる口實もなく、どうしてことわらうかと思ひ悩む。かうした時の態度や心理にも、彼女の個性がはつきり現れてゐる。表面的には、ごくあたりまへのやうな贈物の中に、何か不快なものを感じてこれを拒否しようとする。ところがそれを拒否すべき表面的理由がなくて、それもできない。そして叔母の五の宮がなだめて源氏を辯護しても、あくまで自己の意志を立て通す。

故宮（ナキ父君）にも、しか心剛きものに思はれ奉りて過ぎ侍りにしを、世になびき侍らむも、いとつらき事になむ。少女卷

と、どうせ強情者と思はれてきた故、今更にそれをまげるのも不都合だといふ。つまり彼女は、つねに自分らしく生き通したかつたのであり、また生き通したのである。

源氏物語の中には悲劇的な運命を背負つた女性はいくはないが、玉鬢（タマカズラ）ほど残酷な宿命の中に生ひ立つた女性はあるまい。頭の中將（後の内大臣）といふ門地高き父をもちながら、母君夕顔のはかない宿命の蔭に、幼くして西の京の乳母のもとにあづけられ、母が行方も知れずなつてからは、乳母とともに西海に漂泊せねばならなかつた。そして筑紫で成長した彼女を待つてゐたのは、野人の豪族大夫の監（タエノゲン）の強壓的な求婚であつた。乳母一家の決死的な忠節によつて、虎の尾をふむ思ひで大夫の監の隣手から逃れて京に上る。都に歸つても母の消息は依然として分らず、實の父のところの名乗つて出る術もない主従は、全く途方にくれた。かくて今は神佛にすがりよほかになく、石清水八幡から大和の長谷觀音へと御佛よあはれ恵みを垂れ給へ、と若き姫君を徒歩詣でをさせることにした。

ならばぬ心地にいとわびしく苦しけれど、人の言ふままに、物も覺えて歩み給ふ。如何なる罪深き身に、かかる世にさすらふらむ、わが親世になくなり給へりとも、我をあはれと思さば、おはすらむ所に誘ひ給へ、若し世におはさば、御顔見せ給へと、佛を念じつつ、ありけむ様（母夕顔ノ容貌）をだに覺えねばただ親おはせまし、かばとばかりの悲しさを、歎きわたり給ひつるに、……辛うじて棒市といふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生ける心地もせでいき着き給へり。

この紀行をよんで私たちは、この薄倅の女性の悲しき運命に一掬の涙を呑まぬであらう。この參詣で右近との奇遇によつて彼女は救はれるのであるが、この母戀ふる情はいつまでも彼女の心を揺すぶるのである。かくて右近のとりなしで源氏の手許に引き取られるのであるが、親切な源氏よりもむしろその無情を怨んで、もよい實の父、頭の中將（このときは内大臣）を戀ふるのである。

頭の中將の子息たちが實の兄妹とも知らず彼女を求めるとつけても、早く實の親に知られたいと願ひ（胡蝶卷）、又雲居の雁（クモイノカリ——頭の中將の女）と夕霧（ユキギリ——源氏の息子）との間の紛争に關して源氏と父頭の中將との仲違ひを見ては、

さしかかる御心の隔ある御中なりけりと聞き給ふにも、親に知られ奉らむ事の何時となきを、あはれにもいふせく思す。常夏卷

と打ち歎くのである。また源氏の求愛的態度にあつて彼女の歎きは母のいまさぬことであつた。

何事もとざまかうざまに思し集めつつ、母君のおはせずなりにける口惜しさも又取返し惜しく覺ゆ。

まことにこの苦惱の時ほど、彼女が母を欲したことはあるまい。玉聲の半生は孤兒の苦難と血肉を戀ふる切實な惱みに綴られた、悲しくもわびしき年月であつた。

二

帯木の卷に早くもあらはれ、玉聲の卷から眞木杜の卷までの源氏の中年生活の大部分を占める卷々の主人公として出現する玉聲は、如何なる性格容姿の持主であつたのであらうか。右近が長谷で彼女を發見した時

の觀察を借りよう。

容貌は大變すぐれて美しいが、もし田舎臭く無骨なところがあつたら、それは玉に瑕であつたであらう。母君の夕顔の上はただ無邪氣で、おつとりして（いと若やかにおほどかに）柔和でものおだやか（やははたとたをやぎ）であつたのに對し、この玉鬘は、氣品があり、その態度も振舞も立派で、ゆかしく重々しい。（これは氣高く、もてなしなど恥かしげによしめき給へり）。

それからしばらくして玉鬘が源氏の新邸六條院に移り住んでまだ間もない正月、源氏訪問の際、

まだいたくも住み馴れ給はぬ程よりは、けはひをかしくしなして、をかしげなる意べの姿なまめかしく、人影あまたして、御しつらひあるべき限なれども、こまやかなる御調度はいとしも整ひ給はぬを、さる方に物清らに住みなし給へり。初音卷

調度が揃はねば揃はぬなりに、家の中を調和的にととのへるといふ點に、彼女の實際的なかしこさがあ

る。
正身（玉鬘自身）も、あなをかしげと、ふと見えて、山吹にもてはやし給へる御容貌など、いと花やかに、ここぞ曇れると見ゆる所なく、隈なく匂きらきらしく、見まほしき様ぞし給へる。

このかがやくやうな豊かな明朗さこそ、彼女の眞面目である。

胡蝶の巻、二十二歳の彼女の描寫を見るに、『うつぶし給へる様、いみじう懐かしう、手つきのつぶつぶと肥え給へる身なり、肌つきのこまやかに美しげなるに……』とあり、更に野分の巻の夕霧の心理の『八重山

吹の咲き亂れたる盛りに露かかれる夕映ぞ、ふと思ひ出でらるる』といふ表現は、彼女の明るい美しさを、五月の陽光に輝く山吹の花に比してゐる。ここには健康があり、圓滿さがある。同じ折の『酸漿アザミなどいふめるやうにふくらかにて、髪のかかれるひまひま美しう覺ゆ。まみのあたりわららかなるぞ（目ツキノ様子ガニコヤカナノガ）いとしも品高く見えざりける。その外は露、難つくべうもあらず』と品位はさう大して高くないが、その外には難點はない。豊かな頬に微笑を湛へた親しみやすい美しさがある。

三

このやうな豊かさを支へる内面的な資質はどうであらうか。それは現實的な伶俐さに裏つけられた調和的な賢さである。それは對源氏の態度の中に、いくらでも見てとることができる。

先づ第一に、右近の勸説によつて源氏の庇護を受けるやうになる際、『いかでか知らぬ人の御あたりには交らはむとおもむけて、苦しげに思したれど……』と、源氏を全くの他人と同列に見なしてゐる。彼女の母の夕顔だつたら、恐らくただ右近のなすがままにゆだねたであらう。

また第二には、いよいよ源氏のもとに引取られて後も、

同じうは、眞の親にさも知られ奉りにしがな、と人知れず心には懸け給へど、さやかに漏らし聞え給はず、（源氏ヲ）打解け頼み聞え給ふ心向けなど、らうたげに花やかなり。

かうした所に彼女の性格の厚みが生れ、心情の豊かさが出て来る。又源氏のうるさき言葉に對しても、

（源氏ガ）氣色ある言葉は時々ませ給へど、（玉鬘ハ）見知らぬ様なれば、（源氏ハ）すすろにうち歎かれ

て渡り給ふ。

(源氏ガ) ただならず、氣色ばみ聞え給ふごこと、(玉鬘ハ) 胸潰れつつは、さやかにはしたなめ聞ゆべきに、はあらねば、ただ見知らぬ様にもてなし聞え給ふ。

執拗な源氏の好色の氣持に對して、ただそしらぬやうに受けながしてゐる。かうしたところに、彼女の調和的なきしこさがある。

野分の巻に、朝の源氏の訪問を受けた彼女は、源氏の戯れに對して『から心憂ければこそ今宵の風にあくがれなまはしく侍りつれ(コンナニ困ツタコトヲオツシャルカラコソ、私ハ暴風ニマギレテ、ドコカへ行ツテシマヒタク存ジマシタ)』とむづがると、源氏が笑つて『風のままに飛んで行くのでは少し輕すぎませう。それとも何處かよい落着場所でもありますか……』と言ふので、彼女も實にまあ我ながら變なほど、正直に思ふままに申し上げてしまつたことと、自分でもをかしくなつて、にこつと笑つてしまふ。そのさまがまことに愛らしく美しいのである。

彼女は源氏の懸想に對しては、いつも見知らぬ様にもてなして、これをそらしてしまふ。そして心の扉を、つひに源氏には開かなかつたが、近江の君(オーミノキミ)が内大臣邸に引取られてからの憐むべき悲喜劇を見ては、彼女は源氏への感謝の情は決して忘れなかつた。ことに、意外なもののはづみから、髭黒大將(ヒゲグロダイショウ)に嫁するやうになつてから、彼女は今更ながら源氏的美點を痛切に感得する。眞木柱の巻の源氏を、髭黒大將が嫉妬してくどくどとつばやくのを、憎しと思ふ彼女のかうした夫への反撥

に、せめてもの恩人への心づくしが潜められてゐたであらう。

しかも結局彼女は、無事平穩に髭黒大將の妻として、その平和な後半生を送る。そこには間もなく次々に生れる子供たちへの愛情に生きていつたであらう彼女の姿が思ひ浮べられる。

美しく若い女性が自分に似合はしいであらう人を逸して、むくつけき中年の男性と結婚しいつのまにか、幾人かの子の母として穩かな生活の中に落着いてゆく。さうした例は、私たちが今の世にもよくぶつつかることである。玉臺の後半生の平和であらうことを私たちは確信する。あまりにも數奇であつたその前半生の故に。

一二 源の内侍

源氏物語にあらはれてくる女性も數多く、その性格も種々の類型に分たれるが、その中でも喜劇的人物として特異な存在は、老女源の内侍（ゲンノオヤイシ）と頭の中將の娘、近江の君とである。憂暗な源氏物語の階調の中にあつて思はぬ滑稽劇を演じ出だすこの二人物は、一は年は五十七八でなほ好色の浮氣者、一は粗忽者でおしやべりで淺はかな若い女性である。

それは源氏が十八九歳の若かつた頃、藤壺とのおふけなき戀に悶えつつあるときの挿話的出來事である。年はもう六十路に近い老女、源の内侍は身分もよく、素養もあり、世人の氣受けも輕々しくはない方であつ

たが、甚だ浮氣者であつた。源氏が試みに戯れ言をいつてみると、女の方では源氏を自分と不似合だとも思はず、交渉を生じるのである。女は帝の御梳櫛かみくしに奉仕などしてゐた。顔の映るほどに色の濃い赤い紙に、小高い森の繪を塗りかくした扇で顔をさしかくして振向いたその目つきは、ひどく目尻を延べて媚を浮べてゐるけれども、臉は黒ずみ落ちこんで、髪は端がそけてゐるといふ有様である。やがて、この間柄を知つて頭の中將もまた源の内侍と逢ひはじめるのである。夕立がして名残の涼しい晩に、内侍所のあたりで、女と逢つてゐる源氏を見つけて、悪戯心から二人を驚かせる。源氏は狼狽して屏風の後にかくれる。中將は自分といふことを知られないやうにして、ものも言はないで、その屏風をがさがさとたたみよせたりして、おほぎやうに騒ぎ立てる。さういふことには内侍はなれてゐるので、源氏をどうして逃さうかと、中將をぶるへながら引き止める。中將も聲を立てないで、ただ表情だけ甚くおこつた様子をして、大刀を引き抜く。女は「あか君、あか君。(ママママアナタ)」と中將に向つて手をすり合はせて拜む。つひに源氏は相手が中將だと知つて大刀をもつた腕をひどくつねる。中將は源氏をとらへてはなさない。さらばと源氏は中將の帯を解かうとするなど、戯談半分の立ち廻りを演ずるのである。

この場面の内侍の殊勝さはなかなかユーモラスである。この源の内侍をはさむ二貴公子の滑稽劇は、紅葉の賀の巻の藤壺と源氏との宿命的な間柄のなかに、思ひ切つた馬鹿馬鹿しさを點描してゐる。

この好色の老女は長く生きのびて、この十數年後源氏とゆくりなくも出逢ふのであるが、戯談まじりの歌

を交はすしやれ氣を失はないのであるであつた。

一三 近江の君

頭の中將と夕顔との間に生れた玉臺を、源氏が自分の子供を見つけ出してきた形で養つてゐる頃、さうとは知らぬ中將は玉臺のことを思ひながら、若し自分の子だと名のりするものがあつたら、注意してくれと御子たちに言つてあつた。その折中將の息子柏木（カシワギ）が聞き出してきて手許に引き取つたのが近江の君（オミノキミ）であつた。ところが源氏に對抗して立派な娘を得ようとした豫期は、がらりとはずれてすつかり幻滅の悲哀を感じさせられるのである。額が非常に狭く、聲の落着きがなく早口である。（額のいと近やかなると聲の淡つけさ）。雙六を打つては、しきりに揉手をしながら、『せうさい、せうさい（小賽）』と相手が小さい目を振出すやうに祈つてゐるその聲が大變早口（舌疾き）である。その輕々しいのに父君は眉をひそめながら、『あなたを小間使のやうにしてでも、左右におきたいとかねて思つてゐたが、まさかさうもできない。普通の奉公人なら、どんな人物であつても、人中に出てそんなに人の注目をひかないものだから氣樂であらう。しかしそれでさへ、誰の娘、彼の子などと人に知られる身分になると、親兄弟の面汚しになる類が多い。まして（私の娘と名のるものが……）』と言ひかけたがやめる。その父君の顔色の恥かしい様子であるのにも彼女は一向氣がつかず、

『何か（イーエ、ドウイタシマシテ）、そは事々しく思ひ給へて交らひ侍らばこそ所せからの（ソレハ自分ヲ大シタ身分ダト思ツテノ御奉公ナラ窮屈デモアリマセウガ）。御大當取にも仕うまつりなむ、尿壺持——不淨ノ掃除役デモイタシマセウ。』常夏卷

と、言ふので父君も我慢がでなくて笑つて、『それは似合はない役です。ね。かうたまさかにあふ親に孝行しようといふ心があるなら、何もそんなことをしなくてよいから、あなたのものを言ふ聲を、すこしゆつくりと（のどめて）おつしやい。さうしたら、私も長生きができません。』おどけた氣性の方なので笑ひながら言はれる。すると近江の君の答はかうである。

『私の早口は生れつき（舌の本性）でございます。幼い時でさへ亡くなつた母が始終苦に病んで教へて下さいました。私が生れる時に近江の妙法寺の別當大徳が産屋で祈禱をされたさうですが、それにあやかつたのでと歎いてをられました。ほんとにどうしてこの早口を直しませうか』と、どきまぎしながら答へるのである。異腹の姉妹弘徽殿の女御（コキデンノニョーゴ）の邸へ行つて色々見習へよと父君が言ふと、『大變うれしうございます。ぜひぜひ皆様から人並に扱つて頂きたいと、そればかり思ひつめてきました。お許さへあればお水汲みの奉仕でもいたしませう』と、いい氣になつて一層早口にしゃべるので、言うても仕方がない（いふかひなし）と父君は思はれ、『まあそんなに水や薪の仕事をしなくても女御のところへおいでなさい。ただあなたが大徳にあやかつた早口さへ直れば』と茶化して戲談口をきかれるが、御本人はいつか氣がつかない。

又行幸ゆきゆきの巻で、玉鬘たまむすが頭の中將の娘であることを源氏が發表し、源氏は尙侍なうしやくとして帝につかへさせる希望である。玉鬘のことは世間いきこえてはうるさいから内證にしてゐたが、段々評判になつて近江の君も聞き出して、弘徽殿の女御の御前に、柏木やその弟の辨の少將などの侍つてゐるところへ出てきて（この時作者は彼女のことを『さがな者の君』とよんでゐる）玉鬘のことを嫉妬し『あの人も劣り腹（卑しい女ノ腹ニ生レタモノ）ださうな』と露骨にいふ。そして柏木にその輕卒をたしなめられる。すると彼女は、やつきとなつて反撃する。

『うるさい。おだまりなさい。みんな聞いて知つてゐますよ（あなかま。みな聞き侍り）。その人（玉鬘）は尙侍になる筈です。私がこちら（弘徽殿の女御）に御奉公に上りましたのも、そのやうな御心配（女御の力で尙侍にしたらふ）もしていただいだけよかと、普通の女房たちでもないやうな、いやな仕事まで一所懸命してゐるのです。女御さまが冷淡なのです』と恨みかけるので、みな微笑して、男である柏木や辨が、『尙侍（女でなければなれない）に缺員ができたから、私らも志望しようと思つてゐるのに、あなたが望みになるのはそれはひどいといふものです』と言ふのに腹を立てて、『あなた方のやうな御立派な御兄弟方の中に、私のやうなつまらぬものが仲間入りしたのが間違つてゐました。中將の君（柏木）がうらめしい。いらぬお世話をして私を迎へ出してきて、ひとを嘲弄していらつしやる。私のやうなつまらぬものは、とても居れさうもない御殿です。恐縮恐縮（あなかしこ、あなかしこ）。』といつて、

しりへさまにゐざりしぞきて見おこせ給ふ。憎げもなけれど、いと腹悪しげに、まなじり引き上げた

り。(後ノ方ニキザリ退イテ恨メシサウニ中將ヲニラム。心ノ底ノ憎々シサハ格別ナイケレド、大變意地悪サウニ、目尻ヲツリ上ゲテキル。)

みんなにからかはれるが、柏木も、

『天の岩門いわたさし籠り給ひなむや、目易く。(天ノ岩戸ノ中へ引ツコンデイラツシヤツタラドウデス、ソナニ腹ヲ立テ出シヤバルヨリズツト見ヨイデセウ。』

と、言つて皆座を立つので近江の君はほろほろと泣いて、『この君達あなたたちまで自分にすぎなくされるのだ。ただ御前(弘徽殿の女御)は御親切にして下さるのでお仕へしてゐるのだ』と氣輕にいそいと下臈や童女もしかねるやうな雑役まで、あちこちと走り廻りながら一所懸命に御奉公して(いとかやすくいそしく、下臈童べなどの仕うまつり堪へぬ雑役ざふやくをも、立ち走りやすく惑ひありきつつ、志を盡くして宮仕しありきて)、『私を尙侍に推舉して下さい』と女御を責めるので、女御もあさましく、あきれて物も言はれない。これをきいて父君までからかつて慰みものにするといふ有様である。

三

この近江の君の無思慮・輕躁は眞木柱の卷にあらはれる夕霧への懸想にいたつていよいよ彼女の異常性を露呈する。父君は彼女の好色がましい心のきざしからどんな粗忽を引き起すかと人中に出るのをとめるが、一向ききいけない。あるとき殿上人が澤山禁中の弘徽殿の女御の御方に参り音楽などしてゐる時、夕霧も加はる。みなで夕霧の手柄をほめると、この近江の君は人々を押し分けて前へ出てゆく。人々が『あらいやだ

これはどうしたことか。(あなうたて、こはなぞ。)」と引き入れようとするが、彼女は

いとさがなげに睨みて張り居たれば(性悪サウニニランデ夕霧ノソバニガンバツテキルノデ)煩はしくて(人々モ始末ニ困ツテ)『あうなき事や宣ひ出でむ』と突きかはすに『ツツシミノナイコトヲ言ヒダス
ドラウ』ト互ニ膝ヲ突キ合ツテキルト、この世に目馴れぬまめ人をしも(世間デ稀ナ謹直家ノ夕霧ヲ)
『これぞな、これぞな。(コノ人ダ、コノ人ダ、ワタシノスキナノハ)』とめでて、ささめき騒ぐ聲いとし
るし。(眞木柱卷ノ終リノ所)

王朝女性に第一に要請せられた、教養によつて高められ、洗煉によつて深められたエテイケツト(禮儀)とマナー(身の處し方)の全き缺如である。末摘花の行爲の仕方は、物柔らかな弾力性を缺いでゐた爲、折に合はない喜劇を演じ出すのであるが、まだ一應の型にはまつてゐた。この近江の君の無軌道・ノンセンスはまことに物語中隨一のさがなものである。そこにあるものは身の程といふ程を知らぬ無知である。

源の内侍・近江の君の醸し出す滑稽は、ただに源氏物語だけでなく、ひろく日本の文學の中でも獨自的な意味を有してをり、また作者の作家としてのリアルな眼の確かさを示してゐるものである。

一四 藤 壺

幼くして母を失つた源氏が、更に育ての親である祖母君に死別した六歳のいとけない頃から、父帝の愛情

のもとに育ちながら、満たされない母性愛への追求は、亡き母に面影の似たといふ父帝の新しい后藤壺（フジボ）への憧憬となる。生母の記憶の全くない源氏は藤壺の中に自分の隠の母の幻像を築き上げていつたのであつた。この幼少の源氏の飢渴状態に陥つてゐた母性的な愛の、母性的といふ性質の中には、女性的といふ要素をも含んでゐる。生母に似てゐるといふ契機から生れた藤壺への愛着は、女性一般に對する憧憬へと轉化してゆく。源氏は藤壺といふ具體的な人間の中には、『隠の母』と『理想的女性』とを發見し、又創造していつたのである。

『いと若う美しげにて切に（源氏カラ）隠れ給ふ』藤壺。それを自然漏り見奉り、『母御息所は影だに覺え給はぬを、（藤壺ガ母ニ）いとよう似給へりと典侍の聞えけるを、若き御心地にいとあはれと思ひ聞え給ひて、藤壺ノ所へ）常に參らまほしうなづさひ（ツキマトウテ）見奉らばや』と思ふ源氏。そして兩者の親近をよろこばれる父帝。かくして源氏の藤壺への接近に拍車がかけられる。また葵の上に親しむことのできなかつたことは——それはすでに源氏が藤壺に親近してゐたことが一つの大きな原因であつた——葵の上にとつても、源氏にとつても、また藤壺にとつても大きな不幸であつた。この親近はかの離反の因となり、この交互作用の發展深化は源氏の生涯の最大の悲劇となつていつた。葵の上を見ては『さやうならむ人をこそ見め』と藤壺を思ひ、なき母の邸を修理しては『かかる所に思ふやうならむ人をすまて住まばや』と満たされない藤壺への思慕の情を燃やしつづけるのである。すでに大人となつた源氏にとつて、母としての理想的存在は女としての理想的存在に轉化していつたのである。

藤壺と源氏との交渉は二つのクライマックスをもつて描かれてゐる。

第一、若菜の巻、藤壺の里第、三條の宮に於ける逢瀬の場面。源氏十八歳。

第二、賢木の巻、桐壺帝崩御の後、藤壺は里の三條の宮に移る。しきりに源氏を避けるが、ある夜無理に源氏は近づき、明けて源氏は^{ぬいぶ}塗籠にかくれる場面。藤壺、源氏の強ちな愛情を容れず、藤壺の出家決意の契機となる一夜。源氏二十四歳。

第一の時期は藤壺への思慕の情は、抑壓され堰止められてはますます激しくなりまさりゆくときである。その熱情のほとばしり出たのが空蟬・夕顔との戀愛であつたが、一は一夜にしてとび去り、一は僅かにひとときのはかない契を残して死んでゆく。藤壺の一點を中心とする求心運動は、時にこのやうな遠心的傾向を見せながらも、本質的には求心的であつた。しかもその遠心的傾向の挫折によつて求心運動はますます加速度的となり、ここに第一のクライマックスが登場する。源氏の激情が^{ツブナチツク}狂的であつたことは、

かかる折だにと（藤壺ガ里ニ下ツテラルコノ機會ニデモ逢ヒタイト）心もあくがれ惑ひて（ソノコトニ心ヲ奪ハレテ）、いづくにもいづくにも參うで給はず（ドノ女ノ所ヘモ通ツテ行カヌ）。内裏^{うち}にても、里にても、晝はつくづくと眺め暮して、暮るれば王の命婦（オノノミヨ）ブーカツテ藤壺トノ問ヲトリモツタ藤壺ノ侍女）を（藤壺ニ逢ハセヨト）責めありき給ふ。

といふ状態であつた。この積極的・能動的な源氏に對して藤壺の心情と態度はどうであつたか。

宮（藤壺）も淺ましかりしを思し出づるだに（アマリニ意外デアツタ源氏トノ逢瀬ヲ思ヒ出ササヘ）世と共の御物思ひなるを（終生悔恨ノ種デアルノニ）、さてだにやみなむと（セメテアレキリデ源氏トノ間ヲ斷ツテシマハウト）深く思したるに、いと心憂くて（思ヒガケナク又逢ウタノガ情ナクテ）いみじき御氣色なるものから（クヤシク思ツテキルヤウデアルガ）、懐かしうらうらうたげに、さりとて打解けず、心深く恥かしげなる御もてなしなどの（考ヘ深クコチラガ恥カシクナルヤウナ源氏ニ對スル御待遇ナドノ）猶人に似させ給はぬを、などかなのめなる事だに打ち交り給はざりけむと（多少不満ナ點デモ藤壺ニナイカト）辛うさへぞ思さるる。

再び犯すまいと思つた淺ましい過失、源氏との逢瀬を、源氏のあやにくな激情から、心ならずも重ねた藤壺の心情は、しかし源氏を憎み切ることではできなかつた。端的に言ふと、心の底では藤壺は源氏が好きなのである。——空蟬がさうであるやうに——そして又いぢらしいのである。源氏の無理な振舞をくやく情なく思ふが、怒るにも怒れないのである。自分のおかれた位置を考へると、否定的態度をとらうとするのであるが、どこかに自分の本心——意識下の意識が顔を出すのである。これは後に懷妊と分つてから、絶對に源氏を拒否し近づけないで、その年の終頃藤壺を里に訪ねた源氏を他人行儀に扱つて歸した（紅葉賀卷）、その翌年の正月の参賀に源氏が藤壺のゐる三條の宮に参る。源氏が成長するにつれて人間とも思はれないやうに美しくなられるのを侍女たちがほめあつてゐるのをききつけて、『宮は御几帳のひまより仄見給ふにつけても思はず事繁かりけり』、もはや逢ふまじと胸中深く決してみながら几帳の間から仄見ずにはゐられないの

が、藤壺の源氏に對する心情の本質なのである。

やがて藤壺は男兒を生むが、御子は源氏によく似てゐる。藤壺の苦悶——祕密の源氏への恐怖が更に深刻化する。やがて彼女は中宮に立ち、桐壺帝は位を譲られるが、間もなく崩御せられる。そして源氏との間の祕密を帝が少しも御存じならず終られたことを、空恐ろしく思はれるのに、今また源氏との間に噂でも立てばと、わが身はともかく御子のために、一切源氏を近づけないで、この祕密をかたく守るよりほかないと決心するのである。ここに死者に對する罪の意識と、罪惡の露顯に對する恐怖とに惱む王朝女性の宿命的な悲劇を見る。その頃前述の第二のクライマックスたる塗籠の場面が出現するのである。

三

今は帝を失つて獨り身となつた藤壺が三條の邸に歸り住んで、ひたすら源氏の求愛に對し遁れてゐたのに、いかなる折にか源氏は近づいたのである。藤壺の驚愕と困惑はいかばかりであつたか。

宮（藤壺）いとこよなくもて離れ聞え給ひて（マルデ相手ニナラナイ）、果て果ては御胸をいたう惱み給へば、近う侍ひつる命婦、辨などぞ淺ましう見奉り扱ふ。

このなす所を知らず昏倒する藤壺の苦惱は、空蟬の場合よりは遙かに深刻であり、宇治の大君（オーイギミ）——薰君（カオルギミ）が忍びよつたとき、（田舎角卷）——ほどの強さはなく、柏木に對する女三の宮（ニヨサンノミヤ）よりは理知的である。心中の苦悶は激しく彼女の肉體を壓倒するのである。さういふ人間存在で彼女はあつたのである。

源氏も前後の分別を失つてしまつて、そのまま夜が明けるので、人目を憚つて藤壺の侍女たちが塗籠ヌルカといふ土藏のやうな物置に源氏をかくす。そしてその日も暮れる。源氏は夜になると又も近づいて盡きせぬ御心のほどを言ひつづける。

あらざりし事にはあらねど、改めていと口惜しう思さるれば、懐かしきものから、いとよう宜ひ遁れて、今宵も明け行く。(源氏トノ間ニ一度モ過失ガナカツタトイフデハナイケレド、又ソノ過ヲクリカヘヌノハ残念デ情ナク思ハレルノデ、源氏ヲナツカシク思ハレルモノノ、巧ニ言ヒノガレテ今夜モ明ケテユク。)

このことあつて間もなく晴天の霹靂の如く藤壺の出家が宣告されるのである。それは彼女としては、ほかに何處にも行きやうのない道であつた。ここにいたるまでの、そして遂にここにいたつた彼女の内的苦悶は深く複雑な人知れぬものであつた。そして出家は、事前に誰にも洩らさず突如として行はれた。ここに空蟬の出家の仕方と相似たものがあり、さすがに彼女らしい身の處し方であつた。

四

かくして源氏との苦惱を解決してからは、その知性・情感・教養の美點を發揮し、御子(冷泉院——レイゼイイン)を楔子として、親としての美しい協力を源氏と共にしつつ、源氏への親愛の情を示して、その父を父と呼べぬ冷泉院への人知れぬ惱を抱きながらも、愛兒の平和な治世と源氏の榮華の中に、安らかな餘生を送るのである。

須磨時代の逆境の源氏に『物の聞えも又いかがりなされむと、我が御爲、人の御爲、いとほしうつつまじけれど、忍びつつ御とぶらひ常にあり』『昔かやうにあひ思しあはれをも見せ給はましかば』と源氏を歎じさせるのである。

年頃はただ物の聞えなどのつつまじさに、少し情ある氣色見せば、それにつけて人の咎め出づる事もこそとのみ、偏に思し忍びつつあはれをも多う御覽じ過ぐし、すくすくしうもてなし給ひしを…… 須磨

卷

藤壺の本心はこれである。源氏への親愛の情は誰よりも強かつた。ことに自らまだ若く源氏の幼かつた頃からの年少者への母性的愛情に出發した彼女の愛情は、源氏をめぐるすべての女性の源氏への對感情の中で最もユニークなものであつた。ただ彼女が、源氏の父君の、しかも帝の妻であつたことが、この愛情をすでにその愛情が始まつたときから否定してをり、常にこの愛情を抑壓し歪曲した。そこに彼女の一切の矛盾・動搖・苦悶・悔恨が生れた。

出家して平安な生活に入つた彼女は、折に觸れ事につけて教養の高さ、中庸の美德、世の人への慈悲心を發揮して、三十七歳をもつて天下をあげての悲しみの中に世を去つた。

死して紫の上は美を惜しまれ、藤壺は徳を惜しまれた。

深草の野邊の櫻し心あらば今年ばかりは黒染に咲け 古今集哀傷

源氏の故人を悼む言葉に引かれたこの歌は、自らの美と愛とのために、人知れぬ苦惱の生涯を生きた藤壺

への、まことにふさはしき挽歌である。

一五 明石の上

一

この娘すぐれたる容貌かたちならねど、懐かしうあてはかに、心ばせある様などぞ、げにやんごとなき人に劣るまじかりける。身の有様を口惜しきものに思ひ知りて、高き人は我を何の數にも思さじ、程につけたる世をば更に見じ、命長くて、思ふ人々に後れなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむ、などぞ思ひける。(コノ娘——明石ノ上ハ容貌ハ特ニスグレテ美シイトイフノデハナイケレドモ、人懐カシク、アデヤカデ思慮ノアル様子ナド、マコトニ高貴ナ人ニモ劣ルマイト思ハレル。取ルニ足ラヌモノト、自分ノ身ノ程ヲ自分自身デヨクワキマヘ知ツテ、源氏ノヤウナ高貴ナ方ハ、自分ノヤウナモノハ、物ノ數トモオ思ヒニナルマイ。自分ノ身分ニ相應シタ、平凡ナツマラヌ相手トノ結婚ナドハ夢ニモスマイ。若シ自分ガ長生キシテ、ナツカシイ父母ニ死別シタナラバ、イツソニエデモナツテシマハウ。身ヲ投ゲテ海底ノ藻屑トモナラウ。ナドト思ツテラツタ。) 須磨卷

この明石の上(アカシノウエ)登場に際しての作者の記述する彼女の生き方は、その生涯を貫いてゐる。

ここにこの女主人公の悩みがあり、古受領ふるうりやうの娘の悲しみがあつた。『身の有様を口惜しきものに思ひ知れる』——自分の身分を不満足なものと識別する、それは彼女にとつては、くやしさを限りであるが——所の彼女

の謙虛の底には高い袴持が潜みその理想には深い諦めが裏づけられてゐる。光る源氏の如き一世を風靡する時代の寵兒の愛を受けることは、勿論彼女の最高の理想であつた。しかし高貴の人が、自分を一個の人格として——平等的な地位に於いて——遇してくれることは、『程につけたる世』(自分の身の程に相應した結婚生活)でないことを、彼女の知性は知りすぎた。ここに彼女のデレンマがあり、苦惱があり、煩悶があつた。源氏の意に従ふことは、それが彼女の本願であるにもかかはらず、彼女の知性の抵抗を受けずにはゐない。この彼女の知性は、すべての彼女をとりかこむ條件に、つねに強靱な抵抗をつげながらも、遂に敗北するにいたるのである。この明石の上の、源氏の要求と希望に對する抵抗と服従の過程は、次の五期を劃してゐる。明石の上の謙虛の展開をこの五時期に分つて考察してみよう。

第一期 明石巻で、源氏と契るまで。

第二期 松風巻で、源氏の招きによつて上京するまで。

第三期 薄雲巻で、姫君を二條院紫の上に渡すまで。

第四期 少女巻で、六條院に引取られるまで。

第五期 玉鬘巻——幻巻。六條院に於ける生活、姫君を中心として。

二

第一期 源氏と逢ふまで

須磨に於ける源氏の贅居一年有半、孤獨の寂寥はさすがに堪へがたかつた折、前播磨守である播磨入道は

源氏に娘を奉りたいと願ひ出る。これも淺からぬ前世からの契であらう、心細い獨寢の慰めにもと、娘へ文をつかはすが、娘は恥かしくつつましくて返事を書かうともしない。先づここに第一の拒否がある。

源氏の君の立派さ、美しさ、そのお心のあつさ、は勿體なく有難くお思ひ申し上げてはをるが、とてもくらべものにならぬ自分の身分を思へば、まことにかひないものであるので、なまじ自分のやうなものに、情のある御文など下さるにつけても、有難くうれしい半面に、くやしき情なさに、わけもなく涙が出てきて仕方がない。父入道に責められて返しの歌をしたためる。

思ふらむ心の程ややよいかに未だ見ぬ人の聞きか惱まむ（私ヲマダ一度モ御覽ニナラヌノニ、私故ニ思ヒ惱マレルトオツシヤルガ、一體ソソナコトガアルデセウカ、アナタノ心ノホドガ頼リナク思ハレマス）

明石巻

もののはれを知らぬ無教養な、かたくなな冷たい女ではさらさらしない。ただ詮なき身分の相違である。

源氏の申出でに涙くむ、その涙こそ複雑な心情の潮騒から湧き出る涙である。山の彼方の空遠きものに思つた幸が、手をはせはとどく近い存在となりながら、手を觸れることは永い不幸の源であることを、彼女の観智は教へる。觸るれば落ちなむ理想の玉を、じつと凝視したまま堪へなければならぬ身分に、彼女は規定づけられて、この世に生れてきたのであつた。彼女の苦惱と煩悶はここに始まつた。

極く賤しい身分の田舎者こそ、一寸都から来た人の戯談口に乗つて、そのやうに輕卒に情を交はすやうな、はしたない仕業をするのだ。そのやうな下賤な田舎者では、自分はない。輕々しい行ひは思ひもよらな

い。これが源氏の求愛に對する彼女の思ひである。「明石上の身を思ひ上りて思へるなり」と古人も註してゐる。この矜持が明石の上の性格を基礎づけるのである。また彼女はかう思ひつづけるのである。

人數にも思されざらむもの故、我はいみじき物思ひをや添へむ。(源氏ノ君カラ人並ニ取扱ハレルヤウナ身分デナイ自分デアル故、タトヒカリソメニオ言葉ニ從ツタ所デ、結局マモナク捨テラレテ、幸ノ少イ身ニ心勞ヲ加重スルダケデアラウ。)

ここに彼女の諦めがある。意識の底では諦め切れてゐない諦めである。意識下の本心は、「人數に思はれない。一生捨てられずに愛されたい」のである。これが彼女の眞實の、あらはな本願なのである。しかも、それはすでに當初から、「身の有様を口惜しきものに思ひ知つてゐる」意識に抑壓されてゐるのである。結局は、なかなかなる——はじめからさうでないのがましな——苦勞の種となることを知覺してゐるのである。そして、かく及びびもないことを願望する親たちの夢のはかなさを、自ら知る現實的理智的な娘である。

明石の上の生涯は、この理想・願望と、現實・身分との矛盾の對立・相剋に始まり、源氏物語に現れる女性性としては、最も幸福な生活を送る晩年まで、この悩みはつきまとふのである。

入道の迎へによつて、源氏は八月十三日の月のはなやかな夜、岡邊の家に明石の上を訪ねる。この夜になつても、彼女はできるだけ源氏を避けようとするが、つひに逢ふのである。ここに至るまでの彼女の悩みは深くかつ複雑であつた。遂に彼女の抵抗も、彼女をとりまく外的な條件——父入道の願望・源氏の執意——當時の社會的風潮と慣習など——と、彼女自身の心情の中に於ける理想を求めぬ心、ものの情を知る心といふ

内的な條件との前に、崩折れてしまふのである。時に源氏は二十七歳、明石の上は十八歳であつた。

三

第二期 源氏の招きによつて上京するまで。彼女の判断のあやまらなかつたことを明らかにするには、多くの年月を要しなかつた。源氏の訪問は、京への聞えや世間の思惑を憚つて、ややもすればとだえがちとなる頃は、さればよ（ダカラ言ヘナイコトデハナイ、自分ノ憂ハ遂ニ事實トナツタ）と思ひ歎く彼女であつた。しかし歎きはそれにとどまらなかつた。結ぶえにしも浅く、わづかに一年にして大きな破局がきた。都の情勢が好轉して源氏は歸京することとなつた。しかも彼女はやがて母となるべき身であつた。源氏の愛情はあやにくにまさり、明石の上の女らしさはますます豊かに深くなつてゆくのであつた。

（源氏ハ明石ノ上ヲ）見捨て難ク口惜しう思さる。さるべき様にして迎へむと（然ルベク計ラヒヲツケテ明石ノ上ヲ京ニ迎ヘヨウト）思しなりぬ。さやうにぞ語らひ慰め給ふ。

源氏の美しく立派な様子で涙ぐんで明石の上に色々と約束されるのを見て、明石の上は、

ただかばかりを幸にても、などか止まざらむとまでこそ見ゆめれど、めでたきにしも我が身の程を思ふにも盡きせず。

ここにあるものは謙虚・つつましき・純情であり、この一時の幸福に、もう後はすてられても何の心残りもあらうと思ふ敬虔な愛情と、さう諦めながらも諦められない彼女なのであつた。

長い間いとほしみ育ててきた自分といふものすべてを捧げたところの源氏の君を花やかな都に送つてか

ら、蕩鹽焼く煙たなびく明石の浦には、よせては返す波のやうに、かはることなき物さびしい明暮がつづいた。朝霧の中に明けゆく淡路島山を眺めては、夕映の明石の瀬戸をはせゆく白帆をみては、彼女は定めなき己が未來を思ひやり、どんな物思ひに沈んだことであらう。かくして、あくる年彼女は安らかに身二つとなつた。源氏からは乳母を自ら選んで遣はすなど、ねんごろな配慮がなされたが、明石の浦の松が枝に風はさびしく吹きがちであつた。その年の秋、彼女は住吉に詣でた、ここで鬩らずも源氏と邂逅するのである。

樂人、舞人を先頭に美しく着飾つた上達部、殿上人を御供に進んでくる行列を見て、『どなたが御參詣になるのですか』と供の者がきくと、『内大臣様(源氏)が御願ほごきに御參詣なされるんですよ、それを知らない人もあるのだなあ。呆れたことだ』といつて、取るにも足りない下人共さへ愉快さうに聲を立てて笑ふ。まことに何としたことか。月もあらうに、日もあらうに、選りに選つて、御參詣の日に來合せたものだ。なまじこの御立派な御様子を遙かに拜見すると、却つて今更ながら自分の身分が口惜しく思はれてならない。さすがに姫君といふもので結ばれて、もうお離れ申すことは出来なくなつてゐる自分の運命だと思ひ慰めながらも、又このやうに自分よりも遙かにつまらない身分の下人輩さへ、何の心苦勞もないやうに、源氏の君にお仕へするのを暗の名譽と思うてゐるのに、前の世にどんな悪いことをした報いだといふのであらう。いつも一筋にあの方の御安否をお案じ申し上げてゐるのに、こんな盛んな御參詣の評判も知らないで出て來たらう。こんなに思ひつめてゐる氣持が通じれば、今日のお出ましのことも分りさうなものだに、くやしいことだ、と思ひつつげると、ほんとうに悲しく、人知れず袖を濡らすのであつた。

この世で自分の一番大切な人、そしてこの世で我がただ一人の人と思ふ人、しかも我が子の父なる人、その人の晴がましい出でまじに遇ひながら、その人とも知らず、それがわが夢寐にも忘れぬ大切な人その人だと、見も知らぬ下賤の奴に致へられ笑はれるとは、わが身をわれと口惜しく唇をかみしめるのである。彼女にとつては誰のものでもない、彼女の、そして彼女の愛兒のものである、その源氏の君は、まるでよその人のものなのである。

こんな所に來合せて、どうも間が悪いので、この盛儀の中に自分の如き卑しい者がはいつて、少しばかりの獻げ物をした所で、神も物の数にも入れて下さるまい。がこのまま明石に歸るのも中途半端で氣もすまない（歸らむも中空なり）と、くやしさと物足りなさの中に難波に舟を返すのである。これを知つた源氏はさすがにあはれと思ひ、

みをつくし戀ふるしるしにここまでもめぐり逢ひける縁は深しな

の歌をおくと、駒を並べたきらびやかな行列を遠くに拜して、胸がいつばいであるところへ、この露ばかりの消息に勿體なくもうれしく泣いてしまふのである。御返し、

數ならで難波のことも甲斐無きになどみをつくし思ひ初めけむ（數ナラヌ身デ、何ノカヒモナクツマラ
ナイ身デアルノニ、何故身モ世モナク、アナタヲ思ヒソメタコトデアラウ）

身分の差から來る自己卑下の心から、源氏を避けようとする彼女は、露ばかりの情の言葉にも嬉しくて涙ぐむ彼女である。ここに明石の上の謙虛の意味が表徴されてゐる。明石の上のつつまじさとやるせなさの蔭

に、斷ち難い源氏への愛着が潜められ、この痛ましい自分自身への詠歎の基礎には、理想を追求する本願とその矛盾の達成を希求してやまぬ自己主張が潜在してゐる。

住吉の邂逅の後、直ちに源氏から近々に京へお迎へしませうと便りがある。が明石の上は

いと頼もしげに數まへ宜ふめれど（マコトニ頼モシク、自分ノヤウナモノヲ、人數ニ入レテ親切ニ言ツテ下サルヤウニ思ハレルケレドモ、サアドウデアラウカ）、いさや又島漕ぎ離れ中空に心細きことやあらむと思ひ煩ふ。（コノ明石ノ浦ヲ漕ギハナレテ都ヘ行ツテ、シツカリト源氏ノ愛情ヲ受ケルコトモデキズ、ソコニ落着クコトモデキズシテ、又思ヒキツテココヘ歸ツテクルトイフコトモデキズ、中途半端ナ頼リナイ境地ニ身ヲオイテ、心細イ目ニアフノデハナカラウカト惱ムノデアル。）
漂標卷

源氏の表面の言葉だけでは、まだ安心できないのである。中空——中途半端な状態、しつかりした愛情を確保することもできず、さうかといつて、それにあきたらずして振り切つてしまふこともできない、はかない據り所のない心情の状態——になつて心細い思ひをするくらゐなら、初めから漕ぎ出でないのが明石の上の、この世の生き方なのである。かくて、何かにつけて遠慮され控へ目になつて上京の決心がつかぬますといふ旨をお返事する。ここに第二の拒絶がある。

源氏から明石には絶えず消息があり、もうどうあつても上京なさるやうに言つてくるが、彼女はためらふのである。源氏の女性に對する扱ひ方は、高貴の出の人々でさへも、深く愛するでもなく、さうかといつてそれならむしろ離れてしまへばよいのに、全然絶縁してしまひもしない中途半端な無情な態度で、心勞がた

えないと聞くのに、まして自分のやうに身分の低いものは、どれほどの御寵愛を受けてゐるからといつて、人々の中に差出て行かうか、結局姫君に恥をかかせるために、自分の卑しい身の素性をあらはしに行くやうなものである。『たまさかに這ひ渡り給ふ序を待つ事にて、人笑へにはしたなき事、如何にあらむと』——たまさかの源氏のお出でを待つ位のたよりのない状態で、人の笑ひものになり見苦しい事がどんなであらうか、と思ひ亂れる。

身分の低い自分の身の程を思ひ知りながら、自分よりも貴い身分の人々の受けてゐる源氏の愛情すら、彼女は甘受出来ないのである。『たまさかに這ひ渡り給ふ序を待つ事』は彼女の愛情が承知しない。『人笑へにはしたなきこと』を何で彼女の教養と矜持が許さうか。が又しても口惜しく思ひ返されるのは、古受領の家に生れた宿命の悲しさである。しかも歎きと惱みは、ここに盡きないで屈折するのである。それは他ならぬ我が兒の將來である。遂に源氏の意に最後まで背くことはできず、京からお迎への人があるに及んで『遁れ難くて今は』と漸くここに源氏の言葉を受けいれるのである。時に源氏は三十歳、明石の上は二十二歳であつた。

四

第三期 姫君を二條院の紫の上に渡すまで

明石の上は父を櫓磨に残して、母と共に姫君を抱いてひそやかに上京し、大坂の寓居に落着くのである。姫君の美しさを見た源氏は、早く手許に引き取りたいと望む。

ある夜のことである。源氏が『こちら——大塚は大變毒部で、なかなか来られないのですから、やはり私が前から願つてゐる二條院の東院にお移りなさい』と言ふのに、『未だ都の生活にも慣れませんので、もう少ししてからにませう』と申し上げる。歸らうとして、月の明るいのを眺めては、かの明石に流謫中初めて相見た夜を思ひ出でて、源氏は感慨にふける。その折を過ぎず、琴の御琴（おんこ）の調べも、未だその時から變つてゐないのをそのまま弾き出だす明石の上であつた。心ばせ、容貌、けはひのますます勝れてくる明石の上を思ひすて難く、また愛らしい姫君への愛着の情も深まるのであつた。姫君の將來のため、正妻紫の上の子として育てたいのであるが、明石の上がどう思ふであらうかと氣の毒で、それを言ひ出すことも遠慮される。かくして姫君を中に、明石の上の煩悶が始まり、源氏のそれに對する思ひやりと交錯し、母尼君を加へての複雑な感情の流動が展開される。またしても明石の上の苦惱の根源は、己が身分の低さであり、姫君への愛情執着と、その姫君の出世を望む、己が理想實現の願望との間に、悲しき現實のわが身を横たへて悶え歎くのである。この惱める明石の上に對する源氏の思ひやりは又格別であつた。源氏に於いて、このやうな思ひやりのアクチヴな表出は紫の上に對する以外には見出だし難いほど、廣く深い愛情であつた。

つひに姫君が紫の上の子として二條院に引き取られることを明石の上も承引するにいたる。これは源氏に對する第三の讓歩であつた。が、そこに到達するまでには又さまざまの思ひ亂れがあつた。

姫君を手放して後、姫君を案ずる不安な氣持、自分自身姫君を失つた後の寂寥、源氏の愛情の物足りなさを、今までは姫君への愛撫によつて慰められてきたが、この後何を慰めに夜を明かし日を暮さうか。そして

又姫君を源氏に渡しては、今までは姫君にひかれて訪れてくれたのを、これからはもう、さうしたよすがもなく、たまさかの訪れもなくなるであらう、など思ひ亂れては我が身のはかなさを歎く。

姫君の未來の幸の代りに、この三重の惱みを獲なければならぬのである。そして母尼君の意見も、分別ある人の判断も、吉凶の占ひも、すべてが彼女の切なる心情を無視して、姫君を紫の上に託することが、姫の幸福だといふことに一致する。かくて明石の上の、わが子・源氏・わが身の三者に對する愛着を諦めの中に没して、愛するわが子を手放す決心をする。それは正妻紫の上の子として引き取られるといふ條件に於いてである。ここにも彼女の聰明さがあり、この一事にこそ、すべてを忍んだのである。

いよいよ、その日姫君を迎へに源氏が来る。

例は待ち聞ゆるに（イツモハオ出デヲオ待チ申シテタルノニ）、さならむと（今日ハ姫君ヲオ迎ヘノタメダラウト）思ふことにより、胸打潰れて、人遣りならず覺ゆ（他人ノ故デハナイ、自業自得ダト思ハレル）。我が心にこそあらめ（姫君ヲヤルモヤラヌモ自分ノ心次第アラウ）、否び聞えむを強ひてやは。（斷ルノヲ無理ニオ連レニハナルマイ）。味氣な、など覺ゆれど、輕々しきやうなりと、せめて思ひ返す。（姫ヲヤルノハツマラナイナア、ナド思フケレド今更ソレヲ言ヒ出スノモ輕卒ナヤウダト強ヒテ思ヒ返ス）。

薄雲卷

諦めて諦め切れない心。斷たんとして斷ち切れない愛着である。洗石に源氏も明石の上の心の中のいとほしさに、強ひても言はれないので、明石の上の動搖と煩悶は、それだけ振幅が廣くなる。堪へ難い苦惱の中

にも、彼女は彼女らしく理性的に生きてゆく。しかも姫君を失つてからの彼女の後悔は、姫君への戀しさとともに盡きない。

五

第四期 六條院に移るまで

この時期にも、源氏は明石の上を大切に、通り一遍には取扱はない。そして彼女のところで食事などなざる折もある。これに對する明石の上の禮儀と教養とに裏づけられた姿勢も、まことに彼女らしさに満ちたものである。

女もかかる御心の程を見知り聞えて、過ぎたりと思すばかりのことはし出でず、又いたく卑下せずなどして、御心掟にもて違ふことなく、いと目易くぞありける。(女——明石ノ上モ、コノヤウナ源氏ノ自分ヘノ厚イ心持ノホドヲ存ジ上ゲテキテ、源氏ガ、出過ぎテキルト思フヤウナコトハ少シモシデカサズ、又サウ甚クヘリ下ルトイフコトモナク源氏ノ君ノ心持ニタガフコトノナイヤウニシ、マコトニ傍ノ見ル目モ氣持ガヨイ。) 薄雲卷

自分の身に過ぎたことはせず、さりとて甚く卑下するのではない、その中間に身をおく。彼女の身に順應した態度であり、心構へである。これこそ、この物語の生れた時代の美意識の規準たるつきつきしである。

この中庸と調和と適應との境地にこそ、源氏の御心掟の規準があり、目易さの標識がある。並々でない身分高い女の方のもですら、源氏はこれほどに打ち解けられることはなく、氣高い態度を弱さ

れないときいてゐるので、お側近い東院——二條院の——に移つては、なまじ見馴れられて却つて人に輕蔑されることもあらう。たまさかながらも、ここに居れば、かうして源氏がわざわざおいで下さるのが、何だか心強く、身に面目あるやうな氣持がする。これが明石の上の思ひである。

かうした選擇性が明石の上の人生を生きてゆく原理である。たまさかでも自分のために、何の序でもなく純粹に、全的に彼女のために、かうして逢ひにきて下さる方を選ぶのである。ここに彼女の明石の浦以來の源氏に對する愛情の處理の仕方がある。彼女は謙虛であり、つましく己れの欲求をすててゐるが如くであるが、實は彼女の本心に於いては——それは意識の上にはあらはれることもあれば、意識下に潜んだままの場合もある——遙かに大きな欲求が存在してゐるのである。それは源氏の大きいなる愛情への欲求である。

六

第五期 六條院に於ける生活

六條院に於ける明石の上の生活は、姫君と離れて住むわびしさはあつたが、姫君の成長、春宮妃として入内、若宮を出産するといふ、自ら遂げ得なかつた本願を、愛兒によつて實現する喜びの中に、幸福で平和な明暮であつた。女三の宮の出現以來、ともすれば忍びよるつめたい影を打ち消すことのできなかつた紫の上よりも幸福であつたとさへいへよう。四季折々の、歌につけ香につけ、すぐれた心ばせをあらはして、身分高き人々に少しも遅れをとらない彼女であつた。源氏の愛情は「なほ覺えことなりかしと、方々に心おきて思す」ヤハリ明石ノ上へノ御寵愛ハ格別ダナアト他ノ女方ハ心外ニ思ハレルほどである。

彼女の日常生活のつましさを、もてなしの洗煉性について見よう。初音の巻、源氏三十六歳、明石の上二七歳の正月、源氏は女方を訪ねて明石の上方に來ると、渡殿の戸を開けるや、御簾のうちからなまめかしい風が匂うとき、他の女方の所より殊に氣品が高く感じられる。そこらにある調度も、唐の東京錦の立派な縁のついた褥しじら、その上に載せた琴、凝つた火桶、それに燻ゆらした侍従の香、これに協奏するかのやうな衣ぎ被香ひざうのかをり、そこらに何氣なくおいてある手習の筆跡の個性のある素直さ、私たちはこの中から明石上の文化性を見出だす。この靜かなゆかしい場面につつましく出てくる明石の上は、源氏の目にいかに映じたか。

さすがに自らのもてなしは畏まりおきて、目易き用意なるを、なほ人よりはことなりと思す。

つましく謙讓であり、一つの調和的雰圍氣を保つてゐる。紫の上の童心の柔かさから見れば、やや縁の固さはあつたにしても、なまめかしさも、なつかしさも缺如してはゐない、振幅のひろい心情の持主であつた。

姫君の参内の夜は、姫君の乗る燈車——それには姫の表向の母である紫の上が同乗してゐる——のあとから歩いてついて行くのも不禮裁であらう。自分の不禮裁なきまじり悪さはさておき、それが嗜れの入内の姫君の班にならうと、生みの母である自分が姫と共に参りたい心はいつばいであるけれども、それを抑へて自分は参らないこととする。ここにも身の程の歎きがある。かくてその三日後退出する紫、上の代りとして参内

する。參つては、その教養の光は姫君をも輝かし、初めて對面する紫の上との間も打ち解け、親和してゆく。

御中らひあらまほしく打ち解け行くに、さりとて差過ぎ物馴れず、侮らはしかるべきもてなし、はたつゆなく、怪しうあらまほしき人の御有様心ばへなり。(紫ノ上トノ御中ガ、理想的ニ打解ケテユクガ、サウカトイツテ明石ノ上ハ紫ノ上ガ打解ケタトテ、ヨイ氣ニナツテ出過ギ馴レ馴レシクハシナイ。輕蔑サレルヤウナ態度ハ少シモナク、コンナ立派ナ人モアラウカト思ハレルヤウナ態度、心構ヘデアル。)

藤裏葉卷

これは源氏三十九歳、明石の上三十歳の春のことであつた。かくて紫の上の驚歎と源氏の満足とをかちえるのであるが、まことに謙虛に統一された彼女の教養であり、情操であり、生活態度である。

二年たつて姫君(明石中宮)は若宮を産み奉る。その御産に際して、明石の上は母尼君のつつしみを忘れた振舞に心を痛め、又若君を紫の上が絶えず抱きとると、『まことの祖母君』たる明石の上はただ任せてしまつて、自分は御湯殿の技などに仕へ奉るのみである。

御方の御心掟の、らうらうしく氣高く、おほどかなるものの、然るべき方には卑下して、憎らかにうけばらぬなどを、ほめぬ人なし。(明石ノ上ノ心構ヘハ、伶俐デ上品デ大様デハアルガ、卑下スベキ場合ニハ卑下シテ、憎ラシク差出ナイ様子ヲホメヌ人ハナイ。) 若菜上卷

ありあまる才幹・教養・情操。矜持・氣品を必ず謙虛につつむのである。ここに『怪しうあらまほしき』、

こんな理想的な人間があらうかと思はれるやうな、人柄があらはれてくる。山にこもつてゐる父入道の文を姫君に見せても『かく睦まじかるべき御前にも、常に打解けぬ様し給ひて、わりなく物づつみし給へる様』——このやうに打ち解けても然るべき實の娘の前でも、常に畏まつて、むやみに遠慮がちな様子、である。己が娘に對してすら、自分の身分を忘れきれない彼女であつた。

紫の上が若宮を獨占して愛するので、源氏がにくまれ口をたたくと、かうたしなめる明石の上である。

『まあ、いやな思ひやりのない言葉ですこと、あの方は姫君の正式の母君ですから、女の御子であつても、あちらへお連れ申すのがよいでせう。まして男の御子、高貴の身分と申しても、あの方のお手にかかるのが安心とお思ひしますものを、戯談にも（戯れにても）そんな隔てがましい事を、餘計な氣をきかせておつしやつて下さいませぬ』と。戯れにも、うれしきにも、彼女は謙虚な心を忘れなかつた。しかも姫君に諄々として紫の上の恩愛を説く條、そのひろい人間愛の言葉は、一言一句謙虚の情に裏づけられてゐる。このやうな彼女に對する源氏の言葉は、

『紫の上は、あなたのために、特に好意をもつてするのではない。ただ姫君をつききりでお世話もできない不安さから、そのお世話をあなたに譲られるのでせう。それを又あなたが、取り切つて母親顔に、目にあまることなどしない御振舞のために、萬事穩かに見よいので、私も安心でうれしい。一寸した事でも物が分らず、ひねくれた者は人中に交るにつけて、當人自身は勿論、相手のためにまで、心外千萬なことがあるもの

です。あなたも紫の上もそんな缺點がなくいらつしやるので、私も安心です」と。

十餘年の長い忍苦も、この言葉によつて、一度に慰められる心地がしたであらう。「さりや、よくこそ卑下したれ」と思ひつづけるのである。紫の上にも劣らないであらう情操と矜持とを抱きながら、忍び忍びて涙に濡れて生きてきた歲月であつた。作者はこの女性に最後の勝利を與へたのである。「すべて今は恨めしき節もなし」と彼女自ら、姫君に述懐するのである。

七

身は一國守の娘でありながら、男性の理想とされる光る源氏の愛を受け、その間に生れた娘は帝の妃となり、春宮を生み奉るといふ果報を得た明石の上は、絶えず身分の低きに悩みながら、つつましく身を持しながらも、自分を愛し、人間としての自己主張はすてなかつた。かくてその努力は、彼女をして達し得る最高の状態にまで達せしめたのである。

朱雀院五十の御賀のための音楽の練習が、六條院で行はれる場面は、若菜下巻にあらはれて、絢爛多彩、源氏一門の榮えの絶頂をいろどるのであるが、この梅薫る月の夜の遊びの情景の中に、明石の上はいかに描かれてゐるであらうか。

(紫ノ上ハ)花と言はば櫻に譬へても、なほ物より勝れたる氣はひ殊に物し給ふ。かかる御邊に(コンナ立派ナ女三ノ宮ヤ紫ノ上ノ側デ)明石はけおさるべきを、いとさしもあらず(明石ノ上ハ壓倒サレル管デアルノニ、實際ハ少シモソソナコトハナイ)。もてなしたと氣色ほみ恥かしく、心の底ゆかしき様し

て(態度振舞ナド様子ブツテ、コチラガ恥カシイ氣ガスル位デ、心ノ底ガ知リタイト思フホドオクユカシクテ)、そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。柳の細物の細長、蒨黄にやあらむ、小柱着て、うすものの裳のはかなげなる引きかけて、殊更卑下したれど、(着テキルカキナイカ分ラナイヤウナウスモノノ裳ヲヒツカケテ、ワザト卑下シテキルガ)、氣はひ思ひなしも心にくく、侮らはしからず(輕蔑ノ念ヲ起サセナイ)。高麗の青地の錦の、端さしたる裾に、眞ほにも居で(シトネノ上ニ眞トモニモ坐ラズヘリ下リ)、琵琶を打ち置きて、たをやかに使ひなしたる撥のもてなし、音を聞くよりも、又あり難く懐かしくて(琵琶ヲホンノ形バカリ彈キカケテ、シナヤカニ使ヒコナス撥ノ扱ヒヤウ、チャント彈奏スルノヲ聞クヨリモ一層ユカシク親シミガアツテ)、五月待つ花橘の花も實も具して押折れる香覺ゆ(橘ヲ花モ實モ兼ネ具ヘタママ折取ツタ香ノ感ジガスル)。

まことに時代の最高の女性藝の上に比肩さるべき卓越せる女性で、明石の上はあつた。

一六 紫の上

それは源氏が未だ十八歳の若き日のことであつた。夕顔を失つたあくる年の春、おこりをわづらつた源氏は加持を受けるため、北山の聖を訪ひ、はからずもある庵室に美しい少女を發見するのである。十歳ばかりの人並すぐれて美しく氣品のある女の子が、髪は扇をひろげたやうにゆらゆらとして、顔を眞赤にすり腫ら

したまま立つてゐる。

『どうしたのです、こどもと喧嘩でもしたんですか』と尼君が言ふのに、『雀の子を大君（イヌキ、召使の童女の名）が逃したんです。ふせごの中へちゃんと入れといたのに』と、まことに残念さうである。

尼君が、いつまでも子供供してゐるのをたしなめ『なくなられたお母様は、十二でお父さんに、つまりあなたのおぢいさんに亡くなられたのですが、もうちゃんと何でもわきまへておいででしたよ。今わたしが亡くなつたら、どうして暮してゆくおつもりですか』と悲しげに泣くのを、さすがに幼な心地にも、じつとみつめてゐるが、伏目になつてうつぶしてしまふ。きかぬ氣の利發さの中に、純眞で敏感な童心がうかがはれる。

父は藤壺の兄、兵部卿の宮（ヒョーブキョーノミヤ）、母は故按察大納言（アゼチダイナゴン）の女で、由緒正しい生れであり、藤壺のゆかりのものとして源氏は心をひかれ、尼君の死後は手許に引取つて養育することとなる。

末摘花に幻滅を感じて自邸に歸つた源氏は、紫の上（ムラサキノツエ）を相手に赤鼻の女の姿繪をかいて遊んだりする。この頃源氏は、藤壺との否定的な戀愛に煩悶してゐたので、その譬々の情を未だあどけない紫の上との、子供らしい遊びによつてまぎらすのである。まだ十歳を出たばかりとはいへ、感情の動き、心理の交流など、源氏にとつて張合のある存在であり、箏（こ）の琴（こ）なども手つき美しく弾くのである。源氏が外出がちで、外から歸つてきても又出て行きさうにすると、寂しさうにすねて見せては、たうとう源氏の外出を

思ひ止まらせたりするのである。源氏が心から明るい戯談の言へるのはやはり紫の上だけであつた。彼女は最も明るく弾力性のある童心の持主であつた。源氏の正妻葵の上の死後、遂に源氏と夫婦の間柄に入るのである。時に紫の上は十四歳、源氏は二十二歳であつた。

かくて若草の頃から、源氏の君に撫育せられ、花を闘いては櫻花の如く、光る源氏の正妻として、都の春をわが世の春と爛漫と咲き誇つた紫の上こそ、まさしく源氏物語のヒロインであり、その名の色の紫の象徴であり、時代理想の女性的具現であつた。

圓滿具足、缺げることのない知性と感性の持主であつて、天真明朗、春を愛する彼女の生涯は、とこしへの春であるはずであつた。最も幸福なるべき地位におかれた彼女も、つひに幸福な女性として終ることはできなかつた。彼女の苦難は源氏の多情のために數多くあつたが、最大なもののは次の三つである。第一は源氏の須磨の謫居であり、第二は明石の上の存在であり、第三は女三の宮（ニヨサンノミヤ）の出現であつた。この第一の遠離の悲しみは二年有半で解け、第二の明石の上の存在も、二者の照明智と謙虛禮讓により、先づ明石の姫君によつて結ばれ、姫君の入内を機として完全な和解に達した。しかしながら最後の女三の宮の出現は救ひ難い破局を招いた。それは紫の上のカタストロフイであつたとともに、源氏の破滅を來し、源氏物語の悲劇となつた。

明石の上は、源氏を須磨に送つて孤獨寂寥の惱みの中にある時代に、源氏の身近に出現した女性でゐることが、深く紫の上の心を痛めた。その上姫君の生れたこと、明石の上の知的な性格に源氏の心がつねに惹かれたこと、によつて極めて強力な對敵としての存在であつた。

この時期の紫の上は年齡からいつても、十九歳から二十三歳までの頃であり、その嫉妬の感情は熾烈であつた。先づ源氏と明石の上との間を知り、次いで姫君の生まれたことを知らされ、最後に明石の上を大堰に住まはせることを聞かされる、その段階の高められることに惱むのである。この時期にあらはれた若い紫の上の嫉妬の情及びそのあらはれ方は、激しさと同時に、最も花やかな明るさをもつてゐた。

源氏が明石から歸京してから、明石の上に姫君の生れたことを紫の上に打明ける場面、

われはわれと打ち背きながめて（紫ノ上ハ源氏ノ言葉ニ對シテ、私ハ私ト、横ラムイテジツトアラヌ方ヲナガメテ）、『あはれなりし世の有様かな（情ナイ夫婦ノ間ダツタナア）。』
と獨言のやうに打歎き、明石の上の上手だといふ筈を、

かの勝れたりけむも妬きにや（明石ノ上ガ筈ノ名手ダトキクノモネタマシイノカ、源氏が彈クノヲスルメテモ）、手も觸れ給はず。 澤標卷

ところが、その怨じ方が、童心そのもので源氏の愛情をますますそるのである。

（紫ノ上ノ）いとおほどかに、美しうたをやぎ給へるものから、さすがに執念き所附きて、物怨じし給へるが、なかなか愛敬つきて腹立ちなし給ふを（源氏ハ）をかしう見所ありと思す。 右同所

といふ有様である。そして彼女は決して『怨じ果てる』といふことをしないのである。葵の上始め誰もが遂に及ばぬ所は、ここである。紫の上は嫉妬の天才である。その嫉妬の感情の表現が強過ぎもせず、さりとして弱過ぎもしないのである。『程』を得てゐるのである。そして必ず『わざとならずほのめかす』のである。決して露骨な直接的表現をとらないのである——蠱黒大將の北の方が、大將が玉鬘のところへ行かうとするのを見て、嫉妬の情に驅られて、發作的に火取を大將に投げつけるといふやうな。この紫の上の天才的な嫉妬が天眞爛漫たる表現をもつて現れたのが、この時期の明石の上に對する時のものである。

これが極の齋院（アサガオノサイイン）から、さらに女三の宮にいたると、その色彩が全くかはつてゆくのである。この時代は、源氏に能動的積極的な愛撫の情を呼び起させたものであつたが、若菜の巻以後になると、同じ愛着の情であつても、受動的消極的な『いとほしさ』が加はるのである。嫉妬といふ面に於いてさへ、紫の上は明石の上といふ對象の上に、最も美しい自分を花咲かせたのである。

かくして明石の上に對する嫉妬は、わが子として愛育することになつた姫君への愛情によつて消されてゆく。薄雲の巻、姫君を二條院に引取つてから始めて源氏が、大堰の明石の上を訪ねる條、源氏の美しい出で立ち姿を見て、さすがに穩かならぬ氣持で見送りながらも、

ざればき給ふ人（姫君）を上（紫ノ上）はうつくしと見給へば、遠方人（ちかたのひと）の目ざましさも（遠クニキル人

——明石ノ上ニ對スル不快サモ）こよなく思しゆるされにたり。（明石ノ上ハ姫君ノコトヲ）如何に思ひおこすらむと、我にてはいみじう戀しかりぬべき様をと（自分ガツノ身ニナツタラ、ズキ分ワガ子ガ戀

シイコトダラウト、打ちまもりつつ、(姫君ヲ)懷に入れて、美しげなる御乳をくくめ給ひつつ戯れ居給へる御様見所多かり。

ここには姫君に對する愛情と、今までは對敵と目してゐた女性への、子を失つた悲しみへの思ひ遣りさへあるのである。しみじみとした人間愛をたたへた胸に幼兒を抱いて、『いと美しげなる御乳をくくめ』つつ戯れる圖は、まさに天衣無縫の真心美圖繪である。後年この姫君が入内して若宮を生み奉つた時にも、同じやうな情景が演じ出されるのである。

(明石姫ハ)白き御裝束し給ひて、人の親めきて、若宮をつと抱き居給へる様、いとをかし。(紫ノ上ハ)自らかかること知り給はず、自分デ子ヲモツタ經驗ナク、人の上にも見慣らひ給はねば、(姫君ノ母親ヲシイ様子ヲ)いとめづらかにうつくしと思ひ聞え給へり。(生レタバカリデ)むつかしげにおはする程を(紫ノ上ガ)絶えず抱きとり給へば、まことの祖母君(明石ノ上)は、唯任せ奉りて、御湯殿の扱ひなどを任う奉り給ふ。若菜上卷

前の場面より十年を経て、なほこの真心である。この兩圖共に微笑ましいユーモラスな情景のなかに一脈のベテッスを泄へた場面である。美しい人と人との間に醸し出される春霞のやうな雰圍氣である。かくて明石の上に對する嫉妬は、姫君への愛情と交代していつた。

この二人は姫君の入内を機として始めて相會し、美しい友愛を示し合ふことは、明石の上の項で述べた通りである。一人の男性を中にして、最も悪い條件の下で相對しなければならなかつた二人の女性は、この物

語に於いて最も美しい友愛を築き上げていつた。

三

種の齋院の場合には、彼女の嫉妬の表情はやや色彩を異にしてくる。種の卷は源氏三十二歳秋の種の君に對する源氏の執心を主題とした卷である。紫の上も種の君のことは噂にはききながらも、事實ならまさか源氏が打ち明けないことはあるまいと樂觀してゐるが、源氏の態度の落着かないのを見て、心安らかでない。殊に種の君は身分も高く家柄もすぐれてゐる。紫の上にとつて今更他の女に壓倒されるのは口惜しい限りである。

様々に思ひ亂れ給ふに、宜しき事こそ、(一通リノコトナラ) 打ち怨じなど、(嫉妬シテミセテ) 憎からず聞え給へ、まめやかに辛しと思せば、(種ノコトハ心カラツライト思ツテキルノデ) 色にも出し給はず。もはや明石の上の場合のやうに、怨じが源氏との間の愛情の推進力とはならないのである。種のことをちらりとでも聞かせてくれれば、その源氏の誠實に慰めを見出だしてでも、少しは氣も樂になるのだが。

かかりける事もありける世を、(コンナ辛イコト) 自分ヲ裏切ラレルコトモアル習ノ世ノ中ヲ) うゝなくて過しけるよと、(ソシナコトトモ知ラズ、ノソキニ生キテキタコトヨト) 思ひつづけて臥し給へり。

童心の紫の上にも慰えは訪れて、物思ふ夜がつづくのである。しかしこの煩悶も長くはつづかなかつた。桃園の宮に種を訪問したが、種の君の斷乎たる拒絶にあつて歸つた源氏は、さすがに紫の上をいとほしく思つて、日一日慰めるのであつた。かくて雪の日に女方の批評をして紫の上に聞かせる場面にいたつて、長い

間の氷も解けるのであるが、この種の場合に於ける嫉妬は、源氏の愛情をそそる媒材となるプラスの意味をもち得ず、紫の上の相貌は、明石の上の場合に於けるやうな精彩を全く失つてゐた。

この種の君から、更に秋好・玉鬘を對象とする危機も漸く切り抜けて、六條院の春はたけなはに、繪合えあひあはせ・行幸・梅が枝と巻を重ねて絢爛たる平和の繪巻物が繰りひろげられ、明石の姫君の入内を最高潮として、紫むらさきの上の生活は世にも多幸な明暮であつた。

四

この虧くることなき望月の花の春に、突如たる女三の宮の登場こそは、まことに青天の霹靂であり、夜半の嵐であつた。紫の上の嫉妬の感情も、根柢からその相貌を一變したのである。女三の宮の御爲を思された朱雀院の御計ひも、紫の上は申すに及ばず、源氏の君、更に女三の宮御自身にも、そして柏木にとつても、救ふべからざる不幸となつた。薰大將の憂悶の生涯もまたここに胚胎する。まさにこの御計ひは觸れるものすべてを傷つける刃となり、悲劇の旋風をまきおこすにいたつたことは、悲しくも痛ましい宿命であつた。

女三の宮を源氏に下されようとする院の思召しを、結局源氏はお受けするのであるが、院と紫の上との間に挟まれてデレンマに陥つた源氏自身の内部に矛盾があつた。そこに悲劇の根源があつた。ときに源氏三十九歳、紫の上三十一歳の年も暮れようとする頃であつた。かくして二つの對立の中間に悩まねばならない源氏の晩年が始まるのである。

白雪霏々と降る朝、源氏は院の御依頼をいかに斷りきれなかつたか、自分の心は決してかはらないことを

紫の上に諄々と説き『誰も誰ものどかに遣してむ』と望む。この一句は、源氏の本心をよくあらはしてゐる。矛盾は解決してゐないことは、彼自身にも分つてゐるのである。やむをえない事情であるから、みな穩かに暮してくれといふのである。ここには論理はない。ただ諦めがあるだけである。矛盾は依然として殘存し、しかも表面は諦めで彌縫されるのである。この源氏の言葉に對する紫の上の態度は如何であつたか。

源氏のこれまでの一寸した浮氣さへ、けしからぬことに思つて嫉妬する御氣性故、紫の上が女三の宮のこゝとをどう思ふだらうかと、源氏は氣をもんでゐるのに、彼女はいつかう平氣な様子で、朱雀院から源氏に女三の宮を託されたのは、『哀れなる御譲りにこそはあなれ』、私の方で何の心へだてをしませう。先方から私を咎められないなら、私は心安らかでをりませうものを、と卑下するのである。

この紫の上の態度は源氏にとつて意外であつた。紫の上の『あまりかう打ち解け給ふ御許しも、如何なればと後めたく』思ふのである。源氏は言葉をつくして、自分を信頼させようとする。

紫の上も心の中で思ふ。このやうに天から降つて湧いたやうなこと——朱雀院の御委託をさす——で、源氏自身にも遁れやうのなかつたことを、自分もにくらしく嫉妬すまい。自分の氣持に遠慮し、また自分の諒める言葉にも隨はれるやうな、世の常の當人同志の心から起つた戀でもない。堰止めやうのない不可抗力なことと諦める。一度は諦めるものの女心の愚かさに物思ひはつきない。その様を世の人に知られまいと心をつかふのである。鷹揚潤達な紫の上にも、人知れぬ惱みが生れた。

今はさりとともとのみ、我が身を思ひ上り、うらなくて過しける世の（モウ自分ノ源氏ノ妻トシテノ位置

ハ大丈夫ダト思ヒ上ツテ、ノソキナ日ヲ送ツテキタコトガ、人笑へならむ事を、下には思ひ續け給へど
(人ノ物笑ヒニナラウカト内心思ヒツツケテキルガ)、いとおいらかにのみもてなし給へり(表面ハ至極
鷹揚ニフルマツテヲラレル)。若菜上卷

内面的動搖と苦惱を抑へて、表面には調和的様相を崩すまいとする。この苦惱を彼女は全身をもつて苦し
み悩むのである。年が明け源氏と女三の宮との婚儀が盛大に行はれる。女三の宮の興入の際の紫の上は、事
に觸れてただならず思ひながらも、興入について源氏と心を合せて運ぶのである。

三日の間は毎夜女三の宮のもとに源氏が行かれるのを、紫の上は長の年月そんな源氏を外泊をつづける
ことに憤れてゐないので、内心の苦しみをこらへてゐるが、やはり悲しさうに見える。源氏の御衣などもふ
だんよりも一層、香を薫きしめてをられるもの、物思ひに沈みながらじつとあらぬ方を見やつてゐる。こ
の憂悶こそ天眞明朝玉の如く、知性に於いても、情感に於いても、源氏物語最高の存在たる紫の上に於いて
の、最も深刻な悲劇となる。

女三の宮の所へ行くのを、『今宵ばかりはことわりと許し給ひてむな』と苦しげに言ふ源氏に、紫の上は少
し微笑んで、

『自らの御心ながらだに、え定め給ふまじかなるを、ましてことわりも何も何處にとまらるべきにか。ア
ナタ御自身ノオ心モ、ヨウオ定メニナラナイヤウナノニ、マシテ道理モ何モトコニ落着クベキデアルカ、
更ニ分リマセン。』

と、言ふかひもなさうに應對される。ここには諷刺の力ない微笑がある。人間の精神はここでははもはや無力である。とすれば道理も何も、何の價値があらう。まことに言ふかひなきことである。論理もない、道理もない。ただ平和と安穩だけが自分に望まれてゐる。とすれば、さびしく笑つて諦めるよりほかないではないか。

目に近く移れば變る世の中を行く末遠く頼みけるかな

源氏とともに世に生きること二十年、彼女にとつて源氏は全世界であり、すべてであつた。この世の無常を翻ざる詠歎もさこそとなづかれる。さすがに源氏も心苦しう思つて、女三の宮のところへ直ぐにも渡らないのを、『いと傍痛き業かな』とそそのかして行かせる。立ち去る源氏の美しい後姿を見ては、さすがに平靜でをられない彼女であつた。この外的な行動と内的な本心との間の相剋の中に、自己の無力を感じ、それは無常觀に轉化してゆくのである。

思ひ定むべき世の有様にもあらざりければ、今より後もうしろめたうぞ思しなりぬる。

この世に生きてゆく力を全く失つてしまふのである。

侍女たちが女三の宮方の非難をするのを、『つゆも見知らぬ様に、いと氣はひをかしく物語などしつづ』源氏の居ぬ夜を更けるまで起きてゐては、侍女どもをたしなめる。あまりながく起きてゐるのも、ふだんにはないことで、人も變に思ふであらうと寢所に入つても、まことに傍^{たは}さびしくて、深い憂悶は眉の如く胸の中を駆けめぐり、なかなかねつかれないのである。しかもその悶えの上に、その悶えを人に知られること

とを防がねばならなかつた。それはある雪の夜であつた。

ふとも寝入られ繪はぬを、近く侍ふ人々、怪しとや聞かむと、打ちも身しろぎ給はぬも、猶いと苦しげなり。夜深き鳥の聲の聞えたるも物哀れなり。

紫の上を夢に見て驚いて夜も深いうちに、女三の宮のところから歸つた源氏が、夜具は手をかけると、紫の上は涙に濡れた單衣の袖を引きかくして、夜中に歸つた源氏を見て無性にうれいものの、すぐ打ち解けるといふこともしない、その心意などまこと心にくい限である。この聰明な心構へと天眞の純情とはまさ
に紫の上一人のものであらう。——紫の上の死後のある雪の夜、源氏はこの夜のことを追想して夜もすがら、夢にでも又いつの世にか、あのなつかしい紫の上の姿を見ることができようかと、思ひつづけるのであつた。——この夜は源氏の生涯でも最も苦しい夜であつたに違ひない。

これから後は、源氏を女三の宮の方へすすめてやりながら、さびしさに堪へられない明暮がつづく。源氏
のぬぬ夜は、人々に物語など讀ませては、昔物語につけても、夫の浮氣のための女の物思ひをしみじみとおもふのであつた。そして夜更けてやすんだ曉方から御胸を病むのである。かくて女三の宮の出現は、紫の上の死まで招來するのである。

女三の宮の興入後間もなく、源氏は朱雀院御出家後、二條宮に下られた朧月夜に逢ふのであるが、東院の末摘花を見舞ふやうな振りをして出かける源氏の、心を用ゐてめかしこんでゐるのを見て、紫の上の炯眼は

いち早く看破するが、

姫君の御事（女三ノ宮ノコト）の後は、何事もいと過ぎぬる方のやうにはあらず（昔ノヤウニ物怨ジナルコトモナイ）、少し隔つる心添ひて見知らぬやうにておはす。

女三の宮の出現は、かくも紫の上を變貌させた。信ずるものに裏切られ、據り所を失つたわびしい諦めである。もはや源氏の情事も、これに對する紫の上の心理も、二人の愛情の推進力とはならず、かへつて間隙を深くしてゆくのであつた。春を愛した紫の上に春は去つた。身に近く秋のきたのを、わびしくさとの彼女であつた。

五

紫の上は葡萄染であらうか、色の濃い小桂に、薄蘇芳の細長を召され、髪が床にたまるほどゆらゆらとして多く、體の大きさなどもほどよく、體つきも申し分なく、あたり一面に匂ふばかりであつて、花なら櫻にたとへても、なほその櫻よりもすぐれた様子をしてみられる。——これは紫の上三十九歳の春、六條院で

女樂の催された宵、灯影に映える艶姿である。まことに彼女は、春の女性であり、櫻はその象徴であつた。彌生の空に咲き匂ふその櫻花は、盛りの過ぎぬ間にと急ぎ散りゆくのであつた。

あまり年をとつたならば、源氏の御寵愛もつひには衰へるであらう、そんな世の中を見ないうちに、自分から出家したものだ、と絶えず思ひつづけるやうになる。かうした出家の念願も、生意氣な利巧ぶつた女と、源氏に思はれはせぬかと憚られて、はつきりとその意志を源氏に告げることもよろしくない。かうした袂

難な陰影に鼻つけられながら、苦惱の重荷はつひに彼女の肉體を打ちひしくのである。病める身を養ふべく二條院に移るのであるが、美しき姿も次第に弱りゆくのであつた。

明石中宮は育ての親である紫の上の病の輕くないのをきき二條院に里下りする。育ての母を見舞ふ明石の姫君に明石の上を交へて、靜かな御物語りをするのであつた。紫の上は心のうちに思ひめぐらすことが多いけれども、さかしげに死後の處置など言ひ出されもしない。自分のこととしてではなく、ただ一般の世の無常な有様を、おほやうに言葉少なではあるが、淺はかでなく言ひなされる氣はひなど、言葉に出して言はれるよりもずつとあはれで、いかにも心細さうな御様子のはつきり見えるのであつた。これは臨終の近い頃のことであつた。死にいたるまで一糸亂れず、つつましくもゆかしい生き方である。心地のよろしいとき、人のきかぬ間にわが肉親のやうに愛した、明石中宮の御子當年五歳の三の宮——匂宮（ニオーミヤ）を前にすゑられて語るやう、

『麿（紫ノ上自身）が侍らざらむに、思し出でなむや（私ガキナクナリマシタラ、私ノコトヲ思ヒ出シテ下サイマスカ）』と聞え給へば、（匂宮）『いと戀しかりなむ。麿はうちの上（文帝）よりも、宮（母明石中宮）よりも、はは（紫ノ上ヲ指ス。むこそまさりて思ひ聞ゆれ。おはせずば、心地むつかしかりなむ）』とて目おしすりて紛らはし給へる様をかしければ、（紫ノ上ハ）微笑みながら涙は落ちぬ。『大人になり給ひなば、ここに住み給ひて、この對の前なる紅梅と櫻とは、花の折々に心とどめてもてあそび給へ。さるべからむ折は、佛にも奉り給へ。』御泣卷

佛とはもとより死後のわが身を意味するのである。かくさりげなく遺言する彼女は最後まで春の象徴たる櫻花を愛し、天眞な童子を愛した明るく花やかな女性であつた。しかもほほをみとなみだとを一つ現し身にかねもてる女性であつた。

一七 女三の宮

女三の宮（ニヨサンノミヤ）は、源氏の異母兄朱雀院の最も愛された姫宮で、院が出家せられるについても、この姫宮の將來が決定してゐないのが、何よりの氣がかりであつた。女三の宮を望んでゐるのは、螢兵部卿の宮・大納言・柏木右衛門の督（カシワギエモンノカミ）——源氏の妻葵の上の兄である頭の中將の息子）などであつたが、院は遂に源氏にこの姫を託されるのである。時に姫は十三、四歳、源氏は三十九歳であつた。この結婚は源氏もかなり躊躇したのち承引した。

その躊躇の理由は、第一に紫の上に對するいとほしさからであり、敢へて承引したのは朱雀院の熱望が表面的な理由であり、年若く身分高き姫宮への好奇の心が裏面的な理由であつた。朱雀院が後に残す姫宮の將來を案じられるのに對しての、次の源氏の言葉は、いくらか朱雀院の源氏に姫宮を託したい御氣持に對する源氏の側の消從的な氣持、及び姫宮に對する自分の好奇心を充足させたい好色心を合理化しカモフラージュするといふ意味も含まれてゐるが、一般的なこの時代の女性觀・結婚觀をあらはしたものである。

『總じて、女の爲には、眞の後見たるべき人は、やはり當然世話をすべき縁即ち夫婦の縁を結んで、當然の義務として世話をする庇護者、即ち夫のあるのが安心なことである。先々が御心配なら適當な配偶者を選んでおいたがよからう』といふのである。源氏と女三の宮の結合の時代的社會的な基調はここにあつた。しかしこの結合は、源氏と紫の上との關係とか、年齢の差とか、しきりに女三の宮を慕ふ柏木の存在とか、種種の難かしい事情が存在してゐた。ここから源氏物語第二の悲劇が生れてくるのである。

かくて成立したこの二者の結合に於いて、源氏の見出だした人間女三の宮はいかなる存在であつたか。

姫宮は、一向子供らしいといふだけで、何の反應もない、張合のない存在である。同じ小さいといつても紫の上の幼時はきびきびした、氣のきいた才氣があり、小さいなりに反響を示した。しかしこの女三の宮の取り柄といつてはただ、憎らしく我を張るやうなことはあるまいといふ點だけであるが、この無性格的性格の故に、女として致命的な重大過失を引き起さうとは、さすがの源氏も豫想だにしなかつたであらう。

二

柏木との過失の導火線となつた蹴鞠の場面で、柏木が女三の宮の姿を見る場合、猫が御簾の棲から走り出るとき、その綱が引つかかつて御簾の片側があらはに引上げられて、女三の宮の姿が庭から見られるのである。柏木が外からじつと見つめてゐるのに女三の宮は一向氣がつかないで、猫の泣く方を振返るので、柏木はその顔を更によく見あらはすのである。夕霧が氣を飲んで咳拂ひしたので、漸くひつこまれた。

かうした女三の宮の身の處し方には洗煉された知性といふものがなく、又教養ある女性としてのつつまし

さも缺けてゐる。間もなく一夜忍び入つた柏木を拒み得ず、しかもその胤を宿すにいたるのである。この場合とても女はただあさましく悪夢を見てゐる如き心地でわななくのみである。柏木を拒否し得なかつたことについて、女三の宮を責めるのは酷であらうが、柏木にこの無理業をさせるにいたつた心理的経過に於いては、それが無意識的行爲であつたとはいへ、蹴鞠の場面のつつしみのなさについては、女三の宮の責任は免れることはできないであらう。

彼女の思慮のなさは、ある夜小侍従（コジジュー）といふ侍女が取次いだ柏木からの文を自分で褥の間にかくしておいたのを、翌朝源氏に發見されるにいたるのである。そして筆蹟から柏木のものであることを知られるのである。しかも當の女三の宮は、そんなことは露知らないので、自分はまだ眠りからさめないでゐた。

あないはけな、かかる物を散らし給ひて、我ならぬ人（他ノ人）も見つけたらましかばと思すも心劣りして、さればよ、いとむげに心にくき所なき御有様を後めたしとは見るかし。

と、源氏は歎息して、未だめざめない女三の宮を殘して部屋を出るのである。この稚拙さ、身の處し方の無知は、遂に源氏をして、不安と危惧を感じさせるのである。

女三の宮もさすがに己が過ちへの悔いに堪へかねて、薫君を生んだ産後の惱みの際出家する。まもなく柏木も悶え死にの如く死ぬる。その瀕死の床に、夕霧に源氏への執成しを頼むのである。かくてこの悪霊のな

せる宿業は、一應の解決を見せて、運命の子薫の憂暗の生涯の中に延長されてゆくのである。
女三の宮、彼女は性格の弱さと知性の低さから悪靈の導くままに、曠野を彷徨した女性であつた。

一八 大 君

それは光る源氏の歿後、十数年を経たころであつた。世をうち山と人のいふ、その宇治の山里にかくれ住む古宮がおはした。それは源氏の異母第八の宮（ハチノミヤ）の失意の姿であつた。現世に希望を失はれた宮は、母君なき二人の姫君をばぐくみながら、おん自らは出家遁世の志が深かつた。蒼涼たる川邊の里に幾
星霜が流れ、姫君たちは美しく生ひ立たれた。

姉の大君（オレイギミ）は『らうらうじく深く重りか』——大人らしう落着いて、心深く重々しく、『心ばせ静かに、よしある方にて、見る目もてなしも氣高く心こくき様』——性質がしとやかで、趣があり、容姿も物腰も氣品高く、おくゆかしいさまであつた。妹の中の君（ナカノキミ）は『おほどかに、らうたげなる様して、物つつみしたる氣はひに』——おつとりとして、あどけなく、はにかみがちな様子、をして花やかに美しい。

訪ふ人もない宇治の里を訪れる高貴な都人があつた。これぞ女三の宮と拍不との間に生れ、表面は源氏を、

父とする宿命の貴公子、薫君（カオルギミ）であつた。

都を遠くはなれた山里にも、春ともなれば櫻の花は咲き匂ふが、春のつれづれはいとど暮しがたくながめられがちであつた。姉君はもう二十五、中の君は二十二となつて、物思はしげな哀愁は宮邸に立ちこめるのである。花はいつしか若葉にかはり、それもいつか初秋の風にそよぐ頃の、とある日、薫は何度目かの宇治への訪問をするのであつた。八の宮と薫は月明の夜を昔物語に、音楽にと語り明かすのであつた。薫は去る年の秋の夜、一聲きいた琴の音を、しきりにゆかしがるので、父宮自ら姉君の方に行かれ、しきりにすすめると箏の琴をいとほのかに掻きならしてやめられた。宇治の川邊のせせらきも聞えよう初秋の夜深く、月明るき山莊に人々の魂にしみこむやうな琴の音、それもわづかに一調べ、その音のをさまつた後の静寂は、どんなに深かつたのであらうか。宇治十帖の憂愁の雰圍氣はしんしんとして湧き上つてくるのである。これにつづく場面、

入り方の月は限なくさし入りて、透き影なまめかしきに、君達（姫君たち）も奥まりておはす。（薫ハ）

世の常の懸想びてはあらず、心深う物語のどやかに聞えつつ物し給へば、姫君たちモ普通ノ男性ニ對スル警戒心ヲ忘レテ）さるべき御答など聞え給ふ。 椎本卷

かくて秋は深まりゆくのであるが、父君の厭離遁世の心はますます強く、心にかかるは後に残る姫君たちの上であつた。姫君たちは、遠い我が身の將來のことまでは考へ及ばれず、ただ父宮に死に別れては、どうして片時もこの世に生き長らへて行けようかと思ひになる。ここにあるものは、弱さである。弱さの意識

である。はかない脆い自己弱小感である。かくするうち遂に父宮はこの世を去られる。

二

薫君は八の宮との約束に違はず、萬事の世話をする。忌果てて宇治を訪れると、大君は心ならずも對話するが、知らぬ人である薫に、このやうに自分の聲をきかせたり、何となくその人を頼み顔にしてゐることが、過ぎ去つた日を思ひ出すにつけても、何だか心苦しく恥かしいやうに思はれるが、それでもたまに一言くらゐは仄かにお答へなさるのである。弱さの中にも、かうしたたしなみ——矜持と謙讓とに根ざすところの——を決して忘れない彼女であつた。

かくて暗い悲愁の中に、年はあらたまつた。その新しい年、薫は宇治を訪ねる。大君は薫に對面することは憚られたが、面會せねば思ひ遣りがないうやうに薫に思はれるので、仕方なく應對する。打ち解けるといふのではないが、前々よりはすこし言葉をつづけて、ものを言はれる。そのさまには一種の親しみが感じられる。若くして佛の道に心をよせる薫と、乙女の身に世の無常と自己の弱さを歎ずる大君とは、その人生觀に於いて相通するものがあつた。そこにかうした大君の女性らしいやさしさが現れてきたのであらう。さうした様を見ると、薫の大君に對する愛慕の情は、今まで抑壓されてゐたればこそ、それだけ強く高潮してくるのであつた。薫の言葉が愛情の告白の意味をもつてくるのに氣づいた彼女は、思ひがけなくいやらしい感じ、それには返事もしない。特に際立つて近より難く取りすましたやうには見えないが、今時の若い人たちのやうに、あたつばい素振などはされず、いかにも見よくゆとりのある心の持主であらうと薫には推量され

た。大君の御氣はひは、かうあつてはしいとかねて考へてゐたのと少しも違はない心地がする。話のきつかけごとに、大君に胸の中をほのめかしてみるが、一向それに氣がつかないやうにばかりあしらはれるので、薄も聞か悪くて、ただ昔物語などを、眞面目らしくお話をするのである。

藁の深い愛着に對しても、大君の無常を觀する心は解くべくもない。彼女はあくまでも、自分を世つかぬまゝに葬り去らうとする。

黒き袷一かさね、同じやうなる色合を着給へれど、これは懐かしうなまめきて、あはれげに心苦しう覺ゆ。——紫の紙に書きたる經を、片手に持ち給へる手つき、彼（中ノ君）よりも細さ勝りて、瘦せ瘦せなるべし。

これはその年の夏、藁の宇治訪問の際の大君の描寫である。喪服を着し、經を持った立身姿、これが大君のこの世に生ける像である。それはまことに有髮の尼である。それは修道院の黒衣の尼僧を思ひ浮べさせる。

三

入の宮逝去後の宇治には、川風もいと寂しく吹きがたであつた。ただ藤君と阿闍梨との心づくしで、故宮の供養も手厚く行離れた。一週忌の近い頃、藁は宇治を訪れた。

總角あひまに長き契りあひまを結びこめ同じ所によりもあはなむ

と訴へる藁に、

貫くわんきも敢へず脆き涙の玉の緒に長き裂りをいかが結ばむ（貫キトメラレヌ玉ノ如ク涙ハモロクコボレル、コンナニ弱クハカナイ私ニ、ドウシテアナタト末長イ約束ナド結ベマセウ）

と、身のはかなさを觀じて契りを結ぶなど思ひもよらない大君なのである。自分はこのまま朽ち果てようが、未だ若い盛りの中の君に、良き夫を迎へて世間並の生活を送らせたいと念願するのである。かく親代りとしての心遣ひに思ひ亂れる姿は、何といつても彼女自身若く美しいが故に、黨の心をひきつけるのである。近づかうとする黨を女は敬遠しようとするが、黨は大君の姿を見あらはしたい欲求をおさへきれず、遂に隔ての屏風を押し開けて中に入り、奥に入らうとする姫を引きとめるのである。大君は口惜しくつらいので、相手をたしなめるが、その様も愛らしい。黨は、くやしがる大君をなだめて言ふ。

『佛の前でお誓ひ立てでもませう。まあ、そんなに恐がらないで下さい。あなたの御心に反するやうなことはすまいと深く思ひこんでゐますから、人はかやうな、近々と逢ひながら二人が純潔である間柄とは夢にも思ひますまい。私は世間の人とは違つた馬鹿者で通してをりますよ。』

仄かな灯影に御髪のコぼれかかるのを黨はかきやりながら、姫のかたちを見ると、理想的な美しい氣品ある容貌である。そして、いぢらしい愛着の情が高まつてくるけれども、自分の姿を見あらはされたことを姫君が言ひやうもなく淺ましく悲しくて泣かれるのを、黨はかはいさりに思つて、大君がこんなに思ひつめないで、自然と心のゆるむ時節もあるであらうと考へるやうになる。

かうした女性に對する内省的なデリケートな心情は、光る源氏とも匂宮とも、否源氏物語に現れる男性の

何人とも異なる。そして又このやうな薫の性格に反映してゐるところの大君の特性である。現世への消極的な面、一つの諦観が、ここに現れてゐる。父宮の喪に服してゐる墨染の姿を見あらはされたことが、言ひやうもなくわびしくて、薫を怒むのである。峯の嵐も、まがきの蟲も、心細げに聞えくる秋の夜に、名香のかをりかうばしく匂ひ、橘の花やかに薫る奥深い一室に仄かな灯をかかげて、人の世の無常を語らふ貴公子と美姫の姿は、妖しくも美しくわれわれの心像に浮び上つてくる。

かくしてそのまま明方となる。『お互に何といふことなく、ただこのやうに、月や花を同じ心でめであそび、はかない世の有様を語り合うて過したいものですね』となつかしく薫が言へば、姫はやうやう恐しさも慰められる。薫の歌への大君の返し。

鳥の音も聞えぬ山と思ひしを世の憂きことは尋ね來にけり

彼女にとつては男女の愛情といふものは、堪へられない重荷であつた。彼女の心情は柔かく傷つきやすかつた。類なき心ばせの薫の愛情も彼女には憂はしい惱みであつた。わが世はかくて過し果ててむ——自らをこのまま葬り去つて、ただ中の君を薫に譲らうと決意するに到る。

四

父宮の忌服もすんだ九月、薫はまた宇治を訪れた。侍女の弁が薫に逢へとすすめるのにこたへて大君はい

「薫君は普通の人とは違つた御親切とばかり、いつも父宮がおつしやつてゐられたのをきいてみたので、

今となつては、何から何まで頼りにいたし、不思議なほど打ち解けてゐたのに、思ひがけなかつた。求婚のお心持があまりになつて、こちらをお怨みになるとは情ないことです。私にしても、夫を持つて、人並の生活をしたと思ふやうであつたら、あのやうにおつしやつて下さるものをおこわりはしないであらう。しかし昔から、さういふことは思ひ切つてゐるので、大層心苦しいのは、中の君がこのやうに盛りを過ぎてしまはれるのも残念です。本當に、かやうな住居もただ中の君お一人のために狭苦しく思はれますが、あの方が本當に父君の御在世の昔を、お思ひ下さる御親切があまりなら、中の君を私と同じに見て娶つていただきたいもので、さうしたら血を分けた妹のこと故、心の中ですつかりお譲りする心地がするであらませう。』

これが大君の眞情である。世の普通の人らしく生きることなどは、もはや諦めきつてゐるのである。ひたすら妹君の幸福をのみ考へる。その夜、薫は姫の室に忍び入るが、大君はとつさに、中の君を後に残してのがれ、薫は中の君と一夜をただ物語に明かす。この際の大君の中の君に對する心情は、まことに複雑なものがある。

その後、又薫は匂宮と共に宇治を訪ねる。その夜、匂宮は中の君に、薫は大君と會ふのである。が大君の心は依然として解けない。前の場合と同じやうな教養ある二人の人間のわびしい物語があるのみで、兩者の間柄は何らの變化を見ない。

匂宮はつづけて三日、中の君の所に通はれる。老女たちは、中の君を望み通りの御運といつて、大君の心が變に頑固であることを非難する。そのときの老女たちは、年に似合もしい派手な花やかな着物などを着

て取りすましてゐる。その姿を見て、大君は自分もやうやう盛りを過ぎた身である。あんな無恥なことをするやうにはなるまいと自ら心に戒める。鏡に映る己が姿を見ては、瘦せゆくわが肉體をいとほしみ、薫にあふことを恥かしく思ふ。

恥かしげならむ人に見えむことは、いよいよ傍痛く（薫ノヤウナ立派ナ人ニ逢フコトハ、マスマス心苦シク）、今一年二年あらば、衰へ勝りなむ（モウ一二年モタツタラ、一層衰へテシマフデアラウ）。はかなげなる身の有様をと、御手つきの細やかにか弱く衰れなるをさし出でも（細ヤカニ、カ弱い手ヲ袖カラ出シテシミジミト撫シナガラ）、世の中を思ひつづけ給ふ。 總角卷

彼女ほど自己の弱さを意識した女性はなかつたであらう。その自己弱小観には、自餘の矜持が奥深く潜んでゐるのである。わが若さ美しさの失はれゆくのを悼む憂きは、その美しい若い状態に於いて、その美しさと若さを葬らうといふ死への希求に通ずるものである。

包宮の中の君のところへの通ひのとだえがちなのを見て、人の身の上だけでも、結婚してからの女の不幸といふものについて、ひどく思ひ沈みながら、一層結婚生活を愛きものと思ひきめて、やはりひたぶるにどうしてこの中の君のやうに、打ち解けて夫を持つやうなことはすまい。夫婦になつた上は、立派な愛すべき人と思ふ薫の心でも、必ず辛いと思ふいやなことも起つてくるに相違ない。自分もあの方も、互に相手の缺點を見つけて、いやになるといふやうなことなく、お互に相手を尊敬してをる今の心を破らずに過したいものだ、ひたすら思ふ。

ここに求められつつあるものは消極的調和の相である。それは大君の聰明と弱さに根ざす人生觀の表れである。かくして彼女の肉體は、その精神の重量にたへかねて崩壊するにいたるのである。

それは十月一日のこと、匂宮は宇治に紅葉狩に來ながら、人目にせかれて中君を訪ね得ず歸つてゆく。大君は中の君の失望を一層あはれと思ふ。自分も世に永らへて、人の妻となつたら、このやうな悲しい目にあふであらう。やはり自分だけは、さうした夫から見すてられるといふやうな物思ひに沈むことなく、罪もあまり深くないうちに、どうかして死んでしまひたいと思ひ沈むと、氣分もほんとうに悪く、食物も少しもとらずに、ただ死んだ後のことはかり、明暮思ひつづけられるのである。

五

薫は大君の病氣のよしをきき宇治を見舞ふのであつた。さすがに大君は、薫との間、中の君のこと、亡き父宮のことなど思ひめぐらして感慨深き面持である。苦しげに語る大君の以前より懐かしげな様子であるが、或はこれが永い別れになる前兆ではないか、と胸がいっぱいになるのであつた。大君はこの世に生きとまらうといふ意欲はなかつた。ただ後に残るであらう中の君のことだけが、心のこりであつた。

十一月になつて又大君を見舞つた薫は、その重態に驚いて、初夜から始めて法華經を不斷に讀ませられることにした。薫は手づから看護したいと大君の病室に入った。「どうしてお聲へ聞かせて下さらぬか」と手を握へて驚かすと、大君は、『心の中ではお話もいたしたいと思ひながら、物を言ふのが大變苦しいございましてねえ。しばらくお訪ね下さらないので、もうおあひも出來ず、氣がかりのまま終つてしまふのかと残念

に思ひましたか……』

傍近くよる薫君を、大君は心苦しく恥かしく思ふけれども、これもかうした宿縁があつたであらうと、この上もなく、氣のおけないこの方を包宮とくらべては、懐かしく思ふのであつた。身に近く君の息づかひをききながら彼女は、自分の亡くなつた後、この方の思ひ出に残るのに、強情で思ひ遣りのない女だとは思はれたくないと、薄慮されて、さうやみやみと薫を病室から遠ざけるといふことも、よろしくない。薫君は公私を放擲して、大君の病氣平癒のためにつくす。ところが大君自身は、

自らも平らかにあらむと佛をも念じ給はばこそあらめ(大君自身デモ平癒シタイト佛ヲモ祈念サレタラ、ソレハ驗モアラウケレドモ)猶かかる序にいかでうせなむ(ヤハリ、コノヤウナツイデニドウカシテ死ンデシマヒタイ。この君のかく添ひ居て、残りなくなりぬるを、今は持て離れむ方なし(薫君ガカウシテ附キ切ツテキテ、スツカリ隔テモナクナツテシマツタノデ、モウ斷リヤウガナク夫婦トナラネバナラズ)。さりとして、かうおろかならず見ゆる心は(の見分りして、我も人も見えむが、心安からず憂かゝるべきこと(トイツテ、コンナニ眞實ニ見エル薫ノ心ガ夫婦ニナツテ後、カヘツテ薄ライデ、オ互ニワルク見エルヤウニナツタラ、ドンナニ寂シク、心外ナコトデアラウ)。若し命強ひてとまらば、病にこつつけて、かたちをも變へむ(若シドウシテモ全快シテ、コノ世ニナガラヘルコトトナレバ、病ニカコツケテ尼ニモナラウ)。さてのみこそ、長き心をも、かたみに見果つべき業なれと、思ひしみ給ひて、とあるにても、かかるにても、いかでこの思ふこととしてむと思すを、さまざまさかしき事はえ打出で給はで……

(サウスル道ダケガ、永クカハラヌ互ノ心ヲイツマデモツツケテユク唯一ノ手段ダト思ヒコソデ、トニモカクニモ、コノ出家トイフ望ヲ果サウト思フガ、サウマデリコウブツタコトハ薫ニモヨウ切り出サナイ…………)。總角卷

ここにあるものは、あくまで現世厭離であり、肉體的なものからの離反であり、物質的なものへの畏怖である。ここには現實的な未來への發展がない。ただ極度に縮小された現實の最も美しい部分を昇華せしめてその白い焰を把握しようとする、焦心のみである。彼女は極度に純粹を愛し、清淨を求めた。それは水晶のやうな純清さであつた。そしてそのやうにつめたかつた。

薫は弱り果てた姫に、生命の火を燃え立たせようと力めるけれど、遂に彼女は、物が枯れてゆくやうに、はかなく絶え入つてしまつた。しかも、それは生けるものの如き美しさと薫りをいつまでも失はなかつた。

一九 中 の 君

一

幼くして母君に別れ、さらに父宮を失ひ、いま又姉君の早世にあうた彼女は、ここに天涯孤獨の身となつた。今はただ、この世に頼む蔭としては、夫たる匂宮の君のみであつた。その君すらも、この頃は訪れも遠くなりがちであつた。父宮姉君の生前の縁によつて、頼りとする薫君にも、さすがにすべての信頼をかけることは許されない宿命にあつた。姉たる大君が、我から世を背いて薄命の甲に己が生涯を終へたのに對して、

妹の中の君は、いつの間にか、薄倅な境遇にとりかこまれて生きてゆかねばならなかつた。

宮のおはしまさずなりにし（父宮逝去ノ）悲しさよりも、（姉君ノ死ハ）やや打勝りて戀しくわびしきに如何にせむと、明け暮るるも知らず、惑はれ給へど、世に留まるべき程は、限ある業なりければ、死なれぬもあさまし。早蕨モロヘギ卷

大君の自立的傾向に對して、中の君の依存的傾向が見られる。この受動性溫和性が、結局匂宮との間を、さして強くないが、柔軟な紐帶で結びつけてゆくのであつた。

宮は宇治まで通はれることが容易ではないので、中の君を京に移さうと思ひ立たれ、その日を二月の朔日ごろと定められた。中の君はさすがに、なき父宮姉君の記憶も深いこの宇治を、今はと捨てゆくことに心を残すのであつた。その日も近くなるままに、木々の梢も花の咲かうとする氣はひを見せるのも心が残り、峯に霞の立つのを見ずしてゆくことも、そのさしてゆく京の住居も旅の宿のやうなもので、自分の永久の安住の地でもないであらうから、どんなにか心が落着かず、人の物笑ひになることもあらうかと、何かにつけても氣が進まず、小さな胸に餘る物思ひに心が屈して明暮をすこしておいでになる。

この惱みはかつての明石の上に通ずるものがある。世を捨ててこの宇治の山莊にかくれ住まれた父宮とのわび住居の中に育つた彼女の生活感情としては、華麗な装ひの貴人たちの中に、後見と頼む人もない孤獨の身を投ずることは、まことに不安な限りであつて、さうしたわびしい心もとない心を抱いて、彼女はつひに都に移る日とはなつた。この思ひ出の住居の宿守には、ひげの男と弁の尾が残ることとなつた。この侍女の

弁といふのは、薫の實の父柏木の乳母の娘で、薫はこの弁から己が身の上をはじめて知らされたのであつた。閑寂なこの山里も、新しい未知の世界に移つてゆかうとする慌しい騒ぎの中に、弁だけは、今はもう全く世をすてて、この山莊にあひ果てようとして、姫との別れを惜しむ。その弁に中の君は言ふ。

『京へ行つても、包宮との結婚生活が長つぎするか、まことに離かしいことと思はれるので、様子によつては又ここに歸つてくるかも知れぬと思ひますが……』

宿命といふものを素直に受容してゆく彼女は、自分が今赴かうとする新しい境遇が、幸福と平和の樂園でもないことを知覺してゐた。そして人の世の幸福を失つて、又この故郷に歸つてくるかも知れないことを豫知しながらも、包宮の愛情に一筋に頼つて、新しい世界に發足しようとするのである。ともすればなき父と姉への追憶と、寂しくはあつたが平和であつた昨日までの生活への愛着にためらひがちな姫は、日が暮れてしまひませうと皆にせき立てられて、心も落着かず、自分がこれから行くのは、どちらの方向であらうかと思ふにも、わけもなく物悲しい。

一體自分は何處へ行かうとするのだらう。愛し頼る夫との樂しかるべき生活の待つてゐるであらう新居への門出、何とはかなき傷心の情ではないか。春霞の中に、さやかにさし出た七日の月を見て、

眺むれば山より出でて行く月も世に住みわびて山にこそ入れ

と詠じ、おのが行末の心もとなさに、男君を知らなかつた昔を懐かしむのである。

中の君は匂宮の夫人として二條院にすむ身となつた。この二條院はもと源氏の邸で、紫の上が病を養つたところであり、その庭の紅梅と櫻とを忘れるなど、紫の上が幼き匂宮に遺言したゆかりの住居である。

悲しいことに、彼女の宇治のふるさとを出でるときの豫見は、杞憂に終らなかつた。彼女が都に移つて、いくばくもなくして夕霧の大臣の六の君と匂宮との婚儀の噂が彼女の耳に入るのである。

『それその通りでないか、どうしてどうして。數ならぬ身であるので、必ず人の物笑ひになる辛いことが出て來ようとは思ひ思ひ、過してきたことであつた。浮氣な御本性とはきき及んでゐて、頼りなく思ひながら、かうしてお側近くにあると特に辛いと思ふこともお見せにならず、いつもしみじみと深い契りばかりなされるのであつたのに、六の君が出來たために、自分に對する仕打が急にかはるだらう。その時はどうしてのんきにしてゐられよう。身分の低いもの同志の夫婦のやうに、まるで縁が切れてしまふなどといふことはないとしても、どんなに不安なことが多いであらう。やはり自分は不運に生れついてきた身であるので、遂には宇治の山里へ歸ることになるであらう』などと思はれるにつけても、『あのまま、宇治にゐて夫が通つて來なくなつたのよりも、宇治の山里の人々の思はくも聊かしい』と、返す返すも父宮の遺言にそむいて、草庵をはなれた輕卒をばかしくつらく思ひ知られるのである。

それにつけて、今にして思ひ合はされるのは姉君の聰明さであつた。姉君はお考へになることおつしやることが、何事につけても、とりとめのない頼りないやうにばかり見えたけれども、心の底のしつかりしてゐる所は大變なものであつた、中納言の君——薫の君が、姉君のことを今に忘れ得ないで歎いていらつしやる

やうであるが、姉君が若し御存命だつたら、薫君との結婚生活も、今の自分のやうな不幸なものであつたであらう、それを深く憂へて、決してそんな目にあふまいと思ひこんで、絶えず男君から遠ざかるやうに努力されて、尼にならうとまでなまつた、今御存命なら、きつと尼になつてゐられたに違ひない。今となつて考へてみるに、何といふしつかりしたお心がけだつたらう、父君や姉君のみたまも、自分を何といふ輕卒者だと思はれるであらうと、恥かしく悲しく思はれるけれども、今更何宮を怨んでもかひないこと故、このやうな怨めしげな様子を決してお見せすまいとじつとこらへて、さうした六の君との婚儀のうはさなど知らない風で過した。

その年の五月ごろから中の君は懷妊するのである。彼女はそれを甚く恥かしがつて、さりげなくもてなすのであつた。

中の君が臥せりがちであるときいて、薫はとある日、二條院に彼女を見舞つた。何宮と六の君とのことなどに思ひ惱む中の君を、薫は何で自分は何宮にゆつたのであらうと、口惜しく思ひながら、人の世のはかさや大君の追憶などを物語るのであつた。彼女はわびしさに堪へず、薫の心によりかかるのであつた。

『山里は寂しいが、人の世の辛いことよりは忍びやすいと、昔の人がいひましたが、今まではそれを比較して考へるといふこともしなかつたけれども、今はやはり、寂しくてもよいからうき世の辛いこととは没交渉で、ただ靜かに暮したいと思ひますが、さすがに思ふままにもできませんので、弁の尼がうらやましくございます。この二十日過ぎの父君の三週忌には、あの山寺の鐘の音をききたいと思ひますので、そつと連

れて行つて下さいませんでせうか、とあなたにお願ひ申し上げたいと存じてゐたのでございまして』

これは匂宮への不満の變形的な表れである。或は人生への一つの抗議である。つましい彼女の心情の動きは、かうした曲線を描いてゆくのである。父宮の供養をして、そのついでにかこつけて、そのまま宇治へ引籠つてしまはう、とまで考へるのである。

三

秋も深くなりゆく頃、十六夜の月の美しい晩であつた。匂宮と六の君との婚儀がとり行はれたのは。宮は今宵だといふことを中の君に知らせたくないと思つて内裏にゐたが、それでも中の君の様子が氣づかはれて、そつと二條院に歸つた。女君の愛らしい有様を、見捨てて出てゆくこともできず、いぢらしくて色々と慰めて、もろとも月に月を眺めてゐられた。

女君は、日頃もよろづに思ふこと多かれど、いかで氣色に出ださじと、よろづに念じ返しつつ、つれなきさまし給ふことなれば、殊に聞きもとがめぬさまに、おほどかにもてなしておはする様、いとあはれなり。(中ノ君ハコノホドズツト、色々ト物思ヒニ沈ムコトガ多イケレド、ドウカシテ憂ヘノ色ヲ外ニ出スマイト、ジツト辛抱シテオサヘナガラ、平氣ヲ装ウテキラレルノデ、夕霧カラ匂宮へ使ガキテモ格別キキトガメモセヌヤウニ、匂宮ニ對シテ、オホヤウニモテナシテキラレル様ガ、マコトニ可憐デアル。)

宿木卷

六の君の邸へと、そつと出て行かれる宮の後姿を見送ると、ただわけもなく胸がこみ上げてくるのであつ

た。

幼い頃から、世の中から忘れられたわびしい生活の中に育ってきたが、さびしい思ひはしても、こんなにこの世を愛い辛いものとは思はなかつた。父宮を失ひ、姉君に先立たれた悲しみの中にも、かうして生きながらへてきたが、今宵こそ、一筋に頼つてきた匂宮の愛情も、もはやこれまでと思はれる。來し方行く末を思うては、千々に心は亂れるのであつた。吹く風もあの宇治の荒々しい山風にくらべては、のどかに平安な住居であるが、今宵はさうも思はれず、彼女はさうの苦惱をかく歌つた。

山里の松のかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

六の君のもとからかへつた匂宮は、中の君の部屋を訪れ、愛の變らないことを誓はれるのであるが、中の君は、『ほんとにこの世は短いのでございますが、その短い命の終らない前に、あなたの無情なお心が見えさうですから（六の君の出來たこと）、この世のことは當てにもしませぬが、せめてこの上は、あの世の契りだけでも守つて下さるであらうかと、こんなに無情にあつかはれながらも、こりもしないで、お頼りする氣になります』といつて、中の君は一所懸命こらへてゐるやうだけれども、ようこらへ切れないのであるか、今日は泣かれるのであつた。

日頃も、いかで斯く思ひけりと見え奉らじと、よろづに思ひ紛らはしつるを、様々に思ひ集むる事しかれば、さのみもえもて隠されぬにや、こぼれそめては、とみにもえたためらひ給はぬを、いと恥かしくわびしと思ひて、いたく背き給へば……（常日頃、心ノ中デ嫉妬煩悶シテキルノヲ匂宮ニ見ラレタクナ

イト何かトマギラハシテキタガ、色々思ヒ集メルコトガ多イノデ、サウバカリモカクスコトガデキナイ
ノカ、コラヘテキタ涙ガコボレハジメルトイフト、急ニモ止メルコトガデキヌノデ、顔ヲスツカリソム
ケテヲラレル……) 宿木巻

男心の淺さを信じ切れぬながらも、女の弱さから愛の契りの言葉を、ついたのみならずこして來たが、
今や決定的に裏切られた口惜しさ悲しさに、今までつつましく堪へ忍んできた彼女も、遂に涙の堰を切つて
しまふのである。『いみじう忍び給へぬにや、今日は泣き給ひぬ』『こぼれそめてはとみにもえためらひ給
は』ず、涙に濡るる佳人のいたましくもいぢらしい姿である。

かくて、どのやうに珍らしい菓子をすすめても、食事などは自分に縁のないものやうに思つてゐるやう
である。夜も未だふけぬに六の君方へ行かれる宮の前驅の先拂の聲の遠くなるのをききながら、今宵も獨り
寢の床に、物思ひにふけりながら、この惱ましい懷妊のことなども、どうなるであらうか。短命な一族であ
るから、がういふついでに死んでしまふのではあるまいか、と命をさして惜しく思ふのではないが、何とは
なしに無性に悲しく、又身ごもつたまま死ねば罪障も深いといふのになど一夜をまどろみもせず、考へ明
かされるのである。

四

かくて匂宮は、中の君方へは遠くなりがちであつた。女君はつくつくと、數ならぬ身の程も考へないで、
高貴な人々の中に入つてくるべきではなかつたと、山路を踏み分けて故里を去つてきた頃のこと、うつつ

とも思はれず、いつそ夢であれよと、口惜しく、悲しくしばらくでもあの山深い宇治の里で、何物にも心を煩はされずに暮して見たいと、さすがに胸一つに思ひあまつて、さういふことは恥かしく慎しむべきことではあるが、つひに薫君に文を書いた。

その次の日の夕方、薫は中の君を訪れた。女君は匂宮への怨めしさなどは、打ち明けて語るべきことでもないで、ただみんな自分の拙ない宿命からであると、いふやうに思はせて、ただ一寸でよいから宇治へ連れていつてくれるやうに頼むのであるが、薫にはまだ姉の大君の形見としての中の君に、異性としての愛着の断ち切れないものがあるのを知り、彼女は全く心をよすべき頼り所を失つた捨小舟となり果てた自分を見出だしては、このわびしさにも、自らこのまま堪へてゆくほかはないと、誓ひ去るのである。

その日匂宮は幾日かぶりに二條院に歸られ、中の君への氣の毒さに、すぐ女君の方へ渡られた。女君はどうして隔てがましい様子を見せようか、宇治へかへりたいと思つても、頼りとする薫君には疎ましい心がある考へてくると、もうすべてを諦めるのである。

世の中、いと所せう思ひなられて、猶いと憂き身なりけりと、唯消えぬ程はあるに任せて、おいらかならむと思ひ果てて、いとらうたげに、心羨しき様にもてなして居給へれば……(世ノ中ガヒドク住ミ辛クナツタヤウニ思ハレテ、ヤハリ自分ハ辛ノヤスイ身ノ上デアツタト、タダ生キテキル間ハ、何事モアルガママニ從ツテ素直ニシテキョウト決心シテ、マコトニ愛ラシゲニ、無邪氣ニモテナシテキラレル

からした諦観的なゆとりのあるやさしさは匂宮を惹きつけてゆき、やがて男の御子が生れ、彼女の地位も確定して、平凡ではあるが、おだやかな明暮が過ぎてゆくのであつた。

二〇 浮舟

今はもうおかくれになりました光る源氏の君の腹ちがひの弟君にあたる八の宮を父とし、中將の君とよぶ女孀勤めの女性を母として、この世に生を享けてきながら、わたしは生れ落ちるからに不幸な女でした。父たる宮は一向わたしやわたしの母を顧みてはくれませんでした。母はつひにわたしを連れて陸奥の守である人の妻となり、遠い東の國に下りました。荒々しいあづまえびすの國で、少女時代のわたしはわびしいながらも母の愛情の中ですくすくと成長しました。やがて義理の父は京に上り、わたしも都に住む身となりましたが、いつしかわたしはもう、はたちを迎へる頃でありました。

まだ父、八の宮の存命中に新しい父が陸奥の守の任滿ちて上京した時、母は父に、わたしがすこやかに成人してゐる由を、そつと知らせましたのを、——父のもとには母の従姉にあたる弁の尼といふ母のことをよく知つた人もゐましたが——父はこれをききつけて、一切このやうな消息を受ける筋合はないと、すげなくはねつけられたさうです。母はさびしい心を抱いて、夫の新しい任地常陸に、わたしを伴つて下つてゆきま

した。さういふこともあつたさうです。

しかし母は、もう今度は父はこの世の人ではなくなつてみました。その父の縁故によつて、どうかしてわたしを相當な身分の人にかたづけたいと願つて、私には腹ちがひの姉にあたる中の君——この方は今をときめく匂宮（ニオーミヤ）の夫人になつてをられました——に私のことを託されるのでした。

わたしはわたしの生れた頃の父と母との心持のつながりなどは知る由もありませんが、なぜ父がそんなにわたしを、そしてわたしの母をしゃげんにあつかつたのだらうと、いつも考へるのでございます。母が父の愛をうけるやうになつたのは、父が中の君たちの母君を失つたあとの寂寥におちいつてゐた頃だつたと申します。きつと父は氣むづかしい道徳家で、謹嚴な人柄だつたに違ひありません。そしてさういふ型の男性によくありがちなやうに、少しわがままで自分勝手なところのある人だつたと思はれます。なぜと申しますに、わたしの存在を煩はしいものと思ひ、わたしが生れるやうになつてからは、母をも近づけないやうになり、たうとう聖同様の生活に入るやうになつたのです。母もつひにお側にもゐづらくなつて身をひいて再婚するやうになつたのでした。何だかわたしは、その生れ出ることを望まれない所に生れてきた薄命の子で、はじめからあつたやうに思はれてなりません。わたしは實の父も、腹ちがひの姉も、全く知らずに東國で育つてきました。そしてその姉——二人の姉のうち一人、大君はもうなくなつてしまつたが——にも積極的な氣持といふものは、べつにありませんでした。しかしわたしの母は、さうではありませんでした。それは母

の女らしい一筋の心のいたすところでせうか、八の宮の娘でわたしがあること、中の君の妹であることの主張を當然の權利である如くに信じこんでみました。そして私も、物心つくにつれ、義理ある姉妹たちとの暮しの中に、何といつてもわびしいことの出でくるにつけ、いつの間にか、貴い身分ある暮しをしてゐる姉にあふ日を待ち、また一度は宇治のなき父の墓に詣でたいと思ふやうになりました。

ところで、ここでお話の順序として、薫君と匂宮のことを、ぜひおはなしたしておきたうございます。薫君の宿命的なお身の上は、もうご承知のことと存じますので、ここでは申し上げませんが、この方は中の君の姉君の大君を、世に二人となく敬愛してゐられました、その方はつとに世の無常を觀じてゐられました、はかなくこの世を去られました。薫君は大君を失はねばならないなら、中の君を得たいと思つておいででしたが、すでに中の君は自分からすすめて匂宮の妻となられてしまつた後でした。ですから薫君の中の君に對する愛着は、決して消えてしまつたわけではありませんでした。そこで中の君は、なくなられた姉君の面影にわたしが似通つてゐるといふことから、大君の身代りとして、そして現實的には自分の身代りとして、わたしを薫君にすすめたのでした。結局わたしが誰かの身代りであつたといふことが、薫君とわたしとの結びつきを宿命的に不幸にしたのではないかと思はれます。もう一つ大事なことを、ご理解願ひたうございます。それは匂宮が中の君と薫君との友情に疑念と嫉妬とを執拗に持つてゐられたことです。この二つのことが、後にわたしの一生を左右する經となり緯となつたのでございますから。

ではお話をもとへかへしまして、順序だてて申し上げます。わたしが都に住むやうになつてから一年程たつた頃でしたか、都では賀茂の祭の賑やかな騒ぎもすんだ青葉の頃、わたしは長谷（ついで）に詣でまして、その中宿りに宇治のお邸に泊りました。そこには母と懇意な間柄の弁の尼が、中の君の京に行かれた後を守つてゐました。

その年の二月に、母とともに長谷詣でをした折、このなき父のすまひに參つたことがありました。その折のこと、弁の尼から薫君がわたしを望んでゐられるといふことを、それとなく母に話があつたさうですが、母はただわたしを大君にくらべられるなど勿體ないことですと應答したぎりでした。

さて、わたしが參詣をすませたの歸りに宇治の邸にいたとき、そこにはほかに客人が來合せられたといふので、誰か恥かしい人ではないか、はつきりわたし自身も意識したわけではないのですが、もしかしたら自分を望んでゐられる薫君ではないかといふ感じが、心のどこかでしたのでせう。車から降りるときにも、どうも何だか人に見られてゐるやうな氣がして、すぐにも降りられないのでした。やはりわたしの女らしい直覺はあたつてみました。そのとき扇で顔はかくしてゐましたが、濃い桂（ついで）に撫子の細長、若苗色の小桂（ついで）をきた姿を、すつかり薫君に隙見されたのでした。薫君は更に、家の中にはいつたわたしの様子までのぞき見して、弁の尼にしきりにわたしへの取次を催促されたさうですが、勿論そんなことは露知らず、わたしは一夜を過して都に歸つて參りました。

弁の尼から母のもとへ、鸞君がわたしをせひにと望んでゐるとたびたび消息をよこされましたが、母はあまり身分がちがふので、眞實に思ひこんでいらつしやることも思はず、ただまあどうしてわたしのことを、そんなにまで尋ね知られたであらう、當方が相應の身分だつたらなどと歎くだけでした。母には新しい父との間に五六人の子供が生れ、また義理ある先妻の子も數人ありましたが、父からうとんぜられがちな私を特に愛護してくれました。それにわたしただけは、姉妹の中では際立つて美しく成人しましたので、他の姉妹なみの結婚をさせるのは、如何にも口惜しく思つたのです。

娘が多いときいて、大した身分ではないがまあどうやら、きんだちと呼ばれるくらゐの若人どもの中で懸想文などよこすものが澤山ありました。その中に左近の少將といつて、年は二十二三で學才もあり、眞面目さうな方があつて、母はこの方を氣だてもやさしいやうだから、わたしの夫にと思ひきめて、時々返事など書かせられました。八月ごろにと約束して、母はわたしのために父にかくれてまで何かと準備をととのへて、その日を待つてゐましたのに、その人は媒の口から、わたしが常陸の介の實子でないときいて急に約束を破つて、ひとまあらうにわたしの腹ちがひの妹と結婚することになり、しかもわたしとの約束の日をかへもせず、その日から通ひはじめました。その男の欲したのは、わたしといふ女性ではなくして、常陸の介といふ男——後見役なのでした。それにしても、あんまりなやり方といふものです。この男の仕打と父の態度に、母は身も世もなくやしがりました。わたしも乙女心に恥かしく、くやしくてなりませんでした。

母は乳母と相談の上、わたしを中の君の所へ預かつて貰へないかと、中の君の侍女の大輔たいすけのもとに頼んで

やつたのでした。中の君もこのことについては、生前の父宮の思惑など色々心をも悩まされたやうでしたが、やはり妹としてのわたしの身にも同情されて、『西の對の方を目立たぬやうな居間を用意しますので、大變窮屈な所ですがそれでも御辛抱できさうなら、まあしばらくはそこにいらつしやい』と大輔の君を通じてご返事がありました。わたしも中の君と睦まじくしていただきたいと前から思つておりましたので、かへつてこのやうになつたのをうれしいと思ひました。思へばこの時の母の心はどんなに苦しかつたことでも。夫の常陸の介は妹婿の世話にやつきとなつてゐるので、母としては、それを見捨てて私を連れて出るのも、何だかひがんでをるやうで遠慮して、ただ夫のするのに任せて傍観してゐるのですが、やれ少將の御休息所だ、これはお供部屋などと大騒ぎしますので、家は廣いけれど先妻の娘の婿が東の對に住んでゐて男の子など多いのですから、どこにも場所がなくて、たうとうわたしの部屋へ新しい婿のあの左近の少將が住みついてしまふといふ有様で、廊などの端近い所へ、わたしを移り住ませるのも、まことにははいさうだと思つて色々思案するうち、中の君の所へとお考へになつたのでした。常陸の介たちが、わたしにはこれといふつかりした身寄りがないのを憐るのだと思ふので、中の君の方から特に仰せがあつたわけでもないのです。が、無理にお願ひして預かつていただくやうになつたわけでした。わたしの好きな乳母と若い人たち二三人を連れて、中の君のゐる御殿の西廂の間の北寄りの人氣のない所にしつらへた局に住むことになりました。中の君は長い間疎遠にはしてゐましたが、もともととうとは思召さぬはずの人故、母が挨拶に上りましたときも、疎略にはなさらずお會ひになりました。ご立派なお住居に、美しく氣品あるお姿で若君をあやして

いらつしやるご様子も、母は羨ましく思つては悲しくなつて、この自分といつても、この中の君の母君とは他人ではない——母はその方の姪でした——ただ自分が侍女としてお仕へしてゐた奉公人であつたといふばかりに、八の宮に入らしくも扱はれず口惜しくて、今又かやうに少將や常陸の介などに侮られると思ふにつけて、このやうに中の君にこちらから無理に近づきを頼むのもあぢきない、などと情なく思ふのでした。丁度、その日母は匂宮の様子を拜見したのですが、その美しさ、高貴なお暮しを見るにつけて、その供人の一人の平凡な顔附をした直衣に太刀を佩いたのが、かのわたしの夫になるはずだつた左近の少將ときいて、今まで少將を相當な人物と思つてゐたのもくやしく、急に輕蔑したくなつたといひます。その少將のことにつけても、母はわたしのことを中の君に頼んでくれるのでした。二三日して母はかへつてゆきました。

三

その日の夕方、わたしは庭の景色の美しいままに端近く添ひ臥してながめてゐました。何だか障子が少しあく音がして、入のくるけはひがありました、いつもこちらに來馴れた人だらうと思つて何気なく起き上りました。すると、つとその人影が近づいて、わたしの衣の裾をとらへてはいつて來られたのです。わたしはさつと扇で顔をさしかくして見返ると、貴いけはひのお方でした。その方は扇を持つたわたしの手をとらへて、『誰といふんですか、お名前を知りたいものです』と言はれるので、わたしは氣味が悪くなつてきました。その方は顔を屏風の方にかくして、ひどく自分をかくしていらつしやるので、あの自分に一方ならず懸想の心を仄めかしてゐられる薫の大將といふ方かしらと、香ばしい匂なども思ひ合はされるのですが、恥か

しくてどうしてよいか分りませんでした。そこへ乳母がいつもと違つた人のけはひを變だと思つてやつて來ました。『これはまあどうしたことせう』と申し上げるが、その方は平氣でゐられるのです。色々とやさしさうにおつしやるうちに日も暮れてしまつたけれど、『名前をきかないうちは許さない』となれなれしく臥されるので、やがてその方がこの驟のあるじ、中の君の夫である匂宮であることが、乳母にもわたしにも分りました。わたしはただ死ぬほど困惑してしまひました。丁度内裏から人が來て、宮はやうやう立ち去つて行かれましたが、わたしはがろくにお返事もせず、つれなくしたことを怨んでゆかれました。わたしは悪夢からさめたやうに汗でびつしより濡れました。ただ恥かしくて辛くて、思ひがけない目にあつたわびしさと、中の君はどう思はれるかと、うつ伏しに泣くばかりでした。

そのあくる朝、乳母は母のもとへ行つてこの次第を話しました。母は、中の君は一體どう思はれるであらう、又このままにしておいて間違ひでもあつてはと、物忌にかこつけて二條院からわたしを連れ出して、かねて方違へ所にと作つてゐた三條あたりの小さい家へ、未だ十分出來上つてゐなかつたけれど、そこへわたしを連れて行きました。『ああ、あなた一人をほんとに何處へどうしたらよいものだらう。思ふに任せぬ世にはいつまでも生きるものではありませんね。わたし一人ならどうなつてもいい、どこかへかくれて暮してゆきませうにねえ。中の君の所は、今までの八の宮方の仕打を心外に思つて怨んでゐたのですけれど、やはりあなたの將來のことを思つてはお世話をお願いしたのですが、面白くない事件でも出て來たら、全く世間の物笑ひになるでせう。ほんとに情ないことです。こんな殺風景な住居ですが、この隠れ家を人に知らせ

ず、こつそりかくれていらつしやい。そのうちに何とかして上げますから」と言つて母自身はかへらうとするのです。わたしはたださびしくかなしくて、この世に生きてゐることがむつかしいわが身だなあと思ひつめて、われとわが身をほかなく思つては泣くばかりでした。なれぬ住居はさびしく所在なく、庭の草もうつたうしい心地がするの、怪しげな東訛りの者ばかり出入りして、慰めに見るべき前栽の花もない荒れすさんだ住居の中で、一人しよんぼりと心の晴れる間とはなく明し暮してゐました。そんなときでも中の君のことを思ひ出すと、乙女心にやはりなつかしく思はれるのでした。あやにくだつた匂宮のおん様もさすがに思ひ出されて、何であつたか色々情ありげに言はれたことなど、また後までも匂つてゐたおん移り香がまだ残つてゐるやうな心地がして、恐しかつたあの時のことが思ひ出だされるのでした。母からは、わたしの身を案じてやさしい便りがありました。それにつけても、何と母に苦勞をかけるわが身の上かと、つくづくすまなく思ひました。

四

ある日のことでした。牛車がこのわび住居にはいつてきました。それは弁の尼君でした。徒然の折から、わたしは話相手が出来てどんなにかうれしかつたでせう。『いづぞや人知れずお目にかかりましてから、お思ひ出ししない折はありませんが、かやうに全く世の中を思ひ捨てました身でございますので、中の君の所へすら参りませぬでございますが、どういふわけか薫大將殿がしきりに仰せになりますので、思ひ立つて参りました』と尼君が言はれるのにつけても、わたしも乳母も、かねてご立派な方と存してゐる方ですので、

そんなにおつしやつて下さるのを有難くうれいとおききましたが、まさかそこへ、その靈君が訪ねて來られるやうに企ててゐようなどは、つゆ思ひありませんでした。宵を過ぎた頃、宇治から人が參りましたと言つて、尼君を訪ねる風をして來られた方がありました。何ともいへぬ香が薫つてくるので、それが薫君であることが分りました。「心やすい所で、月頃思ひあまつてゐることを申し上げたう存じまして」と仰せられるのに、わたしはどうご挨拶したらよいかしらんと困惑してゐました。乳母は「せつかくかうしてお出でになりましたのを、お上げもしないでおかへしはできませんまい、母上の方へかやうかやうだとそつとお知らせしませう、お近い所ですから」と言ふのに、尼君は「どうしてそんなに初心らしくする必要がありません。若い人同志がお話をなさつたくらゐで、さう急に深い仲になるものでもありません。それに靈君は不思議なほど氣持の靜かな、思慮深い方でもいらつしやるのですから、まさかお許しがなひのになれなれしくはなさりませぬまい」など言はれるので、たうとう雨の廂の間にお通したやうでした。それでも、わたしは氣輕に逢ふ氣にもなれませんでした。侍女たちはわたしを押し出すやうにするのでした。薫君はどういふ風になさつたのか、中へはいつてこられました。しかしなき大君のおん身代りといふやうなことは少しも言はれないで、ただいつぞや宇治で思ひがけなく隙見してから、わけもなく無性に戀しく思はれてなりませぬ、これもかうした約束事でもありませんか、自分でも不思議なほどあなたのことか思はれるのです、などとおつしやられるのでした。いつのまにか、夜明方になつた頃、突然君はわたしを抱いて車に乗せられ、わたしに付きそうてゐる侍女の侍従と尼君とだけを連れて出られたのです。どこか近い所へでもと思つてゐる

と、宇治へいらつしやるのでした。加茂の河原を過ぎほよまろ法性寺のほとりを過ぎる頃、夜はすつかり明けました。としの若い侍従は君のお姿をそれとなくお見上げ申して、何と美しい方かとうつとりした氣持でゐるらしく、外聞などいふことは考へもしないやうです。わたしはあまり意外なことに、まるで夢のやうでうつつぶしゝてゐますと、君は『このあたりは石ころが多いので辛いでせう』とわたしを抱き上げられるのでした。外には朝日の光がさしてきました。尼君はわたしを見るにつけて、なくなられた大君のことでも思ひ出されたのでせう、そつと涙をこらへかねてゐるやうです。侍従はもとよりそんな尼君の氣持は分るはずもないので、そもそもかうしてわたしと薫君との間が結ばれるのが、九月といふ婚姻を忌む月で縁起が悪いと氣にしてをり、その上に折角めでたいことのはじまりに出家姿をした者が、同車してゐるのを不吉に思ふのに、何で又こんなにめせめそ泣くのだらう、縁起でもない、憎らしく思つてゐるやうです。薫君もきつと折しも秋深い山路の朝の風情に、なき大君のことでも思ひ出すのでせう、物思はしげな様子です。尼君はまた涙を流してゐるので、侍従はいよいよ見苦しいことだ、かうした喜びの門出に大變忌はしいことがつきまತ್ತたやうに思はれてならないやうです。つまりわたしといふ人間のほかに、べつの人の靈魂がこの宇治にはゐたのです。薫君と尼君は、そのひとと共に住んでをり、わたしと侍従などは全然のけものにされてゐるのです。ですから侍従が尼君において不吉なものを感じ、私と薫君との行く末といふものに不安を感じたのは、彼女としてはただ若い女らしい直覺でさう感じただけでせうが、何かしらわたしといふものと薫君との間には、目に見えない一枚のヴェールが隔てられてゐたのでした。わたしといふ、その體內には女らしい血潮の脈打つ

てゐるこの生きた肉體がなくなつたわたしの姉だといふ大君の亡靈の薄衣を著て薫君に愛されたのでした。ここにわたしの不幸が胚胎したのでした。わたしは何もこれから起つてくるわたしの過失について、自己辯護をしようなどとはさらさら思ひません。それは、わたしもいけない女でした。ですけれども、わたしといふものが薫君に愛されたその結びつきに、何かしらわたしはうすらつめたものの介入を感じさせられました。その頃はわたしはそんなことは少しも意識してゐたわけではございません。侍従とても深い事情なとつゆ知らぬわけですが、若い女の敏感さで何か世の常でないものを感知して、ただいちづに尼君をにくんだのでございませう。

かうして宇治に着きましたが、わたしは都の母はどう思つてゐるだらうと心も亂れましたが、薫君がいかにも美しいご様子でしんみりといろいろ仰せられるので、少しは心も落着いて車を降りました。あたりは眺望の開けた、思つたより明るい住居でした。今までの鬱屈してゐた氣持も晴れてゆくやうですが、君はこの先わたしをどうお扱ひになるのだらうかと、そのみ心にかかつてなりません。君は一兩日ここに滞在する由を京へことわりの消息をされたやうでしたが、それからわたしの方へいらつしやいました。打ち解けたご様子が、ふだんよりはずつとなまめかしくお美しいので、わたしはきまりがわるいけれども、今更身をかかすわけにもゆかないのでそのまま坐つてゐました。なき父宮のことなど仰せられるのですが、わたしはただ遠慮がちにもうはにかんでゐるばかりでした。あの方はきつと物足りなく思はれたのでせう。琴こんの琴こんや箏そうの琴こんを取り出させられてお弾きになるのです。『昔父宮やあなたの姉君にあたる大君やみんなが揃つていら

つしやる時、あなたも一緒に成長なさつたのだつたら、今少しものあはれもお分りになられたでせう。宮のご様子は他人の私どもでさへ戀しう思ひ出されますのに、どうしてあなたはそんな田舎で長い年月を過されたのでせうね」とおつしやるので、私は侍従たちの着せてくれたこの着物を田舎びてゐると思はれはしないか、又この琴や箏を自分によくも知らないのになどと、恥かしく思つてゐる所へ、そんなことを言はれたのですから、もうたまらなく恥かしくなつて、白い扇を手の中でまさぐりながら黙つて物により臥してゐました。あの方は琴などもあの方に連れ添ふ女性としてふさはしい風に教へこまうとも思はれたのでせうかしら『これは少しはお習ひになりましたか、東でお育ちになつたのですから『吾が妻』といふことはおたしなみでせうね』などとお問ひになるので、『之の「やまとことば」さへ十分には習はずにまゐりましたので、まして吾妻琴などは』と精いつばいにお返事しました。全く才の利かない女ではないとお思ひになつたやうでした。ふと君は『楚王台上夜琴聲』と朗詠集の一節を吟じられました。わたしも侍従も美しいお聲だと、あの方のすばらしさを讃へたい氣持になりました。しかし君ははつと何かに氣がつかれたのか表情をかへられました。それはこの朗詠の前の句に、白い扇が不吉を意味する言葉があるのに氣づかれたのでした。しかしわたしも侍従もつゆそんなことは知りませんでした。わたしとあの方とは結ばれたはじめから、こんな不吉な前途に包まれてゐたのでした。しかしわたしはちつともそんなことには氣がつきませんでした。ただ何となしに世離れのした、あやしい白いうすものに包まれてゐるやうな明暮でした。これはあの方のこの世に生を享けてきた、世にも不思議な因縁からその系譜を引くものでせうか。それともこの世の人とは全く

ちがつてゐられた亡き父や姉の魂魄が、この宇治の住居にとどまつてなすわざであつたのでせうか。わたしのやうな女にはどう考へたらよいか分かりませんが、この日からわたしは奇しくも怪しき運命の糸にあやつられるやうになつたと思はれてならないのでございます。

五

宇治の山里にその年も暮れてゆきました。都からは時に使が文を持つてきましたが、ご自身は重いご身分柄もおありで、殆どおいでがありませんでした。都にはわたしの住む家を作らせてゐるから、そのうちに迎へにゆくからとのことでしたが、あの方はちつともお見えにならないし、わたしも何だかわびしく心細い日がつづくので、乳母のすすめで物詣でに京へ出て母にも逢はうと思つて、明日は出かけようといふ前夜でした。翌日の旅出に、みんなで着物を縫ふなど用意をしてゐましたが、夜も更けたのでやすむことにしました。もうみんな寝た頃忍びやかに格子を叩く音がしました、お聲も似てゐるし、ほかに誰が來られるはずもないので、わたしも右近もその方を薫君とばかり思つてお入れしました。

その方があの方でないと思つたときの驚きはどんなでしたせう。ただもう夢のやうに思はれてなりませぬ。その方が二條院で名前も言はなかつたことを怨まれるので、はじめて何宮であることが分かりました。さうした身分の方である上に、中の君はどう思はれるかしらとせんかたなく、ただどうすれば自分の心が安らかに生きて行けようかと思ふと、あまり思ひがけない運命の展開にただ途方にくれて泣くのみでした。いつ

しか夜も明けてきました。宮は右近をお呼びになつて、『心ないことは思ふだらうが、今日にかへる氣にれない。供の者はこの近くにかくれ、時方ときかたは京に行つて、自分は山に籠つてゐるとうまく取りつくらふやうに言へ』と仰せられるのでした。又こられることも難しいので、どうしても歸りたくたい、そのためにどんな面倒が起つてもいい、何事も生きてゐる間のことである、このまま歸るのは死ぬよりいやだと、かう深く思ひこんでゐられるご様子です。右近も人違ひであつたと、今はじめて知つて、氣もちがひさうになるのをじつてこらへてゐるやうでしたが、今更どんなに騒いでみた所をかひのないことだし、又高貴な方に失禮でもあるし、やはりかうなるのも逃れられない宿世であると諷刺した様子で、『今日、京の薫君の所からお迎へが來るのでございますが、どういたしませうか、かうした御宿世でございませうから何も申し上げませない。ただ折が悪うございます。どうか今日はお歸り下さいまして、お志がございましたら又ゆつくりお出直し下さいませうやうに』と申し上げても、いつかなお聞き入れにならず、『たとひ人が何と言つてもいい、又事態がどんなになつてもいい、かへるのはいやだ。お迎へには「今日は御物忌」と言へばいい』と、どうしても我を通されるのでした。かうしてその日はずつとおいでになるのでした。

あの方のゆつたりと落着いた學者か聖人様のやうなご様子とちがつて、この方は不羈奔放な情熱的な方でした。美しい高貴さと沸る熱情とが一點で合つた、しかも調子の高い線上で一致したとも申しませうか、何ものをも魅惑し服従せしめねばおかないほどの激情を持つてゐられました。薫君が高い山の中の靜かな湖とすれば、この方は南海の岸をかむ波濤でした。永い一生の伴侶としては勿論あの方がよいのでせうが、長

い間愛情に飢えてゐたわたしは、激しく且つ美しいこの方に、心を惹かれさうなのをどうすることもできま
せんでした。

この日から私の宿命的な苦惱が芽生え成長しました。今となつては、もうその頃のことは申し上げたくご
ざいませぬ。どうかお許し下さいまし。私は過ちを犯したのです。罪を犯したのです。二方のあひだにあつ
て、私はどうしてよいか分らなくなりました。そしてただ夢のやうな、魂をなくした人間のやうになつて、
その日その日を過してゐました。物に憑かれたやうな女になつてしまひました。宮がいらして宇治川に舟を
浮べて私を連れ出された一夜のことなど、今では夏の夜の花火よりもはかない夢なのでした。

六

四月の十日にはいよいよ薫君は、私を京へ移すことに定められました。私は身をさいなむやうな惱みにめ
つきりやつれました。丁度母が京から宇治に來ましたが、乳母たちと色々話をするうちにも、もしわたしに
過失でもあつたらわたしを勘當するつもりだ、などと言つてゐるので、私は身も世もあらぬ苦しさに、自分
はこの世からゐなくなつたがよい、きつとそのうちに自分の生きて行けないやうな破局が到來するであらう
と思はれてなりません、丁度夢の中でどうにもならない谷底に落ちこんで身悶える時のやうに苦しみ悶え
ました。その時ふつと宇治川の水音が一段と高く恐ろしげにひびいてくるのが聞えました。どうしてか、そ
の時にふつと聞えた川音が、耳の底にこびりついていつまでも消えませんでした。この時、死が私を招いて
ゐたのでした。私は生き長らへて恥をさらすよりは死なうと思ひました。しかし何も知らず、めつきり弱つ

た私のために祈禱するやうになどと、人々と話してゐる母のことを思ふと、心は千々に亂れるのでした。

今まで薫君はわたしのことに疑惑を抱いてゐられたやうでしたが、京からきた使が匂宮の供のものとかち合つて、たうとう事の次第が明らかになつたのでした。薫君からわたしをなじる文がありました。私はお門違ひだとお返ししました。文を返すことは忌むべきことだと言ひますが、もう最後の時が來たことを私は観念しました。それにしても、どうしてわたしと薫君との間には、不吉なことが暗い影のやうにつきまとふことでせうか。これも宿世の因縁と申すよりほかございませぬ。そして死ぬ日の用意に、人に見られては困る反古など火に焼いたり、水に投げ入れたりして始末してゆきました。薫君からは文をお返しして、何とも言つてこられませんでした。そのうち、ある日宮は心配のあまり、人に見つかる危険を冒してこられました。薫君方の人が嚴重に警戒してゐるので、中にはいれないで空しくかへられたといふことを、右近から聞きました。もう一刻の猶豫もできませんでした。

その晩わたしは泣けるだけ泣きました。今更何を歎かうといふことはありませんが、さすがに短い生涯を自ら斷つのですもの、若い女のわたしに、複雑な巨大な山のやうな悲しみが押しよせてきました。わたしの肉體の中の水分がみんな涙になつて、その涙が潤れるまでわたしは泣きました。そのあくる日わたしは釋をよんで、親に先立つ罪許し給へと、御佛に祈りました。親もこひしく、ふだんは思ひ出しもしない兄弟たちの醜い顔までも戀しく、やさしくしてくれた中の君はましてなつかしく、も一度逢ひたく思ひましたが、もとより詮ないことでした。夜になつたら、どうしたら人に見つからないで川に行かれようかと思ひなやみつ

つ臥してゐました。

七

わたしはつひに死ねなかつたのでした。そして再び生きてゐる自分を見出だしたのでした。わたしは氣を失つて宇治の院の藁の森に倒れてゐたのを横川の尊い僧都に助けられたのでした。ふと氣がついたとき、ただ一言わたしはかう言つたさうです、『生きてゐても用のない身ですから、川へ流して死なせて下さい』と。しかしそれも夢とも、うつとも分らぬ世界に、私がまだ彷徨してゐた時だつたのでした。僧都の妹の尼君は、私を小野せのに連れてかへり、わたしを死んだ我が娘の再生で觀音のお授けだと喜んで、娘のやうに扱つてくれるのでした。わたしは今までの自己の記憶を全然喪失してゐました。ただ自分は死なうと思つて身を投げた人間だつたといふことだけが、空白になつた自分の過去の中に、はつきり浮び上つてくるのでした。そのうち茫漠とした空虚の中に、漸く一筋の道がついてきました。あの夜わたしは、人が寢靜まつてから妻戸をあけて出て見ると、嵐が烈しく川波の音が響くきこえてきました。あの子の端に足を下しながら、何方へいつたらよいか惑つてゐましたが、今更うちにかへることもできかねて、この世からゐなくなつてしまはうと思ひ立つたことを人に見つけられるよりは、鬼にでも喰はれてしまつた方がましだと思ひこんでゐると、一人の美しい男が近よつてきて、『私の所にいらつしやい』と言つて、わたしを抱いて連れて行かうとしました。その人は匂宮といふ方であつたやうに思はれました。それから全く正氣を失つてしまつたのでございませう。何の覺えもありません。それからだんだん意識の下に埋没した記憶が呼び起され、母のこと薫君

のことなどが思ひ出されてまゐりました。

しかしわたしは死ぬべき女でした。いや自ら命を斷つた女でした。そして前のわたしは死んでしまつたのです。今生きてゐるわたしは前の半生のわたしであつてはならないのです。そしてわたしはもう普通の世の人であつてはならないのです。わたしが世俗の女としてこれから生きてゆくことは、もはや許されぬことです。死ぬべくして命を長らへた私は、死ぬ以外には尼として暮すほかはないのです。尼君は私を娘として養ひ、ゆかりの中尉といふ男にめあはせようと思いましたが、それはわたしの前半生に犯した罪を更に新しく重くさせるものでした。たうとう尼君の留守に僧都にお願ひして髪をおろしてしまひました。かうしてわたしは前の自分と今の自分を斷ち切ると同時に、前の自分の犯した罪の許されることを願ひました。今はただ昔の記憶のよみがへると共に、母のみなつかしく思はれるのでしたが、逢ふといふことは許されぬことでした。

八

ある日突然山から僧都の文を持つた少年が、わたしにせひ逢ひたいといつてまゐりました。籠の下から文を差し入れるのは、わたしの弟の小君（コギミ）でした。この子は、今は世を捨てようとした夕にも思ひ出された弟でした。父がちがふとはいへ、仲のよかつた子供の頃のことを思ひ出すにつけても、それは夢のやうでした。先づ母のことが聞きたくて胸が迫つて涙がこぼれるのでした。尼君は『この方はどなたですか、

どうしていつまでも身分をかくされるのですか、ご兄弟でせう、おつしやりたいこともありません、うちへお入れませう』と言ふのです。しかし考へて見れば、母もだれも今はわたしを世に生きてゐるものとも思はないだらうに、こんな變つた姿で逢ふことも恥かしく、『もう本心も失せ魂もなくなつてしまつたので、昔のことは何も分りません。ただ一人生きてゐた母が、未だ存命であるかどうか、そればかり心に離れず悲しいのでございますが、この子は小さい時に見たやうに思はれるのでなつかしいが、しかしこの子にも今更生きてゐるといふことを知られたくありません。ただ母が生きてゐたら、その人一人だけにおあひししたいと思います。ひます。この僧都の仰せられる人——薫君のことです——などには生きてゐることを知られたくございませぬ。必ず人違ひであつたとおつしやつてかへして下さい』と申したのでした。しかし人々は几帳を立てて小君を入れて、その人からの文を開かれました。それは紛ふかたなき薫君の文でした。

一向言ひやうもないあなたの不都合な心をば僧都様に免じて、今はどうぞあの歎かはしかつた頃の昔話なりとしたいと矢も楯もなく思はれます。じつとしてをれないこの氣持は自分ながら咎められます。まして他人の目には苦々しいことせう。

法の師と尋ぬる道をしるべにておもはぬ山にふみまどふかな

この人——小君のことです——をお見忘れになつたでせうか。手前の所では失踪したあなたの形見としてゐます。

このやうにはつきり書いてあるので、まぎらはしやうもなく、さうかといつて、前とは打つて變つた自分

の尼姿を小君に見られ噂でもされたら、どんなにかきまりが悪いであらうと思ひ亂れて泣き臥してしまひました。

『少し氣持がしづまつたら、この文なども思ひ出せませう。今日はやはりお持ちかへり願ひたうございませう。お間違ひでありましたら氣の毒ですから』と、わたしは文を尼君に返しました。小君は『わざわざお使にきたのですから何か一言おつしやつて下さい』と言ふのですが、わたしは黙つてゐますので、尼君は『ただかうはつきりしないご様子だといふことを申し上げたらよいでせう。それに大して遠方といふほどでもありませんから、よし山風が吹くとしても、又の機會にぜひお立ちより下さい』といふので、こんな具合で長居するのも變であらうと思ふのか、歸らうとするのでした。

人知れずゆかしく思つてきた姉の姿をよう見ないで歸るわびしさを胸に抱いて、とほとほと山路をかへつてゆく弟の姿が、じつと閉ぢた臉の裏に浮んでくるのでした。

源氏物語年譜抄

源氏年齢	事件	卷名
三歳	源氏の母、桐壺の更衣死去。	桐壺
六歳	源氏の祖母、桐壺の更衣の母死去。	
八歳	より十一歳までの間。藤壺入内、帝の寵を受ける。	
十二歳	源氏元服、左大臣の娘、葵の上（十六歳）と結婚。	
十七歳	源氏、伊豫の介の妻、空蟬に逢ふ。	帝木
	源氏、空蟬とまぢがへて伊豫の介の娘、軒端の萩と逢ふ。	空蟬
	この頃、源氏、前の春宮妃、六條の御息所（二十四歳）に通ふ。	夕顔
	源氏、頭の中將の妻で行方不明中の夕顔を發見、これに通ふ。夕顔急死。	
	空蟬、夫と共に伊豫に下る。	
十八歳	源氏、北山に藤壺の姪、紫の上（十歳）を發見、やがてこれを二條院に引取る。	若紫
	源氏ひそかに藤壺（二十三歳）に逢ふ。藤壺、源氏の胤を宿す。	

十九歳 源氏末摘花に通ふ。
藤壺、冷泉院を生む。

源氏、老女源の内侍と逢ふ。

二十歳 源氏右大臣の娘、弘徽殿の女御の妹、躰月夜に逢ふ。

二十二歳 桐壺帝退位。朱雀帝即位。

葵の上懐妊。葵の上、六條の御息所との車争あり。葵の上、六條の御息所の生靈に惱まざる。葵の上、夕霧を生む。ついで死去。

源氏、紫の上を妻とす。

二十三歳 六條の御息所、齋宮となつた姫(秋好)と共に伊勢に下る。

桐壺院崩御。藤壺、三條の宮に移る。源氏藤壺に逢はんとして三條の宮に忍び入る。

二十四歳 躰月夜、尙侍となり朱雀院に仕へる。

藤壺出家。

二十五歳 源氏里下りせる躰月夜のもとに忍び、右大臣に見あらはされる。

源氏、かつて逢うたことのある花散里を訪ふ。

二十六歳 源氏、須磨に退居。

末摘花

紅葉賀

花宴

葵

賢木

花散里

須磨

二十七歳 源氏、明石の上（十八歳）に通ふ。

二十八歳 明石の上懐妊。

源氏、赦免あり歸京。

二十九歳 朱雀帝退位。冷泉帝（十一歳）即位。

源氏、二條院に東院を造る。

明石の上、姫君を生む。源氏住吉に詣で、明石の上と邂逅。

源氏、花散里を訪ふ道、末摘花を訪れる。

源氏石山詣での途に、空蟬の京に上るに遇ふ。

三十一歳 秋好（二十三歳）、女御となり冷泉帝に參る。

二條院の東院成り、花散里ここに移る。

明石の上、母と姫と共に上京、大堰に住む。

源氏、明石の姫君を二條院に迎へ紫の上の子として育てる。

三十二歳 藤壺死去、三十七歳。

源氏、種之君に求愛、いれられず。

三十四歳 源氏六條院を造營、女方を移り住ませる。

三十五歳 頭の中將と夕顔との間に生れた娘玉鬘、筑紫にて成人、上京。源氏これを

明石

澤標

蘆生

關屋

繪合

松風

種

少玉鬘
初音

我が子として引取り養育。

三十六歳

頭の中將（今は内大臣）近江の君を引取る。

三十七歳

玉鬘、髭黒大將と結婚。

三十九歳

明石の姫君（十一歳）、朱雀院の御子春宮に入内。

朱雀院出家、女三の宮（十三、四歳）を源氏に託す。

四十歳

源氏、女三の宮との婚儀。源氏四十の賀。

四十一歳

明石中宮、皇子を生む。

四十七歳

紫の上病む。

女三の宮、柏木と逢ひ、その胤を宿す。

明石中宮、匂宮を生む。

女三の宮、薫君を生む。ついで出家。柏木死去。

四十八歳

五十一歳

紫の上死去、四十三歳。

胡蝶

常夏

野分

行幸

藤袴

梅ケ木

藤裏葉

若菜上

若菜下

柏木

横笛

夕霧

御法

五十二歳

源氏出家の準備に文段を焼く。

源氏死去。時期不明、五十二歳より八年の間のこと。

以下

年齢は薫君のそれを示す。

二十歳

薫君この頃よりしばしば宇治入の宮邸を訪ふ。

二十二歳

薫君、宇治入の宮邸の侍女辨より、實父柏木のこと、己が身の上を始めて

知る。

二十三歳

薫君、宇治に行き姫君の琴をきく。宇治入の宮死去。

二十四歳

薫君、入の宮の一週忌をとり行ふ。薫君、匂宮を伴ひ宇治に行き、匂宮は

中の君に逢ふ。匂宮二十五歳、中の君二十四歳、大君は二十六歳。

二十五歳

中の君、匂宮の夫人として二條院に移る。中の君懐妊。

匂宮、夕霧の娘六の君に通ひはじめる。

二十六歳

中の君、男子を生む。

入の宮の遺児、浮舟母と共に中の君を訪ふ。中の君、浮舟を引取る。匂宮、

浮舟に近づく。浮舟三條の家に移る。薫、浮舟にあひ宇治の邸に伴ひ、こ

こに住ませる。

二十七歳

匂宮、宇治に行き浮舟に逢ひはじめる。

幻隠

雲隠

匂宮

紅梅河

竹河

橋姫

権本

總角

早歳

宿木

東屋

浮舟

二十八歳

浮舟行方不明。

薫君、浮舟生存して叡山の小野にありと聞き、浮舟の弟小君を小野にやり浮舟を訪はせる。浮舟あはず、小君空しく歸る。

手蜻
習蛉
橋の浮

源氏物語系圖抄

